

十人目の男 [三幕・悲喜劇]

サマセット・モーム 作

(田原 創 訳)

登場人物

シヨージ・ウインター 下院議員（キャサリンの夫、不誠実な成り上がり者の主人公）

フランシス・エッチングム卿（五十歳、お人好しで自分に実務の才があると思っている）

ロバート・コルビー 下院議員（四十歳のハンサムな男、キャサリンの恋人）

ペリガル氏（総理大臣、フランシス・エッチングム卿夫人のいとこ）

ジェイムズ・フォード（ミドルプールにある非国教会の中心人物、重要な地元の政治家）

ボイス大佐（退役軍人、ジョージ・ウインターの代理人）

ウィリアム・スウェイル クリフ牧師（非国教会の牧師）

フレデリック・ベネット（ジョージが経営する会社の秘書）

エドワード・オドンネル（二十三歳の美青年、アンの恋人）

トンプソン（フランシス・エッチングム卿の執事）

グレート・ノーザン・ホテルのボーイ

キャサリン・ウインター（フランシス夫妻の長女、シヨージの妻、ロバートと恋仲）

フランシス・エッチングム卿夫人（五十歳、夫の欠点を面白がって見ている）

アン（フランシス夫妻の次女、エドワードと恋仲）

第一幕

パーク・レーン、ノーフォーク・ストリートにあるフランシス・エッチングム卿の家の客間。アダム様式（直線的で表面装飾を施した十八世紀イギリスの型にはまった様式）の部屋で、家具類には明るいチンツ（光沢のある平織り綿布）が掛けてあり、マントルピース（炉の前面周囲の装飾的構造全体）とピアノの上には写真が置かれていて、非常に多くの花が飾られている。舞台奥の背景にはアーチの下を通る路があり、もう一つの客間へと通じていて、この路を通って訪問客が執事に案内される。上手には大きな張出し窓、下手にはドアがあつて書斎へと通じている。

フランシス卿夫妻がいる。

フランシス・エッチングム卿は五十男で、中背、幾分頭がはげ上がつており、優しくて弱々しい顔をしている。彼は親切な人間で、うんざりしない限り、あらゆることについて、あらゆる人々に対して最善を尽くしたがっている。彼はすべてのことがスムーズに進むことを望んでいる。彼は自分の能力について気楽に考えている。やむを得ない事情で事件に巻き込まれてしまったが、自分に立派な実務の才があると思つている。フランシス夫人は夫と同じ年の美しい元氣な女性で、髪を赤く染めている。彼女にはどつしりとした、ほとんど堂々たる貫禄があり、みごとにガウンを着こなしている。彼女は夫の欠点に気づきながら愛想のよい嘲笑をもつて夫を扱つが、夫の欠点を不愉快に思うというよりもむしろ面白がつている。幕が開くと、フランシス・エッチングムが激しいいらいらの極致に陥っている。彼がいらいらと部屋を横切つている間、妻はにやにやと薄笑いを浮かべて夫を見守りながらたたずんでいる。いらだたしげな身振りで、彼は椅子にどすんと座る。

エッチングム 一体どうして昨日の晩に言つてくれなかつたのかね、アンジェラ？

フランシス夫人 「にこにこ」夜はぐっすり眠りたかつたんですもの。

エッチングム まったく、どういふつもりか分からんね。お前がぐっすり眠れたなんて、わたしには理解できんよ。もしなら一晩中目を閉じるなんてできなかつただろうよ。

フランシス夫人 分かりますわ。それに、あなたならわたしまで目を閉じないよう大変な注意を払つたでしょうね。

エッチングム わしは、目を閉じるのがやつこのことで、馬鹿な女の夫婦の問題で悩んでる暇なんかはないと思つたよ。

フランシス夫人 「笑つて」あなたつて本当に、随分超然とした見方で物事を見るのね、フ

ランク。あなたの話を聞いて、問題のその馬鹿な女があなたの娘だって想像できる人はいないでしょうね。

エッチングガム 本当のところ、アンジェラ、お前にはこの問題を軽々しい話にしないよう頼まなければならぬ。

フランシス夫人 「陽気に」それで、どうしようと思ってるかしら？

エッチングガム 「椅子から飛び出て」どうするかだつて？ わしにどうしろと言うのかね？

お前の話では、昨日の夜の十二時にケイトが服の一つも持たずに帰って来たつて言うが……。

フランシス夫人 ねえあなた、わたしが昨日の晩に言うとしたら、本当のことをこれ以上ないくらい不当にねじ曲げて言つてたわ。

エッチングガム 「いらいらしながら言い直して」ダンス用のドレスにパーティー用のコートをおおつて——スーツケースも持たずに、化粧ポーチすら持たずにやつて来て——亭主を置いて出て来たつて、お前に言うなんて……。とんでもない話だ。

フランシス夫人 まったくとんでもないわ。それに、実に必要なくらいドラマチックね。エッチングガム で、いつ家に戻るつもりなんだ？

フランシス夫人 戻るつもりはないつて、きっぱりと言つてるわ。

エッチングガム 「ほとんど我を忘れて」ここにいるつもりじゃないよな？

フランシス夫人 今のところそのつもりなのよ。

エッチングガム で、ジョージは？

フランシス夫人 どうして？

エッチングガム 亭主がこんな馬鹿げたことを我慢するつもりだなんて思わないだろ？ 彼

は何もしなかったのか？

フランシス夫人 あの子が着いた十分後にメッセージボーイを寄こしたわ——歯ブラシを持たせてね。

エッチングガム なんで歯ブラシなんだ？

フランシス夫人 知らないわよ。歯を磨くためだと思つてわ。

エッチングガム そうか、と言うことは、亭主はこの問題を深刻に考えていない訳だな。そう

だ、ケイトの気まぐれなんだな。幸い、彼は今朝ここに来ることになっているから……。

フランシス夫人 「遮つて」あの人が来るの？

エッチングガム ああ、彼の車で連れて行つてもらふ約束でね。一緒にシティーまで行くつもりなんだ。わしが彼をこの部屋に入れるから、その間にお前はケイトに話せるよ。恐らくあの子ももう考え直したことだろうし。ちよつとした心配りが足りないだけだから、すべて解決できるよ。ジョージは頭がいいから、使用人たちにもつと

もらしい説明をしてあるさ。

フランシス夫人 あなたは本当に万事がそんなふうによくと思つてらっしゃるの？

エッチングガム どうしてうまくいかないんだ？

フランシス夫人 賢明な人は自分の父親のことを分かっているものだつて言いますが、自分の娘のことを分かっている人の方がずっと賢明なのははっきりしてますわ。

エッチングム アンジェラ、頼むから明るく楽しくしようなんてしないでくれよ。

フランシス夫人 あなたはケイトのことをほとんど分かってないから、あの子が固い決心も
しないでこんな手段をとったなんて思うんでしょ？

エッチングム あの子が亭主のところへ戻るのを拒否するって言うのかい？

フランシス夫人 そうよ。

エッチングム それにしても、どんな理由があるんだ？ あの子は亭主を置いて出て来た訳
を言ったのか？

フランシス夫人 理由は何も言わなかったわ。あの子はただ事実を言って、泊めてもらえる
か聞いただけよ。

エッチングム じゃあ、あの子は亭主のところへ戻らにやいかんよ。

フランシス夫人 「まるでこれ以上ないくらい無邪気な質問みたいに」 どうして？

エッチングム 女の居場所は亭主のそばだからだ、アンジェラ。ジョージ・ウインターと喧
嘩する訳にいけないのは、同じ様お前にもよく分かっているだろ。わしは彼が
経営しているグループ会社のうち六社の会長なんだぞ。たまらない立場になるな
ケイトが正しかろうが間違っているようだが、わしはあの子の側につくと思われないか
らな。

フランシス夫人 あの人に借金があるの？

エッチングム いいや、借金とはちよつと違うな。

フランシス夫人 まあ！ 「エッチングムを見透かしたように見て、にこにこしながら」そ
れで、いくらなの、あなたが——借金とはちよつと違ってあの人に借りているの
は？

エッチングム わしたちは一緒にかなり多くの請負事業にかかわっていて、当然ある種の借
越口座を持っているんだ。清算するとしたら、多分、かれこれ五万ポンドは工面
しなけりやならんだろうな。

フランシス夫人 あらまあ、あなたは儲かっているだと思っていましたのに。

エッチングム ああ、儲かっておったよ。だが、実を言うと、最近えらくひどい目に遭って
しまつてな。わたしたちの利権はほとんどすべてが中央アメリカにあるんだが、あ
そこで革命が起きるなんて見通せなかったんだ。

フランシス夫人 可能性くらい心をよぎつたでしょうに。

エッチングム ああ、お前に責められるのは分かってたさ。それに、わたしの鉄道の一つが
いまましい地震のせいで破壊されたからと言って責められるのな。

フランシス夫人 それで、どうやって五万ポンドを工面するおつもりなの？

エッチングム まさにそこなんだが。実にまずいことになりそうなんだ。ジョージも途方も
ない苦境に立たされていてね。

フランシス夫人 ケイトに話した方がよろしいわ。あの子を呼びにやります。

フランシス夫人はベルを押して、伝声管の下で指示をする。

エッチングム あの子にはまじめに話さなきゃいかんよ、アンジェラ。あの子の振る舞いは

けしからんと言わなきゃな。

フランスス夫人 「くすくす笑って」いいえ、あなた。あなたがお話になって。

キャサリン・ウインターが入って来る。しとやかな女で、強く情熱的な顔をしている。かなり疲れた表情をしているが、その表情は自制的で断固としており、大問題に耐えてきて、今は逃れるために死に物狂いの努力をしていることを暗示している。非常に簡素な服装で、宝石類は結婚指輪しか身に着けていない。

キャサリン おはよう、お父様。

キャサリンはフランスス卿のそばまで行き、頬にキスする。

エッチングム 「心の内を表さないようにして丁重に」座ったらどうかね、キャサリン。

キャサリンは母親とかすかに面白がっているような目くばせを交わして座る。

エッチングム 「見事に父親の権威を計算に入れて」お前に言っておきたいことがある。母さんとわしがお前を呼びにやったのは……。 「急に始める」さてと、これはどういうことなんだ？ まったく馬鹿げている。間違いなく少しは自制というものをわきまえている年なのにな。

キャサリン 「冷静に」四年の結婚生活で自制というものはさんざん示しましたわ、お父様。

自制が習慣になっているのではないかと思っただくらいだわ。

エッチングム お母さんの言ったことが本当だと言うのか？

キャサリン 「静かに」ジョージとはできる限り長く一緒に生活しました。わたしが知ってどんな女性よりもずっと我慢したわ。でも、自尊心がある人なら誰にも我慢できないようなものがあるのよ。

エッチングム お前がジョージの行動について不満を言ったことは一度もなかったが。

キャサリン ええ。
エッチングム どうしてお母さんに一言も言わなかったんだ？ どうしてお前がジョージとうまくやっていけないのか、わしには想像もつかんよ。彼が満足させてくれていなかったなんて、お前が気まぐれで言ったことがあるとも思えんし。お前の小遣いは王侯貴族並なんだ。お前のパールのネックレスはロンドン中の女の羨望の的なんだぞ。

キャサリン ええ、そうね、あの人は気前がいいわ。わたしのパールのネックレスは素晴らしい宣伝になってきたんですもの。

エッチングム 「二言目を無視して、急に入る」それなら、何の不满があるんだ？

キャサリン ロンドンの半分が何て噂してるか、多分お母様はご存じだわ。

エッチングム 知ってるのか、アンジェラ？

フランシス夫人 ええ、あなた、根も葉もない噂であることを願ってましたわ。ジョージ・

ウインターほど世間の目にさらされている人なら——だって、今一番有名な投資家なんですもの——間違いなくあれこれ噂されますものね。

エッチングム いい女の二、三人と遊んでいたからと言って不思議じゃないが。

フランシス夫人 わたしに分かっているのは、状況はそんなことよりずっと先へ進んでしまったらしいってことなの。

エッチングム そんなのは、気の利く女なら目をつぶってればいい類の話だ。お前は世慣れた女だ、ケイト。男がどんなものか、知ってるだろ。許せる一定の範囲をジョージ・ウインターという男の気質まで広げてやらにやいかん。

キャサリン 分かっているわ、お父様。わたし、もう耐えられないところまで自分の生活にうんざりしてるの。わたしは大騒ぎするような女じゃないわ。耐えられないことが起きるまでは、口を閉じて目をつぶってたの。離婚する決心を完全にして、あの人を置いて出て来たのよ。お父様が何を言っても、わたしの気持ちは変わらないわ。

エッチングム だが、お前は彼と離婚できないぞ。お前は彼を不貞で訴えるしかなかったんだ。お前がそこまで法律を知らないはずはないが……。

キャサリン 「遮って」わたしが法律を知らないなんてことないわ。あの人が必要な条件はすべて完璧に受け入れるって請け合うわ。

フランシス夫人 ケイトったら。
キャサリン どうか聞かないでちょうだい。自分の心がすっかりよこれきっている感じがして……。

エッチングム まあ、もちろん、どんな問題にもいつだって二つの側面があるものだ。

キャサリン もう、お父様、上流社会ではよくあることだなんて言ってもらいたくないわ。男の人が……。ひどいわ！

キャサリンは嫌悪のしぐさをして叫ぶ。

フランシス夫人 『タイムズ』を読みに行かれたらどうかしら、フランク。ケイトと二人だけで話したいの。

エッチングム 「視線を妻から娘へと移して」ああ、そうだな。多分、お前なら何かしてやれるな。ケイトが言い張るんなら、どういふことになるか教えてやりたまえ。『タイムズ』は書斎にあるだろう。

エッチングムは出て行く。

フランシス夫人 「にっこりして」お父様はとんでもない勘違いをされてるわ。あの人は『デイリー・メール』以外は決してご覧にならないけど、ご自分は『タイムズ』しか読まないって完璧に信じてらっしゃるのよ。

キャサリン 「激して」ねえ、お母様、お母様はわたしの味方よね。わたしがどんなことに耐えてきたかご存じですもの。わたしのことをちよつとでもかわいいと思うなら、少しは気の毒に思ってくださいるに違いないわ。

フランシス夫人はキャサリンを冷静に見る。フランシス夫人はこの言い分の激しさには全く動じていない。フランシス夫人はしばらく間を置いてから答える。

フランシス夫人 よりによってどうしてこんな特別な時に亭主を置いて出て来たの？

キャサリン 人間の我慢にも限界があるわ。

フランシス夫人 あなたたちはかなりの間別々に暮らしてきたわ。文明人らしく、お互いに思いやりが足りないのをいいことにしてね。ジョージはあなたにほとんど干渉しないと考えていくらいだったわ。わたしの考えでは、好んで耐える女はいないわ——明らかに正当な理由のない離婚手続きが面倒くさいことにね。あなたには妙な潔癖趣味があるでしょ、ケイト。自分のわたし生活をありとあらゆる人たちにさらすのはただ事じゃないに違いないわ。

キャサリン 不名誉ということを選択するだけだわ。

フランシス夫人は一瞬間を置いてから、鋭く吐き出すように質問を投げかける。

フランシス夫人 あなた、恋をしてるわね？

キャサリン そんなこと聞く権利ないわ、お母様。

フランシス夫人 「かすかに微笑んで」怒るってことは、それが答えなんですよ。あなた、結婚したいのね。

キャサリンは答えない。キャサリンはいらいらしながら一、二歩進む。

フランシス夫人 どうなの？

キャサリン 恥じることは何もないわ。

フランシス夫人 それなら、あなたには隠すことは何もないって、わたしが思ったとしても当然よね。

キャサリン 「反抗的に」わたしにとってすべてが終わって、人生が無意味だと思った時、ようやく始まるんだって気がついたのよ。今まで耐えてきたこと全部を神に感謝したわ。だって、多分それで自分の心をとらえている大きな愛にわたしが適している度合いが増した訳ですもの。

フランシス夫人 ロバート・コルビーでしょ。

キャサリン ええ。

フランシス夫人 で、話がついているんでしょ？ 離婚が完全に成立したらすぐ結婚する

ついで。

キャサリン そういうことはまだ話し合っていないわ。

フランシス夫人 でもやっぱり、そのつもりだって思ってもいいんでしょう？

キャサリン ええ。

フランシス夫人 お父様がわたしに言わせたかったのは、あなたがジョージと争うとお父様が破滅するってことなの。ジョージがいろいろな会議で与えてくれている地位をお父様は続けられなくなるでしょうね。

キャサリン わたしが結婚する前より悪くなる訳じゃないでしょ。

フランシス夫人 お父様がジョージに五万ポンドも借金のあることがはっきりしている以

外はね。

キャサリン わたしを待ち構えている小さな幸せをまた奪い取りたいの？

フランシス夫人 自分の目で見て正しいと思うことをやってももらいたいわ。

キャサリン どうしてそんなひどいことが言えるの？

ジョージ・ウインター 「ドアを開けながら」入ってもよろしいかな？

ジョージ・ウインターがフランシス・エッチングムと一緒に入って来るジョージ・ウインターは筋骨たくましい男で、素敵な髪と素敵な目をしており、短い赤毛のひげが生えている。肥満の傾向があるが、人を惹きつけるいばった歩き方で身をこなす。陽気でそつがない男である。世界で一番人のよい人間のように見え、大いなる抜け目なさは時々しか目つきに表れない。いやな気分を見事に抑える力を持っている。キャサリンは夫の声に驚いて叫びながら振り向く。

キャサリン ショージ！

ジョージ・ウインター ねえ君、僕に会って嬉しそうにしてくれよ。単なる礼儀だけなんだから。

キャサリン ここに来るなんて破廉恥だわ。少しでも礼儀をわきまえていれば……。

ジョージ・ウインター 「穏やかに」ねえ君、僕は君のお父さんと仕事の約束があったんだ。

君が一時的に婚家を見捨てたからといって、僕が約束を守らないことを期待するのは理屈に合わないよ。

キャサリン 「父親に向かって」教えてくれればよかったのに。

エッチングム ねえお前、わしは望んでおったんだよ。お母さんと話をしたあと、お前が……。

キャサリン 「遮って」わたしの決意が最終的なものだって、どうしたら分かっていただけなの？

ジョージ・ウインター 人が決心したあとだからって、理由を聞いても遅すぎることはないよね。

フランシス夫人 わたしたちみんなのためにも、あなたはジョージが言うべきことを聞かなければいけないと思うの。

キャサリン 「ジョージ・ウインターに向かつて」お母様が言っていることお分かりかしら？
ジョージ・ウインター 「くすつと笑って」何となく分かる気がするよ。

キャサリン お父様はあなたに大金を借りているわ。あなたのグループ会社の半分の会長でもあるし。お父様が考えているのは、わたしがあなたと離婚したら、そのお金を払わなければなくなるだろうって……。

ジョージ・ウインター きつと、お義父さんの繊細な感覚からすれば、僕に借金したままでいるのは避けるだろうね。

キャサリン そして、あなたはお父様に重役の職を辞めさせるつもりなの？

ジョージ・ウインター 「皮肉って」お義父さんのことはよく知ってるから、お義父さんが重役の職に留まることを望まないのは確かだと思うね。

キャサリン まあ、そんなこと言うの不道德だわ。

ジョージ・ウインター さもなければ、常識かな？

一瞬の間があり、ジョージ・ウインターが次に話す時は大真面目になつてゐる。

ジョージ・ウインター ねえ、いいかい、ケイト。よく聞くんた。僕たちの利権はすべて中央アメリカにあつてね。僕が来るまで、あそこではレイシャム家の連中がすべてをやりたいようにやっていた。鉄道に、鉱山に、トロツコ——持つ価値のあるものはすべて持つてね。で、彼らを追い出すことはできないのは分かっていたけど、僕を仲間に入れさせることはできると思つたんだ。この十年間、彼らと必死に戦つてきた。彼らは僕を打ち負かすため、手段を選ばずにできることはすべてやつたけど、うまくいかなかった。そして、今、ゴールが見えているんだ。力づくで彼らを屈服させることができるんだよ。

キャサリン そんなの全然わたしに関係ないわ。

ジョージ・ウインター レイシャム家が一大事業に取りかかったんだ——「カンポ・デル・オロ」っていう名の鉱山でね。だけど、この前の地震で計画がぶち壊しになって、目的を遂げるには現金しかない時に、彼らは鉱山を売りに出したんだ。レイシャム家に都合のいいことは、僕にも都合だと思つたよ。考えるのに二時間かかったけど。僕は金を用意して、二週間前にその鉱山を買つたのさ。

キャサリン わたしには興味ないわ。

ジョージ・ウインター 興味を持ちなよ。マクドナルドをあそこへやつたんだ。

エッチングム マクドナルドはジョージのところの専門家でね。その筋では最も信頼できる男なんだよ。

ジョージ・ウインター それに、誠実、それも非常に誠実なんだよ。僕は毎日彼の報告を待っている。いつなるとき電報が来るかもしれないからね。電報が来たら、仕事に取りかかるよ。鉱山を資本金五十万ポンドの会社にするつもりなんだ。お義父さんには会長になつてもらつて、そうすれば、お義父さんは会社から五万ポンドくらいは得られるはずだよ。君に訳を言う必要はないけど、僕たちは待つている場

合じやないんだ。僕たちには現金が必要で、現金があればすぐに会社を作ることが出来るんだ。僕の唯一のチャンスはミドルプールにある。この前は僕の支持者の四分の三がそこから出たからね。もうすぐ総選挙の中盤だ。なのに、ミドルプールで僕が議席を取るのがどれだけ不確かか分かってるよね。議席を守るには、僕の個人的な人気によるしかないんだ。僕の人気は非国教徒次第だから、離婚の話なんかあつたら、もう終わりだ。彼らは選挙の前に僕を引退させるだろうし、そんなことになれば、新しい会社はまったく見込みが立たなくなる。

フランシス夫人 どうしてなの？

ジョージ・ウインター 一般大衆を不安にさせると、僕はミドルプールに頼らなければならなくなるけど、あそこでは僕の人格で人気を上げることしかできませんからね。キャサリン あなたは随分自分本位に考えるのね。でも、もうわたしには自分を犠牲にする力はないわ。

ジョージ・ウインター 「カンポ・デル・オロ」が失敗したら、僕が関係しているほかの会社も全部倒産するだろうね。レイシャム家はチャンスを捕らえて僕に襲いかかるだろうよ。僕は崖っぷちに立っていて、僕を一押ししたい奴は、僕をおしまいにするだろう……。お義父さんも僕も破滅するということだ——多分、君は気にしないけど——全国の何千もの貧しい投資家の破滅でもあるんだ。ミドルプールの人口の四分の三が貯金を失うだろうね。

キャサリン あなたがわたしに嘘を言ったことが随分何度もあったわ、ジョージ。

ジョージ・ウインター 僕の一言一言が本当だって、簡単なたとえで説明できるよ。

キャサリン 働かないでお金を稼ぎたいギャンブラーにそれほど同情しないわ。貯金を失つても、それは自分の選択でしょ。

間がある。ジョージ・ウインターはキャサリンを見て、独りでうなずく。

ジョージ・ウインター 「エッチングムに向かって」もう行った方がいいですよ。あとの話

は人に聞いてもらう必要がありませんから。

キャサリン もうこれ以上話すことはないわ。

ジョージ・ウインター 馬鹿なこと言うなよ。僕にとっては生きるか死ぬかの問題なのに、君は思っているのか、僕が……。[話を止めて]どうか、フランシス夫人。

フランシス夫人 もちろん、二人だけにしてあげるわ。行きましょう、フランク。

フランシス夫人と夫は出て行く。

ジョージ・ウインター 「目を輝かせて」君が出て行くことに、ご両親は全くの賛成という訳じゃないと思うよ。

キャサリン 昨日の夜のあの不愉快な場面を繰り返したいの？ 本当に、お互いに言うべきことは全部言ったわ。

ジョージ・ウインター 「肩をすくめて」いいかい、君が僕と関わりたくないってことをは

つきり見せつけていなかったら、僕はほかの女たちと馬鹿な真似はしなかっただろうよ。

キャサリン その話はもうしたくないわ。

ジョージ・ウインター 「くすくす笑って」何にしろ、まるで僕がお構いなしにあんなことやってみたいだね。

キャサリン 「顔を赤らめて」それで、事態がいくらかよくなるって思うの？ あなたがあのひどい女たちをいくらかでも愛してたんだったら、許せたと思うわ。なのに、愛してすらいなかった。ただあなたの虚栄心を満足させるためだけに、わたしはあのあらゆる屈辱にさらされたのよ。あなたがあの女たちをどんな風に扱ったかわ知った時、わたしは、わたしでさえ、彼女たちが気の毒に思ったわ。

ジョージ・ウインター お望みなら、真面目に誓って言うよ。これからはお小言をちようだにするようなことはいたしません。

キャサリン もう遅いわ。あなたが自由になるチャンスを与えたから、わたしはそれを生かすつもりよ。

ジョージ・ウインター 君はこの契約の自分の役割を守っていない。

キャサリン どういうこと？

ジョージ・ウインター 君は僕を愛してたから結婚した訳じゃない……。

キャサリン 「遮って」そんなことないわ。

ジョージ・ウインター 「にこにこして」考えてごらん。

キャサリン 「ためらいながら」一年前なら、そんなことないわって言い返したでしょうね。

愛するってどんなことだか知らなかったんですもの。

ジョージ・ウインター 君は、僕が金持ちだから結婚したんだ。

キャサリン 「むきになって」いいえ、違うわ。

ジョージ・ウインター 僕にはチャンスがないと思われていたくらいだから、与えられた議席は正に勝ち取ったところだった。僕が自らミドルプールに乗り込んで僕に投票せざるを得なくしたんだから、自力で勝ち取ったんだ。僕は世間の注目を浴びていた。もう権力者だった。世界は僕の言いなりだと思えたよ。

キャサリン そんなことはみんな大して害を及ぼさないわ。あなたはわたしを嬉しがらせた。あなたがもたらしてくれた生活はとても範囲が広くて中身も十分満たされていたように思えたし、わたしはとても若かった。あなたが輝いていて成功していたから目がくらんだのよ。それが愛だと勘違いしたんだわ。

ジョージ・ウインター そして、僕は妻が欲しかったから君と結婚したんだ。たまたま君には公爵のおじがいたし、急進派の政治家にとって、イギリスでは貴族のコネはすごく役立つものさ。

キャサリン 「辛辣に」ええ、そうね、あなたがわたしと結婚した理由がすぐ分かるのに十分だったわ。

ジョージ・ウインター それは双方がやるべきことの取り決めだし、君はその利益の分け前をまるまる受け取ったんだ。

キャサリン 「憤激して」まあ、どうしてよ？

ジョージ・ウインター 君はずっとちっぽけな生活をしていたけど、僕が立派なものにしたんだ。僕はこの契約の精神的な部分まで自分の役割を守ってきた。財産分与の話でお義父さんのことには触れなかったよね。だけど、この家の家具は棒切れに至るまですべて僕の金で買ったんだ。お義母さんが背負い込んでいる服ですら僕が払うのさ。

キャサリン そんなことないわ。

ジョージ・ウインター 君のお父さんに、僕が上げている金だけの価値があるなんて、君も思わないだろ。お義父さんが役立たずなのは、ウエスト・エンド（ロンドンの中央部西よりの地域、富裕階級の住宅地）出身でシティー（ロンドンにあるイギリスの金融・商業の中心地）に來れば金が稼げると思っているほかの大馬鹿者どもなんかと同じだよ。馬鹿者が自分を金融の権威だと思っている。バケツ屋の掃除婦の方がまだましだよ。

キャサリン お父様には名前と地位があるわ。

ジョージ・ウインター 今日日は田舎の副牧師だつて肩書がパンフレットに載るのを嫌うものさ。お義父さんがもらう給料は君への支払いにすぎないんだ。

キャサリン もう、そんなことみんな、随分何度も聞かされてきたわ。何年もの間、あなたはお金でわたしをいじめてきたのよ。わたしは随分馬鹿だったわ。あなたがわたしを非難する理由が少しでもある訳じゃなくて、出て行くのは不誠実だつて言われたから、すべてを我慢したなんて。わたしは拳を握り締めて苦しんだわ。

ジョージ・ウインター 「くすくす笑つて」ダイヤのティアラに。パキン（ジーン・パキン、一八六九〜一九三六、フランスのファッション・デザイナー、革新的なデザインで知られていた）のドレスを着てね。

キャサリン 最後まで我慢する力を持つとうと思つたわ。でも、持てなかった。あなたが買った品物で払ったお金の価値が分からないとしたら、それはあなたの責任よ。いいこと、結局わたしはあなたから大事なことを教わつたのよ。

非常に短い間。ジョージ・ウインターは妥協しようと決意する。

ジョージ・ウインター ねえ、いいかい。僕は喜んで妥協するつもりだ。戻つて来てくれないで頼まない。君は好きなどころで好きなように生活すればいいのさ。年五万ポンドあげるよ。お義父さんも重役を続けたい。頼みたいのは、離婚を求めないことと一定の公式行事に僕と一緒に出てもらうことだけだ。

キャサリン 「かつとなつて」わたしは自由になりたいのよ。わたしは嘘と偽善の環境の中で暮らしてきて、ほとんど息もできないくらいなの。あなたが親切なのは単なるポーズだし。寛大なのは人にそう思わせるためだけなんだわ。あなたが気にするのは自分の利益を追求することだけなんだから。だけど、わたしは、わたしの知らないあらゆる種類のうさんくさい事柄が自分の周りで進行しているという恐ろしい気持ちから逃れたいのよ。

ジョージ・ウインター 「鋭く」何だつて？

キャサリン あなたが正直者でないことは分かっているのよ。

怒声をあげて、ジョージ・ウィンターはキャサリンの肩を激しくつかむ。
一瞬、感情を抑えられなくなっている。

ジョージ・ウィンター 何だと？ どういうことだ？ どういうことなんだ？

キャサリン わたしにけがさせる気？

ジョージ・ウィンター 「ほとんどはつきり発音できないくらい怒って」くそっ、よくもそんなことが言えたもんだ。

キャサリン 離してちょうだい。

ジョージ・ウィンター どうして答えないんだ？ どういうことだ？

キャサリン 「身を振り放しながら」言っただけ。あなたは、必要があれば盗みだつて平気でする人なのよ。

ジョージ・ウィンター 「ほっとして笑いながら」それだけか？

キャサリン 何年もの間、それが怖くてわたしは苦しんできたの。あなたがくれるパールはどれも——無理やりわたしに受け取らせたけど——まっとうな手段で手に入れたものかどうかって、自問してきたわ。だから、あなたから逃れたいのは——わたしに戻るよう説得しようとしている今でさえ、わたしを虐待したのが憎らしいから、そして、わたしの前に次から次へとくだらない策略をひけらかしてきたからだけじゃなくて——この財産が全部、嘘をつくことと騙すことと悪事を働くことのお陰だと感じるからなのよ。

ジョージ・ウィンター 「ふざけて」となると、僕が今までのところ見つからずにうまくやってきたことを君が認めることになるね。

キャサリン 「ジョージのセリフに構わず」それにもう、あなたにはこれ以上わたしに言うべきことがないのは確かだわ。

ジョージ・ウィンター 「優しく微笑んで」ねえ君、君は自分が婚家に戻ることが僕にとつてどれだけ重要なことか分かっているながら、僕が君を説得する何らかの手立ても持たずに来たとは思っていないだろ。

キャサリン 間違いなく、あなたは時間を無駄にしているのよ。時間は貴重だって、あなたはずつと言ってきたじゃない。

ジョージ・ウィンター 「これ以上なくらい楽しそうに」君は、自分の思い通りに条件をつけられるって、勘違いしているみたいだ。

キャサリン わたしは何も条件はつけていないわ。自分が決意したことを知らせているだけよ。

ジョージ・ウィンター 「ポケットから手紙を取り出し、テーブルの上でそつと広げる。」
僕はある形の俗物根性に苦しんだことはなかった。あの俗物根性のせいで、自力でのし上がった大勢の男たちが自分の生い立ちをイギリス国民の前におおっぴらにするんだ。イギリス国民がこの上なく切望しているのは、その男たちが高貴な家の出だと思つて、それを口実にすることなのに。でも、僕は自分の生い立

ちが卑しいのを君に隠さなかった。

キャサリン 「疑わしげに」何なの、その紙は？

ジョージ・ウインター 「質問を無視して」僕の生い立ちが卑しいということは、僕が君と、素晴らしいけど貧乏な君の家族と結婚した時に、君が飲み込まなければいけないかった一服の錠剤なんだ。僕の人生は友達も金もないところから始まったけど、抜kindでた才能だけがあった。成功する最も簡単な方法は恐喝することだってすぐに悟ったよ。家庭に大きな秘密がある人間が多いのには驚くよ。そういう評判を落とすようなネタを見つければ、たいいてい家族全部と親友になれるんだ。退屈させてないよね？

キャサリン 拷問してるわ。

ジョージ・ウインター これは、君も覚えてるはずの手紙の写しだよ。原物が随分しわくちゃだったところを見ると、あの手紙を枕の下に置いて寝るほど君が熱烈だったって思わざるを得ないね。始まりはこうだ。「僕のとても愛しい人……」

キャサリン 「遮って」どうやって手に入れたのよ？

ジョージ・ウインター どうして世間の連中がラブレターを書くほど馬鹿なのか、僕には分からんね。僕なら絶対に書かない。電報を打っただけさ。

キャサリン 「目をぎらつかせて」わたしの化粧道具入れのところには行かなかったわよね？

ジョージ・ウインター 「面白がって」行ったとも。

キャサリン 「自分のブレスレットについているブラマ錠(錠の前後方向の動きで作動する)の鍵を見ながら」壊して開けたのね？

ジョージ・ウインター 君に化粧道具入れをプレゼントした時、君がなくなった場合のために合鍵を作ったのさ。

キャサリン そういふのは汚いわ。そういうのが——そういうのが正にあなたらしいのよ。ジョージ・ウインター 「微笑みながら」一体どうして、君は手紙を残しておくほど軽率なんだ？

キャサリン 「憤然として」あなたを信用できると思ったからよ。あなたがわたしの個人的な書類をのぞくなんて思いも寄らなかったわ。

ジョージ・ウインター 「くすくす笑って」ばかばかしい。君はピンクのサテンのパーティー用の外套を着て家を出るといふドラマチックな行動にうっとりしていたから、手紙のことなんかすっかり忘れたのさ。

キャサリン わたしのどの手紙だって、恥じることは何もないわ。

ジョージ・ウインター これを見たいのかね？

キャサリン 「手に取るのを拒否して」害になるものなんか絶対にあり得ないのが分かっているもの。

ジョージ・ウインター 賢い弁護士ならこの手紙をどう理解するだろうね。このあいまいな言葉の形と内容がだんだんはつきりしてくるようにこの手紙が朗読されるのが想像できるよ。ちょっととした皮肉やおかしな強調が随所にあつて、下級法廷が笑い転げるのが見えるくらいだ。君の友達のロバート・コルビーみたいな議会の大

物が物笑いになる道を選ぶなんて、想像もつかないね。あいつが今光彩を添えている高い地位に出世したのは、ユーモアを解する力が全然なかったからだけなんだ。

キャサリン 「驚いて」 どういうこと、ジョージ？

ジョージ・ウインター 「上機嫌で」 ねえ君、僕は不服申し立てを提訴するつもりだ。それだけのとき。君が汚い下着を人前で洗いたいのなら、完璧な大掃除をしようよ。
(君が内輪の恥をさらしたいのなら、徹底的にやろうよ。)

キャサリン 「軽蔑して」 まったく、ねえジョージ、そんな風に脅かされるようなことはいかに無関係かだけでも分かってらえたらいいんだけど！ わたしたち、気が咎めるようなことは何もしていないわ。

ジョージ・ウインター 「からかって」 君にはびっくりだな、ねえケイト。絶対に君が覚えていないはずがない。ロバート・コルビーが、自分から政務を離れる短い休暇を急に取って、この前のイースターに北イタリアを旅行したけど、君もついて行ったんだ。

キャサリン 「勘を働かせて」 そんなことないわ。分かってるくせに。わたしはバーバラ・ハーバートと行ったのよ……。

ジョージ・ウインター 「遮って、目をかがやかせながら」 それに、メイドとね。いつだって、メイドを信用するのはちよつと危ないな。特に、スコットランド人のメイドは生まれつき信仰心が強いからね。

キャサリン 今、何をしていたの？

ジョージ・ウインター 「ポケットから紙のようなものを取り出しながら」 ここにもう一つ、ちよつと面白い書類があるんだ。いささか苦勞して手に入れたんだけど。まったく！ 自分の愛妻が—— 日かそこらのうちに手に負えないことになりそうだと気づいたから、いずれやつつけるために使う武器を手を持っている方が安心だと思ってるね。君たちが泊まったホテルのリストだよ。読もうか？

キャサリン 読みたければ、どうぞ。

ジョージ・ウインター 「えらく楽しそうに」 ミランで君が泊まったのは『パレス』で、ロバート・コルビーは『カヴァール』だ。

キャサリン 「辛辣に」 それが証拠になるって言うの？

ジョージ・ウインター でも、多分、『パレス』が騒々しかったから、ロバート・コルビー氏の方がいい判断をすると信じて、ベニスでは二人とも『ダニエリ』に泊まったんだ。

キャサリン 「肩をすくめて」 ほかに泊まるどころがあるって言うの？

ジョージ・ウインター ベニスにはホテルが二十三あるって旅行ガイドで見たけど、多分、君たちが二人とも『ダニエリ』を思いつくというのが、極めて自然だね。そして、君は用心してあいつより二十時間遅れて着いたんだ。でも、ラヴェンナでは、用心なんか風に吹き飛ばして(無鉄砲にも)、同じ日に同じ列車で着いて同じホテルに泊まったんだ。

キャサリン あそこにはホテルが一つしかないもの。

ジョージ・ウインター 君は十七号室と十八号室を取って、バーバラ・ハーバートは五号室を取ったね。

キャサリン 二階には一部屋しか空気がなくて、もちろん、わたしはバーバラが使うべきだって言い張ったわ。

ジョージ・ウインター 極端に相手を思いやって、まったく君らしいよね。でも、ちょっと軽率だったとは思わないのかね？

キャサリン 恥ずべきことは何もなかったわ。だから、恐れることだって何も無いのよ。

ジョージ・ウインター 僕は、そういうのは単純な人間の最大の欠点だと何度も思ったことがある。その欠点のせいでひどく軽率になるんだ。

キャサリン わたしはあなたにちゃんと承諾をもらってイタリアに行ったのよ。あなたに手紙で言ったように、ロバート・コルビーと会ったのは、ベニスで偶然一緒になったからだわ。実際、二人とも同じ旅の途中だったから、協力したのよ。何も害はなかった。今でも何の害もないわ。今言った事柄をどう利用するかはあなたの勝手だけど。

ジョージ・ウインター それで、君は、君とロバート・コルビーがただ教会や絵画を見るためだけに一緒にイタリアを旅行したなんて、イギリスの陪審を説得できると思うのかね？

キャサリン ジョージ、今分かっているのは、わたしはあなたのことが決して好きじゃなかったってことだけど、誓って断言するわ。あなたを裏切るようなことは一度もしたことがないって。

ジョージ・ウインター ねえ君、僕が納得するかどうかじゃなくて——僕ほど人を信じやすくて疑わない人間はいないけど——イギリスの陪審を構成する十二人の善良な人たちを説得できるかどうかの問題なんだ。

キャサリン あなたは馬鹿じゃないわ、ジョージ。あなたは世間の人を知っているし、わたしができることとできないことも分かっているのよ。心の中では、わたしがあなたの不満の原因になるようなことは何もしたことがないって、あなたも確信しているんだわ。この四年間、わたしは随分たくさん苦しんできたのよ——どんな憎らしい敵にだって経験させる気にはなれないくらいの苦しみたわ——お願いだから、その恐怖の中に引っ張り込まないでちょうだい。

ジョージ・ウインター ねえ君、君が単純なものにはまったく面食らうよ。

キャサリン 「憤然として」下品にもほどがあるわ。

ジョージ・ウインター 「ふざけた調子をやめ、すぐに断固として」きつと、君は僕のことをほとんど知らないんだ、ケイト。僕の全人生がかかっているのに、懇願されたり悪態をつかれたからといって僕が動じるとでも思うのか？ 僕は生涯で一番大事な所にいるんだ。僕の強いところは、決して思い違いをしないことだ。僕はただの相場師にすぎない。僕の百万ポンドは書類の上での百万ポンドだから、五十万ポンド必要になったらおえら方のところに行って調達し、おえら方の誰かから五十万ポンド請求されたら即金で払うことができるような立場になりたいのさ。そして今、頑張りさえすれば、欲しいものがすべて手に入るところなんだ。

なのに、君が来て、僕の前で泣き、馬鹿なことをやっている。君のくだらない惚れた腫れたに僕が何を構うと思うのかね？ やりたいようにやりなよ。目に余るようなことでない限り、僕は構わんよ。

キャサリン 「憤然として」まあ！

ジョージ・ウインター 愛が人生の邪魔になる奴がいるなんて！ 愛なんか実を取るに足らないものさ。

キャサリン わたしにとつては、愛がこの世のすべてなのよ。

ジョージ・ウインター それなら、君が選択したものをあげるよ。君が僕を訴えるなら、僕は反対の訴訟を起こすけどね。

キャサリン 「刺激されて反抗的な態度になり」わたしの選択はずっと前に決まってるわ。わたしは潔白だって自信があるもの。

ジョージ・ウインター 君は僕を破滅させ、お義父さんを破滅させることになるけど、ロバート・コルビーをも破滅させることになるんだぜ。

キャサリン 「どっさに」どういうことよ？

ジョージ・ウインター 君は単純だから、もしあいつが離婚裁判で共同被告になっても、議員を辞職する以外にも方法があるって言うつもりじゃないよね？ 世間じゃ、僕たちが再選されたら、あいつが陸軍省を任されるはずだって言ってる。童謡に出てくるハンプティ・ダンプティ（塀から落ちて割れてしまう卵の擬人化）みたいな元には戻れないね。あいつの政治生命も終わりさ。

キャサリン 「絶望的に」わたしたちには気が咎めるようなことは何もないのに。何にもね。

ジョージ・ウインター 君は昨日の夜、あいつに手紙を出したね。あいつは何て言ってた？

キャサリン 「反抗的に」十二時にここへ来てって、あの人に頼んだのよ。

ジョージ・ウインター 「懐中時計を取り出して」もうすぐ十二時だ。僕は待つよ。で、君があいつに話せばいい。

アン・エッチングラムとテディー・オドンネルが入って来る。アンは姉のキャサリンに似ているが、より小柄でほっそりしている。その上、もつと快活で陽気で、かわいくて愛撫したくなるような風情がある。エドワード・オドンネルは取るに足らないが愛想のよい二十三歳の美青年である。

アン 「部屋に入って来ながら」おはよう、みなさん。

キャサリン 「穏やかな愛情のこもった微笑で」ああ、アン。

アン 「ジョージに近づいて」さてと、わたしの偉大なお義兄様はいかがお過ごしでしょうか？

ジョージ・ウインター 相変わらず壮健だよ、ありがとう。

アン お義兄様にご紹介したくて、テディーを連れてきたのよ。

オドンネル はじめまして。

アン 「仰々しく」こちらは財界のナポレオンなの。十七の会社と五つの金鉱、鉄道会社を二つ所有していて、ポートマン・スクエアにお家があつてね、田舎にも別荘

を二軒お持ちなのよ。ヨットもあるし、車だって五台も。エッチング家支配者で……。

ジョージ・ウインター 「遮って」深呼吸して、「ナインティ・ナイン（九十九）」って言うてごらん。（医者が患者に聴診器を当てる時に言う言葉）

アン 「笑いながら」ばかなことおっしゃらないで。

ジョージ・ウインター さてと、何がお望みかな？

アン 何が望みかですって？「丸め込むように」お義兄様はものの分かった方よね。

ジョージ・ウインター そう思ってたよ。で、何がお望みかな？

アン オドネルさんにお仕事を紹介して頂きたいのよ。

キャサリン アン！

オドネル アン、そんなにはつきり言わなくても。

アン お義兄様には遠まわしに言ってもむだでしょ？

ジョージ・ウインター 「面白がって嬉しそうに」とんでもない。

アン さあ、お座りになって。きちんとお話をさせてちょうだい。

キャサリン アン、ちよつと遠慮していただける？ ジョージとわたしは今、忙しいのよ。

ジョージ・ウインター この子たち、邪魔だったかな？ 君はもう言いたいことはないと思

ったんだけど。

アン どうかなさったの？

ジョージ・ウインター 何でもないよ。今朝、ケイトはちよつと具合が悪くてね。

アン まあ、そうだったの？ ごめんなさい。で、何がありましたの？

ジョージ・ウインター 昨日の夜、パテ・ド・フォワ・グラ（ガチョウの肥大した肝臓のパテ）は食べないよう、君に注意したよね。君の体質に合わないのはいつものことなんだから。

キャサリン わたしのことは心配しないでちょうだい。

ジョージ・ウインター 「アンに向かつて」どうして僕にオドネル君の仕事を世話してほしいのかな？

アン だって、わたしの恋人なんですもの。

ジョージ・ウインター 彼がだって、まさか！

オドネル 僕は心から彼女に結婚を申し込みました……。

アン 「割り込むように」わたしは現実的な人間だから、即座に「財産はどれだけあるの？」って尋ねたの。

オドネル ただないってだけじゃないんです。本当にびっくりするほどないんです。正直に言うと、もし借金を入れたなら、完全にマイナスです。

アン そういう訳だけど、わたし、彼の腕に落ちて言ったわ。「すぐに婚約しましょう」って。

ジョージ・ウインター 「非常に陽気に愛想よく」そこで、僕の出番で訳だ。

アン だってわたし、彼になら鉄道会社の一つくらい任せられると思いますの。もしくはお義兄様のお抱え運転手でも。でも、もし彼には無理だとおっしゃるなら、お義兄様の会社の重役にでもしてくださいさらないかしら。

キャサリン ナン（アンの愛称）、あなたは自分が何を言っているか分かってないわ。

アン あら、パ。パが会社をやっているのなら、間違いなくデディーにだってやっていけるわ。

キャサリン そういう意味じゃないわ。あなたには分からない事情つてもものがあるのよ。オドネルさんはジョージに頼みごとをできる立場じゃないのよ。オドネルさんは……。

ジョージ・ウィンター 「実上機嫌で」やれやれ、ケイト、僕に答えさせてくれよ。

アン お義兄様はいつだって、「結婚するときは力を貸すよ」って言ってきてくれたじゃない。

ジョージ・ウィンター 「オドネルに向かって」僕が思うに、君はシティーで働こうと考
えてるんだね？

オドネル ええ、大体。

ジョージ・ウィンター パブリック・スクール（上流子弟などの学ぶ大学進学を目的とする
寄宿制のわたし立中等学校）で勉強したんだ、そうだろう？

オドネル はい。ハロー校に行っていました。

ジョージ・ウィンター 「目を輝かせて」それで、陸軍に入ろうとしたけどどうもくかなか
ったって訳だ？

オドネル はい。そのとおりです。

ジョージ・ウィンター それに、外交官になるだけの金がなかったんだろ？

アン あら、一体どうしてお分かりになるの、ジョージ？

ジョージ・ウィンター 家柄がよくて教育もある人間がシティーで働きたいって言う時は、
そいつがほかの事じゃ役に立たないからだって、分かるんだ。五十年前なら、良
家の愚か者は聖職についたが、今じゃシティーで働くのさ。

オドネル 手厳しいですね。

ジョージ・ウィンター 多分、君はちゃんと僕の気に入るだろうね。

アン おお、ジョージ、なんて頼りになる方なの！

ジョージ・ウィンター キスしてくれたら、彼に仕事を見つかるよ。

アン 両頬にして差し上げますわ！

アンはジョージ・ウィンターの両頬にキスする。

ジョージ・ウィンター 両頬にキスしてくれても、仕事は一つだけだよ。

アン どうして皆、あんなにあなたを怖がるのか全く分かりませんわ、ジョージ。こん
なに分別がおありなのに！

ジョージ・ウィンター 「人には親切に」、いつもケイトに言ってることなんだ。「オドネ
ルに向かって」明日の朝、会いに来なさい。いろいろ話をしよう。

オドネル 本当にありがとうございます。

ジョージ・ウィンター いいかい、僕のところに来るんなら、言われた通りにやらなきゃい
けないんだよ。

オドンネル 全く問題ありません。

ジョージ・ウインター ひどく無作法な奴の手足となって働くのは、必ずしも楽しいことではないんだよ。

オドンネル どういう意味ですか？

ジョージ・ウインター 君が僕のことをひどく無作法な奴だと思っても当然だ。分かっている。僕はハロー校で勉強した訳じゃない。おやじはミドルプールの帽子屋で非国教徒だし、おまけに「h」を発音しないような無学な人間だった。僕は十四の時に船乗りになって、君の年にはノミ屋の社員として週二十五シリング稼いでいた。僕がひどく無作法でも当然だろ。

アン さあ、お義兄様、ふてくされたりなさらないで。

ジョージ・ウインター さあ、君たちはあっちへ行つて……。このことはお父さんに話したのかね？

アン いいえ、まだなの。あなたにそれをお任せしたいと思つていますの。

ジョージ・ウインター 僕に任せるだって？

アン ねえ、分かつてただけでしょ？ お父様はデディーが全くの一文無しつてこゝとでひと騒ぎするにきまつているわ。でも、お義兄様が彼にお仕事を紹介したつて言つて下されば……。

キャサリン お父様は反対するわ。

アン あら、ジョージが太鼓判を押してくれたら、お父様だつて反対できっこないわ。
キャサリンは、幾分いらいらしたような、そして幾分うろたえたような身振りをかすかにする。

ジョージ・ウインター 「優しく」君は本当にどうしても結婚したいのか？

アン ええ。とつても。

ジョージ・ウインター それなら、何とかしてあげよう。さようなら。

ジョージ・ウインターはオドンネルに向かって会釈する。オドンネルとアンは出て行く。二人が行つてしまふやいなや、キャサリンは話し始める。

キャサリン ジョージ、あなたはデディー・オドンネルを雇うつもりじゃないわよね。それはとんでもないことだと分かつてもらわないと。

ジョージ・ウインター 「冷たく」どうして？

キャサリン わたしたちはあなたから何も受け取る訳にはいかないわ。

ジョージ・ウインター その欲のなさを、君の家族の新たな特性にすべきだね。

キャサリン 明日、彼をあなたに会いに行かせるなんて、彼の時間の無駄にしかならないわ。

ジョージ・ウインター 彼の時間がそれほど貴重だとは思わないね。

キャサリン アンに真実を話さなくてはいけないわ。そしたら彼女もすぐに分かるでしょう。デディーがあなたから恩を受けるのは論外だつて。

ジョージ・ウインター どうかな。

キャサリン 「反抗的に」分かるに決まっているわ。

ジョージ・ウインター 彼女が聞いて喜ぶと思うのかい？ 君の気まぐれのせいで、彼女は結婚できないってことなんだぜ。君だって、彼女が僕に不満はないなんて言わないと思うだろ？

キャサリン 彼女に分からせるべきだわ。

ジョージ・ウインター そんなのは君の都合だろ。あのつまらん坊やと結婚したいっていうアンの気持ちも、君は邪魔する気なのか？

キャサリン わたしは長いこと自分を犠牲にしてきたわ。今度はアンの番だわ。

ジョージ・ウインター 自己犠牲っていうのはわがままの一つの形だって、君も気がつくだろうよ。自己犠牲を代わりに引き受けたがる人間なんていないんだから。

キャサリン あなたはデディに何をやらせるつもりなの？ 彼はあなたの役には立たないでしょう。

ジョージ・ウインター 分からんね。僕は紳士方と付き合うのが好きなんだよ。彼らは金融の世界に入ると、きつすいの金融マンにはめつたにないくらい積極的に汚い仕事に手を染めるからね。

キャサリン とにかく、わたしは一人の好青年があなたから悪い影響を受けないように全力で遠ざけるわ。

ジョージ・ウインター じゃ、アンにできるだけのことをしてやればいいさ。彼女に言うてやりなよ。僕が彼氏を年四百ポンドで雇って、彼女には別に二百ポンド上げるから、そうしたければ来週には結婚できるってね。だけど、君は僕と離婚するつもりだから、彼らのどちらかでも僕の提案を受け入れるとおかしなことになるだろうって、付け加えといってくれたまえ。

キャサリン まあ、あなたが親切にするつもりが全くないから、彼に話をさせなかったってことはお見通しよ。まるでもう一つ鎖がわたしに巻きついてるようだわ。ああ、本当に身勝手だわ。わたしの行く手を全てあなたが阻止しているんですもの。

ジョージ・ウインター 今どきの演説に比喻を盛り込んでいるみたいだ、ねえ君。

執事のトンプソンが入って来る。

トンプソン ロバート・コルビー様がいらっしやいました、奥様。

ジョージ・ウインター 下で待ってるのかね？

トンプソン 今、リビングルームでお待ちです。奥様のご用がお済みになるまでお待ちになると。

ジョージ・ウインター 上がるように言ってくれ。「キャサリンに向かって」僕は失礼するから――。

トンプソン かしこまりました。

退場する。

ジョージ・ウィンター 幸運を祈ってる。僕は君の素敵なお父様と世間話でもしに行くから、

君はロバート・コルビーと置かれてる状況について話し合うんだな。

キャサリン お願いですから、独りにしておいて。

ジョージ・ウィンター 逆に泣きついて、あいつがどう取るか見てみるよ。僕の感じでは、
兎みたいに逃げて行くだろうね。

ジョージ・ウィンターは書斎に入るドアに向かって行き、立ち止まる。

ジョージ・ウィンター それで、もしあいつがそんなだったら、腕を広げて君を受け止めようとしているのは誰か、君にも分かるさ。そいつの六十馬力のメルセデスがそいつの避難所に君を連れて行きたがってるんだ。

ジョージ・ウィンターは馬鹿笑いしながら出て行く。キャサリンは疲れ切ったようにため息をついてから、これからの面会に向けて気を引き締める。

ロバート・コルビーが入って来る。四十のハンサムな男で、やせぎすで活動的、上品な顔で立派な容貌をしている。髭はきれいに剃ってある。髪は白髪交じり。魅力的な物腰でやや古めかしい丁寧な雰囲気がある。声はソフトで気持ちがいい。

トンプソン ロバート・コルビー様です。

キャサリンは両手を広げてロバート・コルビーのところまで行く。ロバート・コルビーの様子が明るくなって喜びにあふれる。キャサリンは自分に重くのしかかっていたみじめな気持ちを振り捨てたように見える。執事は出て行く。

キャサリン よく来てくださってたわ。

コルビー 「キャサリンの手を取りながら」まるでわたしを見てびっくりしているみたいですよ。

キャサリン あなたは随分とお忙しいから、お越しになれないんじゃないかと思っ
ていまし
た。

コルビー たとえ荒っぽい労働者のリーダーたちでも、わたしの邪魔をできないことはご存知
知でしょうに。

キャサリン あなたがわたしに大事なことには干渉させないというのは、もちろん分かっているわ。でもあなたがわたしという間、国中を待たせているって自惚れるの
とても楽しいことなの。わたしが何をしたらかご存知かしら。

コルビー おっしゃることは想像できますが、あなたの口から直接聞いてみたいものです。

キヤサリン わたしは重大な決断をしたのよ。今日弁護士に会うの。そしてできるだけ早く離婚の申し立てをするわ。

コルビー すばらしい。あなたは今のようなみじめな生活を送る必要は全くないのです。キヤサリン わたしが正しいって、もう一度確信させて。わたしはとても弱いよ。自分はずっかり無防備だって感じるの。

コルビー もう少ししたら……。

キヤサリン 「遮るように」まだだめよ。ロバート。

コルビー わたしは今すぐにどれだけわたしがあなたに夢中なのかを伝えたいのです。

キヤサリン 「優しく微笑んで」それが必要だと思いの？ あなたがわたしを一度も口説かないというのがとても嬉しいわ。わたしが求めている愛はすべて、あなたの瞳やあなたの声の中にあつて、どんなに陳腐なことをあなたが言ったとしても、わたしには愛の言葉に聞こえるのよ。

コルビー わたしはあなたの手にすらキスをしていないのです、ケイト。

キヤサリン わたしはあなたにとっても感謝しているわ。そして今まで以上にわたしたちの間に問題はないって確信したいのよ。

コルビー それはわたしを責めてらっしゃるのでしょうか？

キヤサリン わたしが平気だってお思いなの？ わたしが恐ろしく孤独な時、とても不幸な時、いつもあなたの肩に頭を乗せていたかったし、あなたのキスで涙をぬぐってほしいって切望したわ。

コルビー 以前あなたに手紙を出したとき、気分を害されましたか？ あの愚かな手紙です。

キヤサリン 怒るはずがないでしょ！

コルビー 当時わたしは心底落ち込んでいたのです。なすことすべてがうまくいかず。わたしは完全に意気消沈して、手紙を書かない訳にいかなかったのです。

キヤサリン 一言一句暗唱できるくらい読んだわ。あなたに愛されていると思っていなければどうやって生きていけばよいか途方にくれる時があるの。

コルビー あなたは一度もわたしに愛しているとおっしゃってくれない、ケイト。

キヤサリン あなたはわたしに言葉を尽くして言わせたいの？ 自分を曝け出すのはわたしにとつてとても恥ずかしくて怖いことだとは思わないの？ そうよ、わたしはあなたを全身全霊で愛しています。

コルビー それはすべての片がついた後でも？

キヤサリン それがあなたのお望みならば。

コルビー ケイト、あなたはわたしにとって本当に大事な存在です。わたしがこれまで成し遂げてきた成功の全てがあなたのおかげのように感じます。時折、政治の陰謀やそのちっぽけなことに嫌気がさします。すべてのことを投げ出したい欲求に駆られます。けれども、あなたはそんなわたしに新しい勇気をくれるのです。あなたのおかげで、わたしはこれまで他のことに気を取られず、常に目指すものに集中できているのです。

キヤサリン 「ほほえみながら」それを聞いてとても誇らしいわ。

コルビー 「陽気に」わたしが昨日した演説、お読みになりましたか？

キャサリン 残念ながらまだなのよ。

コルビー 「おどけて」ひどい人だ！ どんな新聞だってそれについて記事を書いていますよ。

キャサリン ごめんなさい。わたしって本当に嫌な女ね。

コルビー 「笑いながら」何を馬鹿な！ でももちろん、あなたには考えるべきもつと重要なことがあります。

キャサリン わたしに話してくださいな？ 軍の話し合いだったと思うけど。

コルビー そうです。わたしはあえて退路を断りました。わたしはどのような形であれ、徴兵制こそが重要だと説いたのです。ペリガルは解散総選挙を行って政府の政策を世論に問うでしょう。我々は当選すると思います。そして、我々が当選したら：
：。わたしはぜひ陸軍省を与えてもらいたい。もちろん、六年間政権が続いた後で、我々はわずかな得票しか望めませんから、一議席といえども大切になるでしょう。ミドルプールはどうなることやら。

キャサリン ジョージはとても人気があるわ。

コルビー その通りです。彼がミドルプールにいる限り議席は安泰だった。でも彼以外の誰かが取ることになるのではと思っています。

キャサリン あなたは彼がもう一度当選するのは不可能だと思いのなの？

コルビー ええ。かなりの確率で。誰でも強制されて議員になる訳ではない。けれども、議員になるのならば、スキヤンダルから身を遠ざけることはその人の義務なのです。

キャサリンはかすかにびくっとし、話す時には必ずしも声が落ち着いてい
るとは言えない。

キャサリン それはとても難しいでしょうね。男性はスキヤンダルの的になりやすいわ。例え完全に潔白だとしてもね。もし——意地の悪い誰かが彼の離婚を裁判沙汰にしたら、それは脅迫だわね。本人の過失でないことで罰するのはやっぱり不条理だわ。

コルビー あなたは本当にそのようなことがあるとお考えですか？ もし男性が攻撃的にされているならば——確かにその人は理論上有罪ではないかもしれないが——とがめられないということはない。もし裁判が完全にその人の意に反するものになるのなら、その人はきつと何かとんでもなく愚かなことをしたんでしょう。

キャサリンは答えない。コルビーが言うことにたまげている。

コルビー ジョージ・ウィンターは私欲のために議員になっただけです。彼は自分より強固な財務状態を与えるために議席を争って、今は何らかの仕事に無理に入り込むためにその金を使いたいと思っています。我々にはそんな連中は必要ありません。

キャサリン 「話題を変えるように」もし、この総選挙で負けたらどうなるのかしら？

コルビー 「笑って」わたしが行儀よくしている限り、有権者は見放すことはないでしょう。

キャサリン 「ほほえみながら」もし彼らが見放したら？

コルビー 「少し考えて」わたしはただ打ちのめされるだけです。政治はわたしの人生です。下院なしの自分は考えられない。そして、わたしにはやるべきことがたくさんある。もしチャンスさえもらえたら、わたしがやりたいのは……。【突然言い淀んで】でも、まあ、ただ演説をすることになるんでしょうね。

キャサリン まあ、あなた。わたしの誇りだわ。心から尊敬するわ。

コルビー 「笑いながら」まだですよ。しばらくお待ちください。わたしが陸軍省大臣になるまでは。

キャサリン 「愛情のこもった微笑で」さあ、あなた。もう行かなくてはいけないわ。わたしもすることがたくさんあるし、あなたもそうでしょう？

コルビー では、さようなら。神のご加護を……。行く前に何か素敵なことを言ってください。

キャサリン 一日中あなたのことを思っています。

コルビー ありがとうございます。それでは。

コルビーは出て行く。キャサリンは疲れ切って椅子に沈み込むが、ジョージ・ウインターが近づいて来るのを聞いて身構える。

ジョージ・ウインター お偉いさんはずらかったかな？

キャサリンがジョージ・ウインターの言葉を聞いたことは目つきで分かるが、答えない。

ジョージ・ウインター 階段で優雅な足音がしたんだが。

エッチングム さてと、キャロライン、考え直してくれたんだといいが。

ジョージ・ウインター それで？

ジョージ・ウインターが意地悪く面白そうにキャサリンを見ると、キャサリンは、頭をのけぞらせ、憎々しげに怒ってジョージ・ウインターを見つめる。

キャサリン あなたは全ての人間は悪人だとお考えなのでしょう？

ジョージ・ウインター とんでもない。十人のうち九人は悪党か愚か者だと思ってるがね。

だから、僕が金を稼いでるんだ。

キャサリン それじゃ、悪党でも愚か者でもない十人目の人があなたの前に現れたらどうなさるつもりかしら？

ジョージ・ウインター 「ふざけて」ガラスのケースにでも入れておくさ。

キャサリン 取り扱いに苦労することでしょうね。注意することね。

ジョージ・ウインター ああ。でも、長いこと見つからなくて、もう僕のグループには入っ

て来ないと思わざるを得ないくらいなんだ……。時々、本当にそういう奴に当たったと思うことはあった。でも、迷いながら一体どうやったら何とかできるか考えている間に、金銭欲がこつそりと顔を出すのが見えてしまつて、結局そいつは十人目の奴ではないって分かつたんだ。

執事が入って来る。

トンプソン 「ジョージ・ウインターに」バーネット様が話したいとのことですよ。

ジョージ・ウインター 電話がかかってきたのか？

トンプソン いいえ、旦那様。いらっしやっています。

エッチンカム 一体、何だつて言うのかね？

ジョージ・ウインター 僕が下りて行くよ。

エッチンカム いや、上がつて来させたまえ。ひよつとすると、何か重要なことかもしれないし、わしにも会いたいんだらう。

ジョージ・ウインター 「そっけなく」かもね。上がるように言ってくれ。

トンプソン かしこまりました。

退場する。

キャサリン ベネットさんでどなたかしら？

エッチンカム わしたちのグループ会社、二、三社の秘書でな。オフィスの管理とかそんな

ことをやつとるんだ。

ジョージ・ウインター お父さんが報酬を得るための仕事を全部やつてるんだよ。

エッチンカム そんなことは知らんぞ。自慢じゃないが、わしは報酬に見合うだけ働いておる。

執事がフレデリック・ベネットを案内する。小柄な男で痩せており、中年で髭はきれいに剃つてあり、角張った顔で極めて立派な風貌をしている。金縁の眼鏡をかけている。モーニングを着て、シルクハットを手に持っている。執事は彼の名を告げてから出て行く。

ジョージ・ウインター どうしたんだ、フレッド？

ベネット ポートマンスクエアに行ったところ、社長、あなたがここにいらっしやると聞いたもので。今すぐ参上すべきかと思つた次第です。

エッチンカム 何事か起きた訳じゃないよな、ベネット君？

ベネット いえ、社長。「ジョージ・ウインターに向かつて」少しお話ししてもよろしいで

しょうか、社長？

ジョージ・ウインター いいよ。エッチンカムさん、構いませんか……？

エッチンカム もちろん、構わんよ。

エッチングムは、窓のところに立っているキャサリンのところへ行き、話し始める。ジョージ・ウインターとベネットの会話は小声で進められ、進むにつれてほとんどささやくまでに低くなる。

ジョージ・ウインター 一体どうしたんだ、フレッド？ 雷で死にかかっているカモミみたいだぞ。

ベネット マクドナルドからの電報がありました、社長。

ジョージ・ウインター 儲け話だな。で、そのレポートはいつ届くんだ？ 追って来るとは思うんだが。

ベネット はい。

ジョージ・ウインター 一体どうして電話をくれなかったんだ？ すぐオフィスに行ったのに。もう受け取ったんだから、どんどん始められるんだぞ。

ベネット 電話は危険かと。誰が聞いているかわかりませんので。

ジョージ・ウインター 馬鹿な。小うるさい奴だ、フレッド。君は内容を覚えているのか？

ベネット あなたがお考えのようなものではないのです。

ジョージ・ウインター 「ベネットの腕を掴んで」一体どういうことだ？

ベネット ひどい話です。実は……。

ジョージ・ウインター 「乱暴に遮って」とんでもない嘘つきめ、何を言ってるんだ？

ベネット 気をつけて、聞かれてしまいます。

ジョージ・ウインター どこにあるんだ？

ベネット わたしのポケットの中に。

ジョージ・ウインター 僕を騙してたんなら、フレッド……。

「電報を取り出しながら」わたしもあなたと同じくらい深く関わっているのです。
ジョージ・ウインターは電報を取って、正に広げようとする時、怖気づいて躊躇する。怖くて読めない。

ジョージ・ウインター 何て書いてあるんだ、フレッド？

ベネット ええと、あそこには何もありません。騙されたんです。鉱山には価値がありません。

ジョージ・ウインターは、顔に恐怖と困惑の表情を浮かべ、ベネットから目をそむける。一瞬、どうしたらよいか分からず躊躇してから、とっさに判断して歯を食いしばる。

ベネット 「ジョージ・ウインターに近寄りながら」社長。

ジョージ・ウインター もしそれが本当なら、我々が支払った十万ポンドはドブに捨てたも同じだ。

ベネット どうするおつもりで？

ジョージ・ウインター どうするかって？ 最後まで戦うのさ。

エッチングム 「前に出て来ながら」重大な問題じゃないよな、ジョージ？

ジョージ・ウインター 「肩越しに」何でもありませんよ。

ベネット 「ささやき声で」もし失敗したら、どうなるかお分かりで？

ジョージ・ウインター 中央刑事裁判所行きだな。でも、僕はしくじらないよ。

執事が入って来る。

トンプソン 昼食の用意ができました。

第一幕終わり

第二幕

場は前幕と同じ、ノーフォーク・ストリートにあるフランシス・エッチン
ガム卿の家の客間。

午後。フランシス夫人が椅子に座って、刺繍に取り組んでいる。キャサリンは窓のところに立って、外の通りを見入っている。

フランシス夫人 疲れてるんじゃないの、ケイト？

キャサリン 「窓の外を見たまま」いいえ、お母様。

フランシス夫人 午前中、ずっといなかったわね。

キャサリン 弁護士に会いに行ったの。

フランシス夫人 「ため息をついて」こんな父親と母親を持ちながら、あんな常軌を逸した
決断をするなんて、理解できないわ。

キャサリンは答えも振り向きもしない。

フランシス夫人 「キャサリンをちらっと見てから」オーファレル先生がおっしゃるには、
お父様も明日には下りて来られるくらい良くなりますよ。

キャサリン それはよかった。

フランシス夫人 痛風の発作が起きたのは、今年これで二回目なのよ。

キャサリン かわいそうなお父様！

フランシス夫人 お向かいの家ばかり見てて飽きないの？ 誰かが来るのを待ってるんじゃないわよね？

キャサリン いいえ。

フランシス夫人 随分落ち着きがないのね。「かすかにほほえんで」こっちが疲れるわ。

キャサリンは驚きと不安でちよつと叫び声を上げる。

フランシス夫人 どうしたの？

キャサリン 「振り返って前に歩み出る」ジョージが来たわ。

フランシス夫人 お父様に会いに来たんでしょ。

キャサリン ジョージを近寄らせないで。わたしは彼には会わない。わたしが我慢しなきゃ
いけないなんてひどいわ。

フランシス夫人 ねえお前、心配することないわ。ジョージは二週間もあなたに会おうとし
なかつたんですもの。

ジョージ・ウインターが、名前も告げられずに慌ただしく入って来る。後

ろ手にドアを開める。

キャサリン 「憤慨して」何の御用？ わたしのところに押しかけて来る権利はないわよ。

キャサリンは部屋から去ろうと動くが、ジョージ・ウインターが止める。
ポケットから紙を取り出す。

ジョージ・ウインター こんなものが来たぞ。

キャサリン ほかに何だと思ったの？

ジョージ・ウインター 差し当たり、行使されるようなことは何もないって、お父さんは言
つてたぞ。

キャサリン お父様が何て言ったかなんて知らないわ。わたしの問題なの。誰にも干渉され
るのは嫌だわ。

フランシス夫人 何なのそれは、ジョージ？

ジョージ・ウインター ご覧になりたいですか？ 面白い書類ですよ。

キャサリン 請願書よ。お母様。

フランシス夫人 眼鏡を持てればよかった。そういうの一度も見たことがないのよ。

ジョージ・ウインター 「にこりともしないで」運のいい方だ。

フランシス夫人 「辛辣な笑みを浮かべて」さもなくや、貞淑だったってことね。

ジョージ・ウインター 「キャサリンに向かって」こんなのは取り下げてもらわなきゃなら
んね。

キャサリン これからのわたしたちの会話は全て弁護士を通さなくてはいけないってこと、
分かっているわよね。

ジョージ・ウインター 恥知らずが！

キャサリンは部屋を横切って、暖炉の脇にある呼び鈴を鳴らす。

ジョージ・ウインター 何で呼び鈴なんか鳴らすんだ？

キャサリン トンプソンがあなたのためにドアを開けるためよ。

ジョージ・ウインター そりゃ気の遣い過ぎというもんだよ。

キャサリン お母様、この人からわたしを守ってくださいる？

フランシス夫人 ねえお前、ご亭主は背が六フィートあって、それなりに幅もあるのよ。お
望みなら、トンプソンに言いつけて、階段から蹴り落としてもらうけど……。

ジョージ・ウインター でも、そいつはちゃんとした執事が喜んでやるような仕事じゃあり
ませんね。

執事が入って来て、指示を待つ。

ジョージ・ウインター なあ、トンプソン、五時に紳士方が三人見えるんだ。書斎に案内し

て、見えたらすぐ知らせてくれ。
トンプソン　かしこまりました。

トンプソンは出て行く。

キャサリン　それはどうということ？

ジョージ・ウインター　正にそれを言うために来たんだ……。君たちも話題にしてたかもしれないが。ミドルプールの新聞で僕たちの仲違いのことが取り沙汰されて、保守派の新聞『ヘラルド』が最新号で君が僕と離婚するって書いたんだ。

キャサリン　ミドルプールの新聞がよく知っているのは妙ね。

ジョージ・ウインター　そこが君の間違っている点だ。『アーガス』は一部始終を完全に信頼できる形で否定する特別版を印刷している。僕は『ヘラルド』に対して名誉棄損の訴えを起こしたよ。

キャサリン　嘘の一つや二つくらい、あなたの良心には大した違いはないでしょう。

ジョージ・ウインター　君がここにいるのは、塗り立てのペンキに過敏だからだって説明してあるんだ。

フランシス夫人　どういうことかしら？

ジョージ・ウインター　「くすくす笑いながら」ケイトがポートマン・スクエアを出て行った次の日に、家を改装する必要があるという結論に達しましてね。地下室から屋根裏まで壁紙を貼ってペンキを塗っているんです。それが終わったら、再出発です。

フランシス夫人　幸いなことに、イギリスの職人はマイペースですものね。

ジョージ・ウインター　でも、それでは不十分なんだ。ミドルプールの連中はあらゆることに神経質だからね。君も知ってる通り、スウェイルクリフが——非国教会の牧師だけど——すべての人間の私生活を詮索するような途方もなくおせっかいな連中の一人なんだよ。あいつは僕がやってる委員会の一員でね。あいつとフォードが二人で協力して利権を管理してるんだ……。あいつらが、君から本当のことを聞きたいという妄想を抱いてね。

キャサリン　わたしから？

フランシス夫人　フォードって誰なの？

ジョージ・ウインター　そうですねえ、ミドルプールで一番の金持ちですよ。ミドルプール投資会社の役員の一でね。釘みたいに硬くって！　釘になれるくらい鋭くって！　でも、根っからの非国教徒でね。自腹で会衆派教会を建てたばかりですけど。手に負えない奴ですよ。

フランシス夫人　でも、分らないわ。その人たちって、ケイトにどうしろって言うの？

ジョージ・ウインター　あいつらは、僕の代理人のボイスと一緒に五時にここに来て、噂にいささかでも本当のことがあるのか、ケイトに聞くつもりなんですよ。

フランシス夫人　でも、そんなのとてもないわ。

ジョージ・ウインター　もちろん、とんでもない話だ！　でも、卑しいミドルプールの非国

教徒の連中に何が期待できるって言うんですか？

フランスス夫人 それで、ケイトに何と言ってほしいの？

ジョージ・ウインター そんなの初耳だと言ってもらいたい。そうすると、あいつらは彼女が僕と離婚するつもりかって聞くでしょうから、やってもらいたいの——自分を抑えて、お笑い草だと言って噂を否定することです。

キャサリン あの人たちと会うのはお断りします。

ジョージ・ウインター 会わないのか？

キャサリン 「皮肉っぽく」もしかして、あなたの目の前で今聞いたことは全て本当のことだってあの人たちに言ってほしいの？ いいわ。言いましょ。わたしが全部解決してあげる。この迫害をやめさせましょ。でも、彼らにはきちんと正しいことを言うわ。

ジョージ・ウインター 五時までまだあるな。

執事に続いて、ペリガル氏が入って来る。首相である。中背のかっぷくのいい男で、髭はきれいに剃ってあり、ふさふさの白髪を長く伸ばしている。顔つきは肉感的で、抜け目なく、感情を表わさない。物腰は丁寧で控え目である。

トンブソン ペリガル様です。

退場する。

フランスス夫人 「心をこめて」まあボブ、お越しくださってありがとう。

ペリガル ご機嫌いかがですか？ おや、ケイトじゃないですか？

キャサリン 首相になってから一度も会いに来てくれないのね。

ペリガル 首相が午後人を訪問する以外にやることがないというのは国民の妄想です。「ジ

ョージ・ウインターを振り向いて」ここであなたに会えてよかった。

ジョージ・ウインター 家内の母とは非常に仲がいいもので。

フランスス夫人 ところで、いつ議会を解散するおつもりなの？

ペリガル 「肘掛椅子でくつろぎながら」非常に忙しかったもので。ここ何日か、新聞を読

む暇もなかった。新聞は何と言ってますかな？

フランスス夫人 じらさないで、ボブ。

ペリガル ねえ、賢い首相はそれが報道の気の利いた予想を実現する特権だと考えるものです。

フランスス夫人 エミリー・ラッセルズに内務省を任せるつもりだって言うの、本当じゃないわよね？

ペリガル おやまあ、あなたの話し方はまるで女性がすでに気持ちよく下院の席に着いているみたいすな。

フランスス夫人 わたしが何を言ってるか、ちゃんとご存じでしょ。仕事は全部決まったお

役人がやるんですもの、殿方のことは問題じゃないの。でも、妻となると全く別の問題なのよ。率直に言わせていただければ、エミリー・ラッセルズが内務省に行くとなると、大きな間違いだわ。

ペリガル どうしてですか？

フランシス夫人 あの人はおもてなしができないからよ。フランス語を一言も知らないし。着こなしはひどいし。

ペリガル 「皮肉っぽく」それで決まりです。エミリー・ラッセルズは内務省に行かせないことにしましょう。

ジョージ・ウインター 「にっこりして」歴史はこうやって作られるんだ。

フランシス夫人 ああ、ジョージ、フランクが先日買ったナポレオンの複製画をあなたに見せたがってたわ。上に上がるでしょ？

ジョージ・ウインター もちろん。

フランシス夫人 ジョージはナポレオンに関するものを集めてるのよね。

ペリガル そりゃ、金融のナポレオンだからね……。お気の毒に、フランクが寝込んでいるそう。

フランシス夫人 あら、今日は大分いいのよ。わたしたち、五分しかかからないわ。

フランシス夫人はジョージと一緒に出て行く。

ペリガル あなたのお母さんは何て自然にああできるんだ！ 騙されるところだった。

キャサリン 「真面目に」何かご用があつてわたしに会いにいらしたの？

ペリガル 仕事がひどく忙しくてね！ これと言った目的もなく真昼間おしゃべりする暇はほとんどないのではないだろうか。

キャサリン そうは思えないわ。

ペリガル でも、あなたのご主人がいたので、あなたの判断でわたしの用向きが不要なものになったと思います。

キャサリン わたしたちがどんなふうに生活しているか、聞いてらっしゃらないの？

ペリガル わたしはあなたのご主人のように政党資金に気前よく寄付する人について言われる不愉快な話を一度も信じたことはありません。

キャサリン では、あなたもわたしに反対するのね？

ペリガル ねえあなた、わたしはあなたが生まれた時からずっと知っています。わたしたちは皆、あなたの幸せしか望んでいません。

キャサリン ジョージは今朝、請願書を受け取ったの。

ペリガル ええっ……！ 選挙区で広まっている噂をあなたの口から否定してもらうために、今日の午後、ミドルプールからご主人の著名な支持者が二人やって来るみたいだ。

キャサリン わたしは絶対に否定しません。

ペリガル そのような取り返しのつかない手段を取る前に間を置くよう、あなたを説得できなかったらいいのだが。

キヤサリン でも、どうしてあなたが気にするの？

ペリガル 我々は六年間政権を握ってきました。すぐに議会を解散する予定です。また当選するかどうかは分かりません。紙一重のところなんです。二議席を危くする余裕ありません……。

キヤサリン 二議席すらもですか？

ペリガル 院内幹事長の話では、ご主人は対抗する訴状を提出するつもりだということです。キヤサリン 仮にそのことが不愉快でないとしても、その考えは馬鹿馬鹿しいわ。わたしは絶対に……。

ペリガル 分かった、分かった、当然だ。あなたにもロバート・コルビーにも気がとがめる理由はない。それははっきりしている。だが……しかし、わたしは証拠として一応有利な事件が主張されるのではないかと思う。だとすると、わたしたちみんなにとって、今この瞬間に厄介なことだ——わたし自身、あなたのお母さんとの関係があまり近しくなかったらよかったと思えるくらいだ。イギリス国民はなぜかいつも道徳に反するかどうかを急進党の側に立って手厳しく判断する。わたしはずっと、トリー党がより面白い形の不道徳に対して一種の慣例による権利を持つのは困ったことだと思っていた。

キヤサリン お互いシンブルに考えましょう。もし夫がロバート・コルビーを離婚裁判に引きずり出したら、ロバートが完全に無実だと分かっても放り出すつもりなんですよ？

ペリガル ねえ、多くの人が首を横に振って断言できるほど潔白な人はいない。人には分からないものだ。どんな首相だって、離婚訴訟の共同被告だった人間を内閣に入ろうと誘わないと思う。

キヤサリン それは脅迫以外の何物でもないわ。ジョージは事実を隠蔽しないもの。

ペリガル 彼には情け容赦のない率直さがあって、それが時として却って人を引き付けますね。

キヤサリン もう、頭にくるわね。わたしの幸せは危機に瀕しているわ。あなたはその憎らしい皮肉な笑顔を浮かべて……。あなたはロバートとわたしの人生をすべて知っている。わたしたちを信じてくれないの？ わたしたちの味方になってくれないの？

ペリガル 「非常に優しく」ねえ、わたしに任された立場では危険を冒すことはできない……。わたしたちの計画の一つの項目が徴兵制の変更だということは、多分あなたもご存じだろう。私自身は必ずしもそうしたいとは思わないが、トリー党員の先手を打って出し抜くことになって、わたしたちはやらなければいけないことがある。ロバートには熱意があって、法案を信じている。彼こそ法案を下院にうまく通す適任者だ。

キヤサリン 彼は陸軍省のポストを得ようと心に決めているわ。

ペリガル 「ほほえみながら」では、あなたが手に取って彼に渡しなさい。

キヤサリン わたしが？ 彼はジョージ・ウィンターがそれとなく脅迫したって知ってるの？

ペリガル 知らないでしょう。

キャサリン あなたは、なんて重い責任をわたしに課すのかしら。

ペリガル 権力には通常責任が伴うものだから、たった今、あなたは権力も手にした。

キャサリン 「ちよつと考えてから」ロバートとわたしはお互い何も隠し事をしたことはありません。彼はわたしたち二人に密接なことで、わたしが彼に何の相談もなく決めることは望まないわ。わたしが彼に全てをさらけ出すことに異論がありますか？

ペリガル ちつとも！ だって、彼の答えがどうか、わたしは即座に言えますから。彼は言うでしょう。あなたを愛しているから、あなたと、そして彼の生きがいになると思っていたすべてのものと、どちらかを選ばなければならぬとすれば、一瞬もためらうことなくあなたを選ぶと。

キャサリンはほつとしたのと喜びでちよつとため息をつく。

ペリガル でも、彼があなたのために世を捨てている最中に、彼の目をのぞき込みなさい。そうすれば、見えるかもしれない——そう、ほんの一瞬だから、鋭い目で見なければいけないが——影が、ほんのちよつとした後悔の影が……。そして、十年もして、わたしが無駄な人生を終わらせた時、あなたは自分に向かって言うでしょう。「もしわたしが彼を犠牲にしていなければ、今頃彼はあのかわいそうな役立たずのペリガルの地位に身を置いていたかもしれない」と。

キャサリン 「見られたくないほど動揺して、かすれ声で」ロバートが野心家だなんて信じないわ。

ペリガル 野心と愛国心の違いを知るためには、常に鋭敏な観察者でなければいけない。

キャサリン 愛のために世界が随分損害を受けるものだと思えたわ。

ペリガル そう、でも、あなたは女だ。男がそう思えると思えますか？

キャサリンは答えない。ペリガルの言葉が心にしみているような苦しい気持ち顔を顔つきが表している。

ペリガル 呼び鈴を鳴らして、わたしの車が戻って来たか聞いてもよろしいかな？

キャサリン もちろん。

キャサリンは呼び鈴を鳴らす。

ペリガル 一緒に下院に行けるように、わたしの車に乗って迎えに来てくれるようコルビーに頼んでおいたのです。

執事が入って来て、ロバート・コルビーが来たことを告げ、出て行く。

トンプソン コルビー様です。

コルビー ご機嫌を伺うためにちよつと寄ろうと思いました。

キャサリン 「無理やり楽しそうな振りで」あなたがそうしなかったら、わたしはひどく腹を立てたでしょうね。

ペリガル 当然だ……。わたしはちよつと上に行つてあなたのお父さんに会ってきます。

キャサリン きつと喜ぶわ。わたしがお連れしましょう。

ペリガル いや、いや、いいです、いいです！ 簡単に行けますから。

コルビー ペリガルさんが行つてる間、わたしがあなたを楽しませるために全力を尽くしますよ。「ペリガル氏が二人を残して去ると、コルビーは陽気にキャサリンに近寄つて行く。」彼がメモを寄こしてここに訪ねて来るよう言つてきた時、僕は嬉しくて跳び上がったよ。

キャサリン 「ほほえみながら」自分から来てくれればよかったのに。

コルビー 僕があまり度々来ると、君をうんざりさせるんじゃないかって、いつも心配なんだ。お宅の玄関にいるもつともらしい理由を探して、僕はない知恵を絞るんだ……。どうかしたの、ケイト？

キャサリン わたしが？ 何でもないわ。

コルビー 悩んでいるみたいに思えたけど。

キャサリン あなた、まだわたしにキスしたいという気持ちをちつとも見せてくれてないつてこと、気づいてる？

コルビー 僕が？ ねえ、僕は君の厳しい命令に従うつもりだったんだ。

キャサリン もし本当にしたいなら、わたしの命令なんて全然関係ないはずだわ。

コルビー 「キャサリンに向かって行つて」さあ！

キャサリン いいえ、ちがうの、やめてちょうだい。お願いしてるんじゃないの……。「キャサリンは離れる。」自分からそう思わなかったのなら、もう手遅れよ。

コルビー 一体どうしたというの？

キャサリン わたしを愛してるなら、どうしてそう言つてくれないの？

コルビー やれやれ、そんなことは一日中いっただつて口から出かかっているのに！ 君の足元にひれ伏して君のことをどんなに好きか言わないようにするために、僕は自分の気持ちを抑えなければならぬんだ。

キャサリン ああ、許して！ 時々、わたしがどんなに愛の言葉を待ち焦がれているかわかっているなら！

コルビー 「キャサリンを両腕に抱きながら」ケイト！

キャサリン ああ、いつも自分を戒めなくちゃいけないなんてつらいわ。ここのところわたしは怒りっぽくてひどいかしら？

コルビー 「優しくほほえみながら」もちろん、そんなことはないよ。

キャサリン でも、あなたがわたしを愛しているって実感したいの。

コルビー ケイト！

コルビーはキャサリンの顔を自分の方に向けて唇にキスする。

キャサリン 「顔を隠してコルビーの肩の上で泣き始める」あなたはわたしがこの世で持っているものの全てなの。あなたを失ったらどうしていいか分からない。

コルビー もうまもなく、僕たちは永久にお互いのものになるんだ。

キャサリン 「顔を上げて、少し身を引いて彼の目を見つめながら」わたしのこと、どれくらい愛してくれてるのかしら？

コルビー 心の底から、魂の底から！

キャサリン わたしのこと、愛してくれてるのなら……。

キャサリンは話すのをやめて、コルビーから顔をそむける。

コルビー 愛してるのなら、何？

キャサリン 何でもない。わたしは馬鹿で感傷的だったわ。「ほほえんで」分別を持って、普段のわたしたちのように行儀よくしましょう。

コルビー 今日は君のことが分からないよ、ケイト。いつもと随分違う。

キャサリン 驚くでしょ。わたしが気分屋だってこと、あなたは知らなかったんですもの。あなたは訳もなく大騒ぎみたいなのをする女性と自分の人生を結びつけることが賢明だと思える？

コルビー 君の機嫌が悪くても、僕はその機嫌の悪いところが好きなんだと思う。

キャサリン 「コルビーをからかって」あらまあ！

コルビー 「手を差し出しながら」ケイト！

キャサリン 「まるでからかっているかのように実に楽しそうに」あなたにあくまでも仮定の場合について聞きたいの。あなたがわたしとキャリアのどちらかを選ばなければならなかったら——あなたはどっちを選ぶ？

コルビー 「ほほえみながら」君だよ、もちろん。

キャサリン 随分簡単に言うわね！

コルビー 幸いなことに、僕がそんな難しい選択を迫られることはないよ。

キャサリン もちろん、ないわね。

コルビー それなら、一体どうしてそんなこと言うの？

キャサリン わたしが神経質になっていて、落ち着かなくて、いささか退屈しているからよ。あなたがわたしのためならためらわずに世間のことは犠牲にするって言うのを聞きたかったの。

コルビー 君はおかしくて愉快な人だ！

キャサリンはほほえむばかりで色っぽい。突然、こらえきれずに涙が出て、声が変わる。

キャサリン ボブ！

キャサリンが両手を差し出すと、コルビーは両腕で抱き締めて熱烈にキスする。キャサリンは逃れて立ち止まりあえいでいる。ペリガル氏がフランシス・エッチングムに続いて入って来る。フランシス・エッチングムは片足に大きなフェルトのスリッパを履き、杖について歩いている。

ペリガル お父さんが下りて来ると言い張ってね。

エッチングム 実際、もう部屋にはおられんのだよ。もう立派に歩けるし。

キャサリン オーファレル先生が明日までは二階にいなさいっておっしゃってたと思うけど、お父様。

エッチングム オーファレルは馬鹿者だ。

コルビー 「ほほえみながら」間違いない、あなたは医者としてのしり始める時の方が元気みたいですね。

ペリガル 「コルビーに向かって」待たせたんじゃないかな？

コルビー ちっとも！

ペリガル 「非常に愛想よく」フランシス夫人が昔の写真を見せてくれてね。

エッチングム 「ひじ掛け椅子にどっかりと座りながら」アンジェラのあのしやれは今一つだったな。

キャサリンはエッチングムに足載せ台を用意して足を載せてやる。

ペリガル わたしが写真をぼんやりと見ていると、彼女が「覚えていませんか？ 誰それよ」と言いました。わたしはびっくりしました。わたしがぞっこんで駆け落ちしよう

と誘った若い女性の——結婚している女性かなんかの——写真だったので、信じられますか？ あれから三十年経ちますが、誓って、アダムの時代から（全く）分かりませんでした。

エッチングム でなきや、イブの時代から（ちっとも）だ！

キャサリンは、ペリガルの話が自分に当てはまるのが分かって、彼を真剣に見つめる。

コルビー あなたは喜ぶべきです。

ペリガル それは、皆さん、わたしは喜んでいきます。わたしは皆さんのように高潔で騎士道精神のある人間ではありませんが、外務大臣や首相になるのがふさわしいと言ってもいいでしょう。とは言うものの、当時は、誰かにその時の地位、それと愛情の対象と一緒にヨーロッパ横断の旅のどちらかを選べと言われたら、わたしは躊躇しなかったでしょう。

コルビー 慈悲深い神があなたの面倒を見てくれたのは明らかですね。

キャサリンはこの言葉を聞くといささかはっとして立ち上がり、コルビー

をしつかりと見つめる。

ペリガル さてと、わたしたちは行かなければ。こんな魅力的な女性だって、あまり大英帝
国の仕事を邪魔させる訳にはいきません。

キャサリン さようなら。

ペリガル お母さんにあの写真を見せてもらいなさい。三十年前、あの浮気娘は写真よりず
っと魅力的だと思っていました。「エッチンガムの方を振り向いて」さようなら、
フランク。一両日で足が完全に治るといいですね。

ペリガルとコルビーは出て行く。

エッチンガム あの小柄な女のことは実によく覚えているんだ。見た目は今一つだったがね。
当時は、ペリガルがあの子のどこがいいと思ってるのか、不思議に思ってたんだ
が。

キャサリン お父様、わたしに何かご用がありますか？

エッチンガム ないよ、お前。出掛けるのか？

キャサリン 部屋に戻るだけよ。わたしは……わたしは少し独りになりたいの。

エッチンガム どうした！

キャサリンが説明をする間もなく、執事が入って来てベネットが来たこと
を告げ、キャサリンはこの時とばかりその場を逃れる。

トンブソン ベネット様です。

退場する。

エッチンガム ああ、ベネット君、立ち上がれなくても許してくれたまえ。

ベネット よくなられたようでよかったですね、閣下。

エッチンガム どうかしたのかね？

ベネット 「驚いて」閣下がお呼びだと思っていました。電話をくださったのでは？

エッチンガム わしがかね？

ベネット 社長かもしれません……。

エッチンガム 「遮って」ああ、そうか、そうだった。ジョージは言わなかったが。わしに
小切手にサインしてほしいんだろ。ここだって事務所と全く同じにできるから
な。ウインター君に入ってもらわにや。呼び鈴を鳴らしてもらえるかな？

ベネット もちろんですとも。

ベネットが呼び鈴を鳴らす間もなく、ジョージ・ウインターが入って来る。

ジョージ・ウインター あいつらがミドルプールから着くまで、誰も来るなって命じておいたんだが。

エッチングム そうだった、あいつらのことはすっかり忘れとったわ。なあ、ジョージ、あいつらを来させるなんて、君は間違ってたんだ。

ジョージ・ウインター フランシス夫人にはこの部屋を我々だけで使いたいと言ってありますし、ドアをノックせずには誰も入って来ませんから。

エッチングム ところで、ベネットを寄越したのは君かね？

ジョージ・ウインター そうですね。お義父さんが痛風で助かった。座れよ、フレッド。我々はくつろいでた方がいいんだ。座り心地はいいですか、お義父さん？

エッチングム 快適だね、ありがとう。

ジョージ・ウインター 足は大丈夫ですか？

エッチングム 今は痛くもかゆくもないよ。

次の場面の間ずっと、ジョージ・ウインターは精一杯陽気で楽しげである。相手に負わせている苦痛を全くもって面白がっている。猫が鼠をもてあそぶようにフランシス・エッチングムをもてあそぶ。

ジョージ・ウインター 金鉱に関するマクドナルドの報告書が届いたことを、お義父さんがすぐに知りたいだろうと思ひましてね。

エッチングム ああ、それはいい知らせだ。今からすぐに仕事が始められるぞ。

ジョージ・ウインター 持ってるんだろ、フレッド？

ベネット はい、社長。

ジョージ・ウインター 閣下はご覧になりたいはずだよ。

エッチングム そうとも、寄こしたまえ、ベネット。実にどきどきする瞬間だ。やっと一身代作れると思うとな。

ジョージ・ウインター おっしゃる通り、どきどきする瞬間ですな。

ベネットはアタッシュケースから報告書を取り出してエッチングムに手渡す。

エッチングム 感動的な書類じゃないか。

エッチングムは報告書のしわを伸ばして読み始める。ジョージ・ウインターは見物して面白がらずにはいられないでいる。

ジョージ・ウインター かなり専門的じゃありませんか？

エッチングム 「いささか苛立って」何だこれは、どうしてマクドナルドが簡単に書けんのか分からんね。

ジョージ・ウインター 簡単に書いてないのはありがたいことですよ。

エッチンガム 正直言つて、何が言いたいのか今一つ分からんのだが。
ジョージ・ウインター そうだろうと思つてました。かいつまんで言えば、二言で言えます。
エッチンガム 「かすかにほつとしたため息をついて報告書を下に置きながら」そうか！
ジョージ・ウインター 我々が買った時、金鉱は掘り尽くされてたのも同然だったんです。
あそこには口に出して言うほどの金はありません。我々は騙されて、八万ポンド
借りたんです。

一瞬の間がある。エッチンガムはぼかんとしてジョージ・ウインターを見る。
ベネットはびくびくしながら二人を交互に見る。

エッチンガム 「舌が喉にくつついて、ほとんどしゃべることもできずに」君は——君は冗
談を言つてるんだ！

ジョージ・ウインター 報告書をお読みなさい。

エッチンガム 「なすすべもなく報告書を見ながら」それで……。

ジョージ・ウインター お義父さんの財産はいささか取るに足らないものみたいになってき
ましたね。僕の財産も同じですが。

エッチンガム これは本当なのか、ベネット君？

ベネット 残念ながら、そうです、閣下。

エッチンガム まったく！ どうすればいいんだ？

ジョージ・ウインター お義父さんは、どうすればいいとお思いですか？

エッチンガム わしがどう思つかだつて？

ジョージ・ウインター お義父さんはグループの会長なんですよ。あなたの意見が重要にな
らないはずがない。

エッチンガム 「ためらいがちに」損失を握りつぶすしかないな。

ジョージ・ウインター ふむ！

ベネット 現在の状況を考えますと、それくらいの損失なら我々も何とか耐えられそうな額
です。

エッチンガム この暴落もじき終わるに違いない。

ジョージ・ウインター この二か月そう言ってきました。

エッチンガム じゃ、一体どうすればいいんだ？

ジョージ・ウインター それを聞いてるんですよ。

ベネット 我々はレイシャム家のことを考慮に入れなければなりません。

ジョージ・ウインター 今度は彼らが我々を襲う番です。

エッチンガム 「声をからせて」我々が倒産するってことじゃないよな、ジョージ？

ジョージ・ウインター 「懐中時計を取り出しながら」ボイスが十五分でここに来ます。

エッチンガム ジョージ、もう馬鹿な真似はやめるんだ。わしは全財産をこの事業につき込
んでしまった。最後には金持ちになるだろうと思つておつた。あらゆることから
手を引きたかつた。静かに安楽に暮らしたかつたんだ。

ベネット どうするつもりですか、社長？

ジョージ・ウインター 「エッチングムを見ながら」報告書を握りつぶすんだ。

ベネットはびくつとするが、何も言わない。

ジョージ・ウインター 金鉱があることを本気で信じているように進めるんだ。我々は買収した政府の専門家の報告書を持っている。事業の目論見書にはそれを入れるんだ。エッチングム でも、それじゃ不誠実じゃないのか？

ジョージ・ウインター 非常にね。

エッチングム ジョージ！

ジョージ・ウインター 鉱業の世界の原則では、腐った物を掴んだ時は、イギリス国民に回すのが正しいやり方なんです。

エッチングム 配当を払わないと、国民はあそこには金がないことを見つけ出すぞ。

ジョージ・ウインター いや、一年か二年は配当を払うんですよ。その時までには、我々も峠を越えてイギリス国民のために次のいい話を見つけるんです。

エッチングム でも、君は自分から不誠実だと言っててるんだぞ。

ジョージ・ウインター お忘れのようですが、もう一つ問題があります。

エッチングム 何かね、それは？

ジョージ・ウインターは間を置き、一瞬考え深げにエッチングムを見る。

ジョージ・ウインター 金鉱に払った金は我々のものじゃなかったんです。

エッチングム どういうことだ？

ジョージ・ウインター 我々は馬に賭けるために主人の引き出しから五シリング失敬する店員と全く同じ立場なんです。賭けた馬が勝てば金を戻すし、勝たなければ一か月の重労働が待っている訳で……。我々の場合は七年になるでしょうが。

エッチングム 何を言ってるんだ、ジョージ？

ジョージ・ウインター あなたと僕がミドルプール投資会社の役員だということを忘れてはるかですか？

エッチングム それで？

ジョージ・ウインター 我々は二十四時間以内に八万ポンドを即金で払うか、でなければ金鉱を失うかしかありませんよ。

ベネット 確実そうに思いましたが。

ジョージ・ウインター あの時、我々がそんな金額を調達するのは不可能でした。銀行はミドルプール投資会社に対する十万ポンドの無記名債券を保有していました。銀行はあなたと僕とベネットがサインした依頼書に基づいてその債券を引き渡してくれました。我々はその債券を担保に金を借りて価値のない金鉱を買い取ったんです。

エッチングム だが、わしは何もサインしとらんぞ。

ベネット いいえ、サインしました、閣下。それがなければ、債券を引き渡してもらえな

つたでしょう。

エッチングム　だとしたら、わしのサインは偽造されたんだ。

ジョージ・ウインター　覚えてないんですか？　ある日、「ピムズ」での素晴らしいランチのあとで、あなたがちょうど結婚式に出掛けるところを、事務所に来て書類にサインしてくれて、僕がお願いしたのを。

エッチングム　だが、わしは書類を見なかったんだ。知らなかったんだ……。

ジョージ・ウインター　「平然と遮って」そう、それは僕の知ったことじゃない。

エッチングム　「憤然として」わしは警察に行くよ。

ジョージ・ウインター　警察に話すのにもっともらしい話だと思いますか？　実業家で六つの会社の会長が書類を見もしないでサインするなんて、ありそうもないことはなはだしく聞こえますよ。ベネットと僕は証言しますよ。あなたは目の前に置かれたものはすべて注意深く読んで——実際、それが義務ですから、お義父さんは——自分がやることの意味を十分に理解してましたってね。

エッチングム　ベネット君、君は証言してくれるよな、わしは自分のやっていることがちつとも分かってなかったって。あれは単なる形式的な書類だって、君が言ったんだぞ。ジョージがサインするのを見たから、わしは躊躇せずにサインを加えたんだ。

ジョージ・ウインター　ベネット君が自分を犠牲性にしてあなたの潔白を証明したら、超人だと思えますね。

ベネット　もし何か問題があったら、閣下、わたしは本当のことを言わなければならないでしょう、

エッチングム　それこそ、君にやってもらいたいことだ。

ベネット　わたしは、会社を設立したらすぐ返すという考えで債券を借りる必要性についてあなたが我々と同意し、ご自分の行動の重要性を十分理解した上で銀行宛ての依頼書にサインしたと言わなければならないでしょう。

ジョージ・ウインター　「真理とは何か」と冗談好きなピラトは言った。(ピラトはキリストの処刑に関与したしたローマの総督であり、キリストが「わたしは、真理について証しをするために生まれ、また、そのためにこの世に来了。真理に属している人は皆、わたしの声に耳を傾ける」と言ったのに対してこう尋ねた。『ヨハネによる福音書』一八一—三八)

ベネット　あなたもわたしたちと同じくらい深く関わっているんです、閣下。

エッチングム　ああ、何てことだ！

ジョージ・ウインター　進退窮まったからといって、慌てても無駄ですよ。

エッチングム　君はわしを騙したんだ。君はただの詐欺師だ。ひと月のうちに、我々はみんな監獄行きかもしれん。

ジョージ・ウインター　最近の監獄は実に快適だっていう話ですよ。

エッチングム　それなら、差し当たってやらなければいけないことは分かっている。今、分かるのは、申し開きできることは何もないということだ。すぐロンドン警視庁に行くしかないんだ。すべてを包み隠さず言うつもりだ。

ジョージ・ウインター　そんなことして何になるって言うんですか？　七年が五年になるか

もしませんが。

エッチンカム わしにそんなことできつこないって、みんな分かってくれるさ。

ジョージ・ウインター 馬鹿なこと言わないで。お聞きなさい。僕たちはもうあなたをしつかり捕まえています。僕たちが破産したら、あなたも破産するんです。そんなことはないなんて、勝手に思わないでください。

エッチンカム わしは義務を果たさねば。

ジョージ・ウインター あなたの義務は、落ち着いて、できるだけうまくこの困った状況から我々を救うことなんです。

エッチンカム だが、何もできっこない。金鉱には価値がないのに。どうやったら八万ポンドを調達できるんだ？

ジョージ・ウインター 我々は六週間で銀行に債券を返却しなければなりません。それまでに借金を返して、取り戻した担保の債券を銀行に返却できれば、債券が銀行の地下金庫から持ち出されたことに気がつく奴なんかいませんよ。

エッチンカム 明後日だって債券を返却できる可能性はないんだから、六週間後だって返却できる可能性がないのは同じことだよ。

ジョージ・ウインター いや、可能性はあります。会社を設立できればね。そこで、あなたの出番なんです。僕は議席を守らなければなりません。あらゆる点で人望が必要です。離婚はできません。今すぐケイトのところに行って話すんです。唯一お義父さんを刑務所行きから救える方法は、ミドルプールから来る連中に自分が僕を告訴する理由なんかないと話すことだって。

エッチンカム そうだ！ ケイトのことを忘れておったわ。

ベネット 続けることでしか、我々が自分たちと会社に投資した金を守ることはできません。エッチンカム 「苛立つて」君があんな馬鹿な真似をしなかったら、ケイトのことでこんな困ったことにならなかったろうに。どうしてああいう女たちを構わずにいられたかったんだ？

ジョージ・ウインター 「くすくす笑いながら」ねえお義父さん、あなたの話はまるで僕が

悪いみたいだ。女たちが勝手に僕の腕に飛び込んできたんです。たまには僕が抱き締めなかったら、失礼だったでしょうね。

ベネット 社長はあなたに多くを望んでいません、閣下。

エッチンカム 君が望んでるのは、わしが娘に自分が盗人で、ペテン師だと言いに行つて、あの子の慈悲にすぎることなんだな！

ジョージ・ウインター それだけです。

エッチンカム そんなことだけはまっぴらだ！

ジョージ・ウインター 選択肢は刑務所か……。あまりいいもんじゃない、懲役刑は——そうだろ、フレッド？ 君はいろいろ知ってるんだ。話してやるといい。

ベネット 「はっと息をのんで」社長！

エッチンカム 彼は何を言ってるんだ？

ジョージ・ウインター フレッドは法廷弁護士で、弁護士名簿から外されたんです。顧客の金を横領したかどで三年の刑を宣告されてね。

エッチングム けしからん！ 本当なのか、ベネット君？

ベネット 「恥ずかしがって」はい、閣下。

エッチングム 知らなかった。

ジョージ・ウインター もちろん、あなたはご存じなかった。彼が自慢するのを期待できるような話じゃないでしょ。でも、彼は以前刑務所にいたことがあるから、我々のことが発覚すると一層まずいことになりますね。刑務所がどんなだか、話してやれよ、フレッド。

ベネット 「苦しみもだえて」ああ、社長、やめいください。

ジョージ・ウインター 彼とは刑務所に入る前に知り合いましたね。当時、彼の名前はフェルトマンだった。そして、彼が釈放された時に僕が雇ったのは、彼は僕に忠実であれば得るものがあるけど、僕を裏切ると失うものしかない僕が確信したからなんです。

エッチングム 何てこった！

ジョージ・ウインター あなたがどんなことに直面するか、彼なら話せます。国有のどんなものを着るのか、どんな食べ物を食べるのか。そして、労働——時間の規則正しい、健康的な生活——あなたは年の割に丈夫だ。どうしてあなたが我々のほかの連中と一緒に採石場で石を切らないのか分らないくらいね。何時間も続けて背骨が折れそうだと感じながら、二の腕は痛みに痛んで、でも、それでもあなたの心ほどひどくはないんだ。

ベネットは抑えきれずに泣き崩れて涙にむせぶ。

ジョージ・ウインター そして、一年三百六十五日、日にちを数えて、本当に終わりが来るんだろうかと思うんです。なのに、あなたの頭は働き続けます。あなたと並んで汗を流している奴みたくに能無しの大男なら、そんなひどいことにはならないでしょう。でも、あなたは考える。考えざるを得ないのです。そして、自分を呪います。それに、自由に好きなようにできる塀の外の人たちのことを考え、春の季節や花々のことを考え、気持ちのいいロンドンの街のことを考えるんです。それから、来る日も来る日も後悔の念で苦しんで、あなたが思うのは——死ねたらいいと何度も思うんです。あなたは眠ります。空腹で、いつだって空腹ですけど、たとえ空腹で内臓が苦しくても、疲れすぎていて眠らない訳にはいかず——眠ると、また家に戻っていて、幸せで快適なのを夢に見るんです。そして、目が覚めると、刑務所の固いベッドを感じて、子供みたいに泣くんです。

ベネット ああ、何てことだ！ 何てことを。

ジョージ・ウインター それに、刑務所から出て来ても、まだ終わりじゃありません。誰が見ても分かるように額に書いてあるんじゃないかと思いつながら、街をこそこそ歩いて、警官の姿を見かけると心臓がどきどきするんです。そして、夜になると、すべてがよみがえってきます。看守に、罪を犯した連中に、刑務所の食べ物に、労働による背骨の痛みがまた見えるんです。そして、恐怖のあまり悲鳴をあげて

目を覚ますんです。悲鳴ですよ、悲鳴をあげるんですよ。

間がある。エッチングムはぼんやりした無表情な目つきでまっすぐ正面を見つめる。ベネットは断続的に手足を震わせてちぢこまる。ドアにノックの音がする。コツ、コツ、コツ。ジョージ・ウインターまでも驚いて、体を震わせる。ノックの音が繰り返される。

ジョージ・ウインター 「自分がびくびくしたことに腹を立てて」一体、誰だ？ 入れ！

執事が入って来る。

ジョージ・ウインター どうしたんだ？ 邪魔するなって言っただけだ。
トンプソン 紳士方がお見えです、旦那様。

ジョージ・ウインターは一瞬考えて、エッチングムに素早い視線を送る。

ジョージ・ウインター 彼らに上がってもらえるようになったら、呼び鈴を鳴らすよ。
トンプソン かしこまりました、旦那様。

退場する。

ジョージ・ウインター 「唐突に」すぐケイトのところへ行つて、僕が話したことを伝えなさい。そして、あなたを救うには従うしかないって言うんだ。

エッチングム 「かすれ声で」それだけはまっぴらだ。

ジョージ・ウインター 「びっくりして」何だって！

エッチングム 「力と勇気を奮い起こしながら」そんなことはしないと断るんだ。くそ食らえだ！

ベネット 閣下、あなたはご自分が何をやっているのかお分かりでない。

ジョージ・ウインター 「ほとんど自分の耳が信じられずに」ケイトに話すのを断るって言うんですか？

エッチングム わしがあの子に話したって、君が腐った悪党だって言うことになるだけだろ。うし、君から逃れるためにあの子が何かを我慢するのは無駄じゃないね。

ジョージ・ウインター 七年ですよ。分かっていますね？

エッチングム 君とそこにいる汚らわしい前科者のせいだ。

ジョージ・ウインター 我々に抵抗すれば逃げられるとお考えのようですが、逃げられっこありませんよ。我々はあなたをしつかり捕まえていますからね。

エッチングム 哀れな奴だ、わしが罪から逃れるとも思っておるのか？

ジョージ・ウインター 「怒りを抑えきれずに」馬鹿な話だ。もう偉そうにしている時間はないんだ。あいつらを一晚中待たせる訳にはいかない。我々を救えるのはケイト

しかないんだ、あなたが……。

エッチングム 「ジョージ・ウインターに言葉を投げつけながら」わしはやらんと言つとるんだ。君はわしをだしに使つたんだ。そして、命令しさえすれば、わしが従うと思つておつたんだ。

ジョージ・ウインター 「馬鹿にして」あなたは今まで何度もそうしたじゃないですか。ベネット 彼に慈悲を期待しないでください、閣下。彼は絶対にあなたを破滅させるでしよう。

エッチングム わしは慈悲なんか欲しくなんかない。君たちはわしをしつかり捕まえていると思つとる。わしが逃げると決めた時は、いつだって逃げ道があるのが分らないのか。

ジョージ・ウインター どうするつもりなんですか？
エッチングム 君の知ったことじゃない。

ジョージ・ウインターは理解する。彼は大きく息をする。

ベネット 「囁き声で」どういうことですか、社長？

ジョージ・ウインター ご自分にその勇気があるとお思いで？

ベネット 「理解できて」ええっ……！ わたしも一度やろうとしましたが、できませんでした。手が震えました。わたしは連れて行かれました。

ジョージ・ウインター 「反射的に」そんなことは考えてもみなかった。銃で自殺すればいいんだ。

エッチングム 「とげとげしく皮肉に」許可していただいて感謝するよ。

ジョージ・ウインター 追いつめすぎたな、フレッド。まずいことをしてしまった。

エッチングム 君たちがやったのは、とんでもなくまずいことだ。

エッチングムは立ち上がり、びっこをひきながら部屋を横切つてドアの方
に歩いて行く。ジョージ・ウインターが途中で遮る。

ジョージ・ウインター どこへ行くんです？

エッチングム 「横柄に」どけ、成り上がり者が。

ジョージ・ウインターは一瞬エッチングムを見て、脇へどく。

ジョージ・ウインター 「気味の悪い笑みを浮かべて」はつきりしているのは、あなたが僕
から得られるものも何もないとお考えだということだ。

エッチングム 「手を振りながら」ポートランド(イングリランド南部ドーセット州の半島で
有名な刑務所がある)で楽しい時を、諸君。

ジョージ・ウインター 呼び鈴を鳴らすんだ、フレッド。

エッチングムはこの指示を聞くと、立ち止まって振り返る。

ベネット そうすると、あの連中が来ます。覚えていませんか、あなたの話では……。
ジョージ・ウインター 「遮って」呼び鈴を鳴らすんだ、糞つたれが。

ベネットは一言も言わずにボタンを押す。エッチングムは部屋の真ん中に戻って来る。

エッチングム どうするつもりだ？

ジョージ・ウインター おや、そろそろあなたがピストルを取り出し出している頃だと思いたが。

エッチングム あの連中に会うつもりじゃないよな？

ベネット 連中はどうしてもウインター夫人に会うと言うでしょう。

ジョージ・ウインター その時は、彼女を呼びに行かせよう。

エッチングム おっと、途方もない偽りの世界にいる君を、あの子が支えるなどと考えてもらっちゃ困るよ。

ジョージ・ウインター 「穏やかに」どの道、あなたは静観したいんでしょう。

エッチングム 「疑わしげに」何か奥の手があるのか？

ジョージ・ウインター お義父さん、もしこれが感情の一番奥底にあるものに対して効き目がないとなると、我々男が女を扱うのにどうしようもなく具合の悪いことになるでしょう……。それは自己犠牲です。

エッチングム 君はそんなことを当てにしているのか？

ジョージ・ウインター あなたがケイトに自己犠牲の教育をしてきたんだから、もう習慣になつてると思うしかありませんよ。

エッチングム あの子の気持ちを変えるようなことは、一言だって言う気はないね。

エッチングムはどっかりと椅子に座り込む。すでに、彼の英雄的な決意は半分消えてしまっている。ジョージ・ウインターは意地悪く面白がつて彼を見守る。

ジョージ・ウインター 多くの偉人のように、運を天に任せるのはなるべく少なくなりますよ。
エッチングム 「びっくりして」ペリガルかのことか？

ジョージ・ウインター そうです。

ベネット 見込みがあると思いますか、社長？

ジョージ・ウインター 一か八かやってみなければ。最後の賭けだ。

執事がスウェイルクリフ氏、ジェイムズ・フォードとボイス大佐の来訪を告げる。スウェイルクリフ氏は非国教会の牧師で、きれいに髭を剃っており、血色は悪いが威厳のある顔をしている。ジェイムズ・フォードは裕福

な男で、ミドルプールにある非国教会の中心人物であり、重要な地元の政治家である。大男で、恰幅がよく、やや老けていて、服の着こなしはひどく、やや北イングランドの訛りがある。抜け目なさそうだが、同時に誠実で正直な印象を与える。ボイス大佐は、ジョージ・ウインターの代理人だが、痩せていて背が高く、日焼けしていて、頭は白髪で口髭もウェーブのかかった白髪である。機敏で、服を裕福そうに着こなし、めかし込んでいる。バース（イングランド南西部の温泉都市）、タンブリッジ・ウエルズ（イングランド南東部の鉱泉の町）やチェルトナム（イングランド南西部の町、競馬場・鉱泉で知られる）に大勢見られる類の退役軍人である。

トンプソン スウエイルクリフ様、ジェイムズ・フォード様、ボイス大佐です。

退場する。

ジョージ・ウインター こんにちは。お会いできて嬉しいです。お待たせしませんでしたか？
ジェイムズ・フォード ちっとも。そんなことは何でもありません。

ジョージ・ウインター 義父に紹介させてください。スウエイルクリフさんです——フランシス・エッチングム卿です。

スウエイルクリフ氏は堅苦しく会釈する。彼はなるべくなら口を開こうとしない。

ジョージ・ウインター ジェイムズ・フォードさんです。

ジェイムズ・フォード お会いできて嬉しいです、フランシス卿。

エッチングム そう言ってくださってありがとうございます。

ジョージ・ウインター 皆さんがここにいらした方が都合がいだろうとフランシス卿に提案したところ、この家を自由に使用させてくれたんです。何しろ、妻もここに泊まっておりましたね。ポートマン・スクエアの家が修理中で、妻はペンキの匂いが我慢できないんですよ。

ボイス 「話を簡単にしたくて」当然です。わたしも好きではありません。

ジョージ・ウインター 奥様はいかがですか、スウエイルクリフさん？ お元気かと思いましたが。

スウエイルクリフ ありがとうございます。

ジョージ・ウインター お子様たちは？

スウエイルクリフ ええ、ありがとうございます。

ジョージ・ウインター さあ、お座りになってお楽になさってくださいませんか？ お茶はもう召し上がりしましたか？

ジェイムズ・フォード ええ、ありがとうございます。

ボイス 「いささか勿体ぶって」わたしが彼らをクラブに入会させました。

ジョージ・ウィンター お酒はいかがですか？ 義父のウイスキーはお薦めですよ。あなたにお勧めしても無駄ですよ、スウェイルクリフさん？

ジェイムズ・フォード ボイスとわたしはお茶にスコッチを少々たらしめました。

ジョージ・ウィンター それでしたら、早速仕事に取りかかりましょうか？

スウェイルクリフ 「咳払いをして」先へ進める前に言いたいのですが、フォードさんとわたしはこんな用件でロンドンまで出て来たことは大変遺憾に思います。

ジェイムズ・フォード ミドルプールではたくさん噂になっているものですから、そこで、我々の考えた手っ取り早く解決する方法が……。

ボイス 個人的には、これは委員会が注意を払うべき問題ではないと思います。私生活は私生活であって……。

ジェイムズ・フォード それはごもっともです、大佐。ウィンターはわたしの昔からの友人です。二十年来一緒にビジネスの取引をしてきました。ですが……その、これは選挙に勝つか負けるかの問題です。この問題はあれやこれや多くのことをはらんでいて、五十票多いか少ないかで大きく違ってきます。

スウェイルクリフ 率直に言わせていただきたいのですが、ウィンターさん、広まっている噂に少しでも真実があるのなら、あなたに反対の投票をするのがわたしの義務だと思うでしょう。

ジョージ・ウィンター それがはっきりしていることは良心に誓えます。皆さん、皆さんを義父の家でお迎えするというのが、わたしにできる一番いい証明です。家内は二階の母親の部屋にいます。名誉にかけて言えるのは、皆さんがお聞きになったどの言葉の中にも真実の影すらないということです。わたしは『ヘラルド』に対して名誉棄損の訴えを起しましたし……。

ボイス 確かに、それでみんな納得するはずですよ。

ジェイムズ・フォード でも、わたしは納得できません。

ジョージ・ウィンター 多分、皆さんは義父にわたしの言う一言一言がすべて間違いなく本当だと言ってもらいたいんでしょうね。

スウェイルクリフ 我々はあなたの言葉を疑いませんが、ウィンターさん、我々は特別の目的を持ってロンドンまで来ました。

ボイス わたしは最初から大きな疑問の余地があると思っていたと言わざるを得ません。ジェイムズ・フォード 委員会が十分に議論して、大多数が同意したのは……。

ジョージ・ウィンター 「立ち上がりながら」もちろんです、もちろんです、お義父さん、こちらの紳士方に保証していただけますか？

エッチングラム 「一瞬ためらって」わしはすべて見当違いも甚だしいと思つとる。

ボイス わたしが言った通りだ。

ジェイムズ・フォード 「静かに」あなたは時間を無駄にしているだけだ、ウィンター。スウェイルクリフ 我々はウィンター夫人の口から確証を得なければならないと心に決めました。

ジョージ・ウィンター 「どなりつけようとしながら」家内に反対尋問したいっておっしゃるんですか？

スウェイルクリフ わたしは奥さんに、委員会を代表してボイス大佐があなた宛てに出した手紙に書いた質問に答えてもらいたいです。

ジョージ・ウインター 「激情にかられたふりをしながら」ちゃんとした女ならそんなことには耐えられませんよ。わたしは、家内にそんな堕落した状態に身をさらすよう頼むのは拒否します。

ジェイムズ・フォード それは、あなたが次の議会でミドルプールの代議士にならないこということです、ジョージ・ウインター。

ジョージ・ウインター 身を守る術のない女をそんな屈辱にさらすくらいなら議席を失う方がましですよ。委員会にそれを話しに行けばいい、みんな糞食らえだ！

スウェイルクリフ でも、我々はあなたの奥さんに会うという合意のもとでミドルプールからやって来ました、ウインターさん。

ジョージ・ウインター 家内はとても病弱なんです。

ジェイムズ・フォード 我々は奥さんを五分以上引き留めません。つまらない感情よりも常識を優先する方が賢明でしょう。

わずかに間がある。ジョージ・ウインターは、彼らがやると決めたことを騙してやめさせることはできないと悟る。彼は黙って呼び鈴を鳴らしに行く。

ジョージ・ウインター しょうがありませんね。

ジェイムズ・フォード それが一番いいと思いますよ。

ジョージ・ウインター でも、家内が答えるのを拒否しても、言っときますが、わたしは家内を説得するような言葉は一言だって言いませんからね。全くもって、実にけしからん話だ。

執事が入場する。

ジョージ・ウインター ちょっと客間に来てもらえるとお義父さんと僕がいたいと家内に伝えてくれ。

トンブソン かしこまりました、旦那様。

退場する。

ボイス わたしがずっとこの件に強く反対していたことを分かっていたいただきたい。

ジェイムズ・フォード 黙りなさい、ボイス。あなたの意見が必要な時は、そう言うから。

彼らは黙って待つ。すぐにキャサリンが入って来る。

ジョージ・ウインター こちらが僕の話していた紳士方だ。皆さん、わたしの家内です。

ジェイムズ・フォード 「誠意をもって」こんにちは、ウインター夫人。お会いできて嬉しいです。

キャサリン 「にっこりして」こんにちは。

ジェイムズ・フォード しばらく、あなたをミドルプールで歓迎する光栄に浴していません。キャサリン 最近、あまり調子がよくないので。

スウェイルクリフ 「ジョージ・ウインターに向かつて」一昨日、我々があなた宛てに出した手紙に書いた質問をウインター夫人にしていただけですか？

ジョージ・ウインター お断りします。そんな質問をしても恥ずかしくなければ、ご自分でお聞きになればいい。

スウェイルクリフ わたしはウインター夫人とは初めてです。この件の説明が必要です。

ジェイムズ・フォード 隠し立てをしても無駄です、スウェイルクリフ。あなたをこんな立場に置いて申し訳ありませんが、そんな訳で、仕方ありません。どこにでもお世話かいな人がいて、ミドルプールにもそれ相応の数の人たちがいます。あなたとご主人についての噂がたくさんあって、我々が注意をそらさないと、その噂のせいでご主人が選挙に負けることになるでしょう。

キャサリン わたしに何と云って欲しいの？

ジェイムズ・フォード それは、我々はミドルプールに帰って、この噂には本当のことは一つもないことをあなた自身の口から聞いたと言えるようにしたいのです。

間がある。エッチングはよつとのことです不安に耐えている。ベネットは動揺を隠そうとしている。ジョージ・ウインターはにこやかにキャサリンを見つめる。キャサリンとジェイムズ・フォードはお互いに向き合いい、キャサリンはまじまじとジェイムズ・フォードを見つめる。

キャサリン よろしくてよ。

エッチングはほつとしてわずかに喘ぐが、ジョージ・ウインターは何の態度も示さない。

スウェイルクリフ あなたはご主人と離婚するつもりはありませんね？

キャサリン ええ、全くないわ。

スウェイルクリフ そのつもりだったことはありませんね。

ジョージ・ウインター 「我慢しきれずに」もう、それで十分じゃないですか？

ジェイムズ・フォード 「丁重に」はい、はい、もう結構です。ありがとう、本当に！ それに、不安を鎮めてくださって嬉しいです。ジョージ・ウインター、握手してください。

ジョージ・ウインター 握手はしますが、常にキリスト教を信仰する方々からはもつと思いやりや信頼を期待できただろうと言わざるを得ませんね。

ジェイムズ・フォード 「非難には動じず」どういたしまして。

スウェイルクリフ あなたが不快なのは理解できます、ウィンターさん。しかし、我々は実に難しい立場にありました。

ジェイムズ・フォード とにかく、我々はもう行かなければなりません。急げば、五時四十分発のミドルプールに帰る列車に間に合うでしょう。さようなら、ウィンター夫人。さようなら、皆さん。

ジョージ・ウィンター ベネット君が外までご案内しますよ。さようなら。さようなら、ボイス。僕は一両日中にミドルプールに行くから……。『彼らが出て行くこうとする』ああ、ところで、ボイス、ちょっとした情報だが——新内閣ではロバート・コルビーが陸軍省を任されることになっているんだ。

第二幕終わり

第三幕

第一場

ミドルプールにある「パレス・ホテル」の広々とした居室。その種の部屋特有の趣きを欠いて、豪華に家具が備え付けられている。すべてが大きく、豪華で、どちらかと言えば型にはまりすぎている。一流の会社が請け負って装飾をやったのは明らかである。部屋を予約する実業家に自分が払った金に見合うだけのものを得ているという印象を与えるように目論まれている。

左手に大きなフランス窓があつて、床の部分まで開いており、ホテル正面の広場に面している。背景にはジョージ・ウインターの寝室に通じるドアがある。右手にはドアが二つあつて、一つは廊下に通じており、もう一つはキャサリンの部屋のドアである。テーブルの上には電話がある。

数週間後、選挙の日の午前十時と十一時の間である。

フランシス・エッチングム卿、フレッド・ベネット、ジェイムズ・フォード、ボイス大佐とスウェイルクリフ氏がいる。スウェイルクリフ氏は窓のところ立っている。

幕が上がると、興奮した会話でざわついている。ボイスが電話に出ている。

ボイス 「受話器に向かつて話しながら」そう、ボイス大佐だ。絶対に間違えないでくれよ。

スウェイルクリフ 彼がどうなったのか想像もつきません。考えられるとしたら……。

エッチングム 「ボイス大佐に向かつて」そこにはいないんなら、よそを当たった方がいいぞ。

ジェイムズ・フォード 「叫びながら」お願いだから、自分が話すのを聞かせてください。

以上三つのセリフは同時に発せられ、そのすぐあとに、駅を通過する列車のうっとうしい轟音が聞こえる。エッチングムはびくつとする。

エッチングム ああ、何だ、列車か。

ジェイムズ・フォード 「苛立って」あなたはもう慣れっこだと思っていました。

エッチングム もう、わしは一週間寝とらんのだぞ。あれが一晚中続くんだからな。

ベネット 昨日の夜はちよつとばかり悩まされました。でも、寝ついてしまったら、夢の中で遠くに口笛が聞こえました。

ボイス ウインターは困ってないみたいです。

エッチングム もしそうでなかったら、彼はこのホテルに来なかっただろうね。

ジェイムズ・フォード 「ジョージ・ウインターの部屋の方に頭をかしげながら」彼は隣の

部屋で寝るんですね？

ボイス 昨日の夜は熟睡したと言っていました。

ベネット 「同時に」今朝はとてもしっかりして見えました。

エッチングム 彼の部屋は線路の上も同然だというのに。

ジェイムズ・フォード そんな、馬鹿な。

エッチングム いや、そうなんだ。庭まで階段を一続き下りるだけで、線路から二十フィートの中なんだから。

ジェイムズ・フォード ホテルにはミドルプールで最悪の場所です。連中がわたしのところに来た時に、そう言ってやりました。わたしに出資させたかったんです。わたしのせいではありません。

スウェイルクリフ 「ジェイムズ・フォードが話し終わる前に口をはさんで」確かに、ウインターさんはもうここに来ていなければなりません。

ジェイムズ・フォード あなたが窓の外を見ても、彼が早く来ることにはなりません。

ボイス 一刻千金です。すぐに何とかしなければなりません。

エッチングム 「遮って」彼がどこにいるのか、ご存じじゃないのか、大佐殿？

ボイス 彼は十時三十分に「パーカー・アンド・ギボンズ」で演説をする予定でした。でも、彼がどういう人間かご存じでしょ。同時に六か所です。わたしの知る限り、彼は捕まえるのが最も難しい人です。

スウェイルクリフ 「パーカー・アンド・ギボンズ」に使いを出しましたか？

ボイス ええ、もちろん、出しました。彼にすぐホテルに来るよう伝えるため、何人も出しました。

ベネット 「教え諭すように」あなたは気をつけていましたか？ 気をつけていなかったのでは……？

ボイス わたしがこの仕事の初心者だとは思いませんよね？

ベネット でも、わたしには、起きたことをあなたがどうやって彼に理解させたのかが分かりません。

ジェイムズ・フォード 彼は理解させていません。「パレス」で待っていると聞いたら、すぐにウインターは何かが起ころうとしていると思うでしょう。

スウェイルクリフ 彼が委員会室に行かないのは確かですか？

ボイス もし彼が行けば、戻らされるでしょう。我々があそこで会議を開けば、大変な噂になると思います。だから、わたしはこのホテルを提案しました。

エッチングム 「遮って」頼むからそんな意気消沈した顔をせんでくれ、スウェイルクリフ君。

スウェイルクリフ あなたは実務家です、フォードさん。この記事には少しでも本当のことが書かれていると思いますか？

ジェイムズ・フォード フランシス卿に聞いた方がいいです。彼は新会社の会長です。わた

しは投資家にすぎません。

ベネット もちろん、何でもありません。すべてが悪意に満ちた中傷です。

ジェイムズ・フォード それなら、ウインターが言うべきことを聞こう。

エッチングム 「同時に」神よ、彼を来させたまえ。

ベネット 「ジェイムズ・フォードに向かって」あなたは何かがあると言うつもりではありませんか？

ジェイムズ・フォード わたしは一万株申し込みました。経済紙のその日の号で金鉱が掘り尽くされたも同然だという記事が世に出て、ウインターのところの専門家が鉱石には砕くだけの価値もないと報告したというのに、わたしがそうしたいとは、あなただっと思わないでしょう。

ボイス ミドルプールで一ペニーでも余分に持っている人はみんな株を申し込みました。

ジェイムズ・フォード ジョージ・ウインターはわたしに、彼が今までに持った中で一番の大物だと言いました。

ベネット 今まで彼があなたを裏切ったことはありません。どうして今回は裏切ると言うんですか？

ジェイムズ・フォード わたしは彼が裏切ったとは言っていない。しかし、彼はわたしに有り金を全部賭けると言いましたが……わたしは価値のない一万株は欲しくありません。

ボイス いまいまいのは、それが選挙のその日にそうなろうといっていることです。

エッチングム ロンドンの新聞の記事のせいで世間が彼に投票しないとしたら、けしからんことだ。

ボイス あなたは選挙民がどんなものかご存じです。彼らはまごつきます。議席は常に浮動票によって取れたり取りなかつたりするものです。

ジェイムズ・フォード そう、何はさておき、議席を勝ち取ることです。

スウェイルクリフ でも、ウインターさんがすぐ来て、我々がどうすべきか心を決めないと、それもできないでしょう。

エッチングム 委員会室に電話したまえ、ボイス、彼のことで何か聞いてないか聞くん。

ボイス 分かりました。そうします。

スウェイルクリフ わたしは、ボイスがロンドンからの電話の伝言を見せてくれた時ほど驚いたことはありませんでした。

エッチングム ロンドンの新聞はいつここに届くのかね、フォード君。

ジェイムズ・フォード 十時半には届くはずですよ。

ボイス 「受話器に向かって話しながら」七十八番につないでくれますか？

エッチングム 「同時に」一体どうして新聞を持って来ないんだ？

ベネット 心配しないで。届き次第持って来るよう、ボーイに言っております。

ボイス 「電話口で」やあ、あなたですか、委員長？ ウインターさんがそちらに行きませんでしたか？ では、ロジャースを寄こしてください。ここにです。いや、ここにです、けしからん！ 「パレス」にです。「受話器を置きながら」駄目でした、今朝早くから見かけていないそうです。

エッチンガム これを聞いたら、敵は何をすることやら。

ジェイムズ・フォード おや、心配ですか。彼らは我々に劣らず早々とこの非難のことを聞いています。

ベネット あなたは電話を切らずに、彼らがロンドンに連絡するのを防ぐべきでした。

ボイス やれやれ、同時にすべてのことを考えることはできません。

エッチンガム わしには、逆に万事をこれ以上できないくらい不様にやりそこなったと思えるがね。

ボイス 選挙で候補者を立てたことがあれば、あなたにもそれほど簡単ではないことが分かるでしょう。

エッチンガム わしは選挙の運動員じゃない。知ったことか。

ジェイムズ・フォード まあまあ、お二人さん、そんなことで言い争うのは無駄なことです。

以上三つのセリフは同時に発せられる。

スウエイルクリフ 得票数はどうなりますか？

ボイス ああ、我々はかつてないほどの高い得票数を得るだろうと思います。

ジェイムズ・フォード もちろん、もうすぐ中だるみになるでしょうが。投票所が開いた時に、多くの労働者が投票しました。

ボイス 晩飯時には二倍の数になっているでしょう。

スウエイルクリフ トーリー党が何をするか分かりませんか、大佐？

ボイス 分かる気がします。彼らはあの記事が届き次第、印刷するでしょう。

エッチンガム 記事全体をかね？

ボイス いま素晴らしいことに、記事全体をです。

ジェイムズ・フォード そして、通りにそれを掲示します。彼らは千部印刷する手はずを整えていて、ビラ貼り人たちにすっかり準備をさせて待機させています。

エッチンガム それはひどい。

ジェイムズ・フォード 馬鹿馬鹿しい！ これはビジネスです。幸運にも、選挙のその日の

朝にモリソンを叩くこんな棒が入ったら、我々だって同じことをやったでしょう。

スウエイルクリフ 幸いなことに、彼らはモリソンを知りませんが、ウインターを知っています。

ジェイムズ・フォード それは危険なことでもあります。彼らはウインターを知り過ぎているかもしれません。

エッチンガム それで一体君が何を言ってるのか、わしには分からん。わしの義理の息子のことを話しているのを忘れとるようだが。

ジェイムズ・フォード いや、我々はお互いにお世辞を言い合うためにここにいる訳ではありません。

ベネット 一、二分待てば、彼がここに来ますから、あなたは彼に言いたいことが言えます。

ボイス 分からないのは、会社を設立するのに、どうして彼がこの特別な日を選んだかで

す。

ベネット 彼はまだまだ選挙は行われなと思うっていました。

ジェイムズ・フォード この二か月、誰もが総選挙のことを噂していました。

ベネット 選挙のことは最後の最後に急に持ち出されましたよ。

スウェイルクリフ 彼はこの問題を隠しておくことはできなかったんですか？

エッチングム 彼はその時には万事解決していたんだ。

ジェイムズ・フォード 「スウェイルクリフに答えて」もちろん、隠しておきました。彼が

頑固だっただけです。わたしは彼に、アメリカの問題を選挙民に知らせるには時期が悪いと言いました。

エッチングム それじゃ、君は仕方なしに株式を申し込んだんじゃないのかね？

ジェイムズ・フォード 次はわたしの知らないことを教えてくれませんか？

エッチングム わしに君に言えるのは、言葉遣いに気をつけても損はないということだ。

ジェイムズ・フォード ありがとう、あなたから行儀作法のレッスンを受けたくはありません。

ベネット かつとなると、あまりいいことはありませんよ。

スウェイルクリフ どうしてウインターさんは来ないんですか？

ボイス 多分、誰かを投票所に連れて行くために車を出したから、自分は歩かなければならないでしょう。

エッチングム わしには万事君が目一杯しくじったんだと思えるが。

ボイス 一体どうしてわたしがあなたに責められなければならないのか分かりません。

ボーイが新聞を盆に載せて入って来る。

ベネット やっと来ました。

みんなはボーイの周りに群がって、新聞を取る。ボーイは出て行く。

エッチングム ありがたい、これで最悪の事態が分かるだろう。

ボイス 『ファイナンシャル・タイムズ』です。

ジェイムズ・フォード いや、何も載っていません。

ベネット これです。『ファイナンシャル・スタンダード』です。

ジェイムズ・フォード わたしに下さい。

ジェイムズ・フォードはベネットから新聞を取って広げる。エッチングムは心配そうにジェイムズ・フォードを見つめる。

スウェイルクリフ 債券や株のことなど考えなければよかったと心から思います。間違いなのは分かっていました。ああ、何という罰だろう！

ジェイムズ・フォード 「苛立って」みんなが同時に新聞を読むことはできません。

ベネット テーブルの上に広げてください。それが一番いい方法です。

ベネットとフォードは急いで記事に目を通す。

ベネット ひどくありませんか？

ジェイムズ・フォード トーリー党がこれを印刷したら、我々はほとんど破滅です。

エッチングム 万事が嘘八百だ。選挙を動かすためにそんな手を使うのは言語道断だ。

ジェイムズ・フォード 「スウェイルクリフに向かって」読みたいですか？

スウェイルクリフ 何て書いてありますか？

ベネット ロンドンからの電話で聞いたことだけです。

ジェイムズ・フォード しかし、わたしが今まで経済記事で見たのと同じくらい強烈に書いてあります。

エッチングム 君はそれがこの問題に支障をきたすと思うのかね？

ジェイムズ・フォード 台なしにするでしょう。

エッチングム ウィンターを見つけるためにできることはないのかね？

ボイス 我々にできることは、待つことだけです。

エッチングム いまほしい、待って、待って、待ち続ける訳にはいかん。何かできる人間は一人もおらんのか？

ジェイムズ・フォード 落ち着いてください、あなた、それぐらいしかできることはありません。

エドワード・オドンネルが急いで入って来る。

オドンネル もう大丈夫です。彼を捕まえました。

エッチングム 助かった。彼は工場の連中に演説しようとしているところでした。

オドンネル 彼に急ぐよう言いました。

スウェイルクリフ 彼は来ますか？

オドンネル ええ、もちろん。すぐここに来ると言っていました。

ジェイムズ・フォード 彼は何のことか知りましたがっていましたか？

オドンネル 彼に聞く暇はありませんでした。それに、わたしが彼を見つけた時、全群衆に話していました。

スウェイルクリフ 彼は重要な問題だと分かっていますか？

ベネット ご心配なく。彼は、すぐ来ると言ったら来ますから。

ボイス 彼が来ました。

エッチングム 「同時に」やっと来たか。

ジョージ・ウィンターが急いで入って来る。

ジョージ・ウィンター 皆さんお揃いで。

エッチングム みんな、君は来ないと思っとったんじゃ。

ジョージ・ウインター 何か問題でもあるんですか？

ジェイムズ・フォード 「新聞を指さしながら」あれが問題なんです。

ベネット 『ファイナンシャル・スタンダード』がカンポ・デル・オロを非難しています。

ジョージ・ウインター 「冷静に」それだけですか？

ジェイムズ・フォード それだけでも大変です。

ジョージ・ウインター ルイシャム家が『ファイナンシャル・スタンダード』を抱き込んだんです。

ジェイムズ・フォード 読んでください。

スウェイルクリフ あの金鉱には金がないと言っています。

ジョージ・ウインター 新聞の連中がああ金鉱のことについて何を知ってるというんですか？

彼らはあそこに行つたことがないが、わが方の専門家は行つてるんですよ。

ジェイムズ・フォード 正にそこです。彼らは、あなたが金鉱を買つた時、所有者があなたに出した報告書に基づいて噂を広め、マクドナルドの報告書を隠していると言っています。

ジョージ・ウインター 「記事に目を通しながら」新聞の連中は何と多くを知っているのか、

驚くね。「電話が鳴る。」何だろう？「しばらくの間、聞き入る。」ロンドンの客だ。君が話しに行った方がいい、フレッド。「受話器に向かつて」いや、わたしには繋がないでくれ。ベネット君が行くから。「ベネットは出て行く。」わが方の株の仲買人が一人来たんです。さてと、話を先へ進めましょう。悪口にしても、その記事には全く感心できませんね。わたしなら、わたしのことについてもずっと不愉快なことを言えたいように。

スウェイルクリフ あなたは随分冷静に受け止めているみたいだ。

ジョージ・ウインター わたしは、かなりきつい言葉を背中に浴びながら、十年間ルイシャム家と戦つてきたんです。

ジェイムズ・フォード あなたは金の出所についてのあの部分を見ましたか？

エッチングム わしは見とらん。

ジョージ・ウインター 読んであげましようか？「読みながら」ウインター氏はこの価値のない金鉱に八万ポンド払つたという話だ。一般的に金詰りなだけではなく中央アメリカ市場が特に難しい時に、どのようにして彼がそれほど額を用意できたかを調べるのは興味深いことかもしれない。ひよっとすると、ウインター氏には、ミダース王（ギリシャ神話・手に触れる物をことごとく黄金と化したフリギアの王）のように、触れたものをすべて金に変える能力があつて、事務所の家具を貴金属に変えたのかもしれない。多分、違うだろう」ですと。大人気ないですね。彼らを喜ばせるために、わたしが商売の秘密を漏らすとも思つてるんですかね？

ジェイムズ・フォード それにしても、金の出所はどこなんですか？

エッチングムはいささかぎよっとするが、ジョージ・ウインターは平然

としたままである。

ジョージ・ウインター わたしが盗んだなんて思わないですよ？　そこが生まれながらの金融マンの出番なんです。生まれながらの金融マンは、手品師が絹のハンカチから兎を出すように金を出すんですよ。

ジェームズ・フォード 「皮肉っぽく」非常に申し分のない説明です。

一瞬、ほかの人間にはほとんど気づかれずに、ジョージ・ウインターとジェームズ・フォードが目と目を合わせる。

ジョージ・ウインター でも、そんなことはほとんど問題じゃありませんよね？

この場面のあとずっと、ジェームズ・フォードはこの件をじっくり考えている。その目は、何かを推し測ろうとしているかのように、ジョージ・ウインターに注がれる。

ボイス　すぐに何とかしなければ。

ジョージ・ウインター　トリー党に掴まれてしまったんですか？

ボイス　彼らはポスター用に記事を印刷しています。

ジョージ・ウインター　困りましたね。

ジョージ・ウインターは間を置いてちよつと考える。考えている間にスウェイルクリフ氏が割り込んでくる。

スウェイルクリフ　あの記事には少しでも本当のことがあるんですか、ウインターさん？

ジョージ・ウインター　一言だって、本当のことはありませんよ。

スウェイルクリフ　おかげで、わたしは非常に厄介な立場になります。

ジョージ・ウインター　どうかしましたか？

スウェイルクリフ　わたしは株が発行される前にプレミアがつくと思っていました。

ジョージ・ウインター　「にっこりしながら」「サンホセ鉄道」みたいに、でしょ？

スウェイルクリフ　フォードさんが言うには、この記事が——この問題を台なしにするそうです。

ジョージ・ウインター　親切的な奴だ……。ちよつとしたギャンブルはずっとやってきたんでしょ、あなたは？

スウェイルクリフ　確実なものであれば、害はないと思っていました。

ジョージ・ウインター　「くすくす笑いながら」いかさまさいころで遊ぶみたいですか？

あなたは何株申し込んだんですか？

スウェイルクリフ　五百株です。

ジョージ・ウインター　賭け事の好きな方だ。

スウェイルクリフ わたしは申し込むつもりはなかったんですよ。わたしはともかくにも五百ポンドしか持っていません。半クラウン（二シリング六ペンス）は上がるはずだと思つて……。

ジョージ・ウインター 半クラウン硬貨五百枚なら絶対持つ価値がありますよね。スウェイルクリフ いい教訓になりました。二度とこのようなことはしないつもりです。その機会もないでしょう。株の代金を払わなければならぬと……。

ジョージ・ウインター わたしの小切手帳を出してくれ、デディー。

オドンネル はい、社長。

スウェイルクリフ どうするつもりですか？

ジョージ・ウインター わたしはこの会社を信用しない人間に入ってもらいたくないんです。スウェイルクリフさん宛に五百ポンドの小切手を切ってくれ。

オドンネルは次のセリフの間に小切手を書く。

スウェイルクリフ あなたは気前のいい方だ。

ジョージ・ウインター 気前がいいですつて？ ちっともそんなことはありませんよ。わたしがあと五百株持つのを嫌がるなんてお思いじやないですよね。

スウェイルクリフ それだけの価値があると思いますか？

ジョージ・ウインター 六か月の内に一株十ポンドの値がつかますよ、絶対にね。

オドンネルはジョージ・ウインターに小切手帳とペンを手渡す。ジョージ・ウインターはサインして小切手を切り取る。

ジェームズ・フォード 「小切手を用意している間に」あなたはまるで金鉱を信頼しているみたいだ。

ジョージ・ウインター 「スウェイルクリフに小切手を手渡しながら」さあ、どうぞ。「ジェームズ・フォードに向かつて」あなたも、わたしがあなたから株を買い取るのをお望みかな？

ジェームズ・フォード 「静かにほほえんで」まだ結構、ありがとう。

スウェイルクリフ でも、それなら、あの記事はどういうことなんですか？

ジョージ・ウインター そんなの、分かり切ったことですよ。レイシャム家は金鉱のためなら目でもくれてやる気だったんですが、わたしのことが手に負えなかったんです。今は尻込みしています。それだけのことですよ。

スウェイルクリフ でも、それなら……。

ジョージ・ウインター それを銀行に入れて、証明書ももらったらわたしにお渡しください。スウェイルクリフ あなたはプレミアがつくと思いますか？

ジョージ・ウインター 間違いありませんよ。多分、半クラウン硬貨五百枚は正にあなたにとってと同じくらいわたしにとっても有益でしょう。でも、わたしは我慢します。それよりもっと大きな利益を望んでいますから。

スウェイルクリフ でも、あなたにとって十分有益なら、わたしにとっても十分有益です。ジョージ・ウインター 駄目です、あなたはもうわたしの小切手をお受け取りになった。もう手遅れです。

スウェイルクリフ まだ小切手があります。改めて受け取ってください。わたしは株を持っておくことにします。

ジョージ・ウインター 「愛想よく」なるほど、構いませんよ。わたしにとっては大した違いにはならないでしょうから。でも、新聞で何を讀んだとしても、売らないでください。半クラウンの利益が何だということですか？ 五ポンドの利益を得るまでお待ちなさい。その時には売ることを考えてもいいですよ。

スウェイルクリフ 「息をのんで」五ポンドですって？ それなら二千五百ポンドになりません。

ジョージ・ウインター 「ボイス大佐の方を向きながら」ちよっと待って。「ビショップ・アンド・ジョーンズ」に電話してください。

ボイス 印刷屋ですか？

ジョージ・ウインター 我々はこの記事に答えるべきだ。何を言ったらいいか、考えていたところなんです。

ジョージ・ウインターは座って書き始める。その間にボイス大佐は電話のところに行く。

ボイス 何番か、ご存じですか？

ジェイムズ・フォード 七〇三だと思います。

ボイス 交換ですか？ 七〇三に繋いでくれますか？ これは印刷屋の「ビショップ・アンド・ジョーンズ」の番号ですよ？

ジョージ・ウインター 辛辣なものにするぞ。

オドンネル わたしにできることはありませんか？

ボイス そちらは「ビショップ・アンド・ジョーンズ」ですか？

ジョージ・ウインター ポスターを二千部、すぐに刷り上げるため、用意万端整えるように言ってください。あなたが今、車で行くところだからって。

ボイス もしもし？ すぐにポスターを二千部刷り上げるために用意万端整えてもらえますか？ わたしが行くところです。ボイス大佐です。はい。それだけです。

ジョージ・ウインター 「ボイス大佐が印刷屋に指示を与えている間に話す」これをどう思いますか、フォード？

ジェイムズ・フォード 拝見しましょう。

ジョージ・ウインター いいですか、我々は有利なんです。彼らは全部の記事を印刷しなければなりません。それに対して、我々は二つの文しか必要じゃないんですからね。

ジェイムズ・フォード ええ、大丈夫みたいです。

エッチングム これ以上良くはならんだろう。

ジョージ・ウインター 写しを作ってくれ、テディー。急ぐんだ。

ボイス 一刻も猶予はありません。

ジョージ・ウインター 車が待っているんだ。

オドンネル 一分とかかりません。

ジョージ・ウインター ビラを貼る人間は確保できますよね。

ボイス ええ、もちろん、心配には及びません。

オドンネル ほら。できました。

ジョージ・ウインター 持って行ってください、ボイス。急いで。

ボイス 「回答の原稿を手に取りながら」任せてください。

ボイスは出て行く。

ジョージ・ウインター 「オドンネルに写しを渡しながら」デイリー、タクシーに飛び乗

って新聞社を一回りしてくれ。そして、次の版にそれを載せるように言うんだ。

一番大きな活字でな。それから委員会室に行って待つんだ。わたしは君に電話するか行くかするから。

オドンネル 分かりました。

ジョージ・ウインター 無理にでもやらせるんだ。さもないと、首にするからな。

オドンネルは出て行き、同時にベネットが入って来る。

ジェイムズ・フォード あなたはわたしが思ったよりもいい方に考えています。

ジョージ・ウインター わたしかどうするのを期待してるんですか？ 頭を床に打ちつけて

髪の毛をかきむしるとでも？ そんな余裕はありませんよ。冷静にいるには、ずいぶん骨が折れるんですから。

エッチングガム ベネットが来た。

ジョージ・ウインター どうだった？

ベネット 大したことは置きませんでした。シティーではみんな、少しばかり興奮しています。

ジェイムズ・フォード 何も悪くなっていませんか？

ベネット 取り立てて言うほどのことはありません。

ジェイムズ・フォード 安心しました。

ジョージ・ウインター すべて問題ない。株を売るような馬鹿はいないでしょう。

ベネット わたしはマクラーレンとヒューイットに電話します。

ジョージ・ウインター 構わんよ。わたしも彼らに用があったんだ。

ジェイムズ・フォード 株式仲買人ですか？

ジョージ・ウインター そうです。いいですか、フォード。わたしはこれから家畜市場で演説することになっています。あなたには、下に下りて行って、わたしが行くまで

彼らを引き留めておいてほしいんです。十分しかかからずに行きますから。電話はちやんと繋がったかな、フレッド？

ベネット ええ。

ジェイムズ・フォード そうするのは構いません。ここでわたしにできることはありませんよね？

ジョージ・ウインター ええ、わたしにすべて任せてください。あなたのためになることはわたしのためになることですから。

ジェイムズ・フォード 急いで行くことにします。

ジョージ・ウインター そうしてください。

ジェイムズ・フォードは出て行く。

ベネット 社長、彼がいる間は余計なことと言わない方がいいと思ひまして。

ジョージ・ウインター わたしは、何かあったなと思つたんだ。だから、彼を行かせたのさ。

ベネット ひどいことになっています。

エッチングム 何てこつた。

ベネット ルイシャム家は我々を攻撃する気です。

ジョージ・ウインター あの記事を見たたん、わたしはそうなるだろうと思つたよ。

ベネット 誰が漏らしたと思ひますか？

ジョージ・ウインター 知るもんか。そんなことは問題じゃない。立ち向かうしかないんだ。

エッチングム わしらの株の値が下がるというのかね、ベネット君？

ベネット 大量に売りに出ています。

ジョージ・ウインター 我々で買い占めることができればいいんだが。売り手を痛い目に遭わせたいんだ。

ベネット これが続くとパニックになるでしょう。

ジョージ・ウインター 君は株の仲買人に、値が下がり過ぎないようにできるだけのことをやれと言つたんだろ？

ベネット 彼らに買うように言ひました、ただ用心しろと。

ジョージ・ウインター 君はロンドンに行つてくれ、フレッド。あそこには頭のいい奴がいないんだ。

ベネット わたしもそれが一番いいと思ひました。列車を調べておきました。急行に乗ることができません。一時過ぎには向こうに着けるでしょう。

ジョージ・ウインター それじゃ、すぐ行つてくれ。君に任せるから。

ベネット 暴落を止めることができれば、わたしが止めます。

ジョージ・ウインター できるかどうかの問題じゃない。止めなきゃいけないんだ。そして、電報で朗報を知らせてくれ。我々は全財産のために電話にかかりつきりにならないければいけないからな。

ベネット 行つてきます。

ジョージ・ウインター で、議会が閉会する時に戻つて来てくれ。話し合ひなければいけないことがあるからな。

ベネット 分かりました。頑張つてください。

ベネットは出て行く。

エッチングム わしたちはもはやこれまでなのか、ジョージ？

ジョージ・ウインター 一体何のことを言ってるんですか？

エッチングム 彼らに本当のことが分かってしまった。あのみすぼらしい金鉱に価値がないことはあそこで活字になっている。

ジョージ・ウインター 彼らは何も証明できませんよ。

エッチングム 知って以来ずっと、わしは夜ほとんど眠っていないんだ。初めて君から聞いた時に銃で自殺すればよかったんだ。

ジョージ・ウインター ねえお義父さん、ケンサルグリーン（ロンドン北西部の地域でカトリックの共同墓地がある）に行くことになってしまふよりはここにいる方がずっと快適ですよ。

エッチングム そして、最悪の場合は……。 「急に話すのをやめる。」 最初、わしはその恐怖に打ち負かされた。だが、少しずつそれに慣れてしまったんだ。君が盗人でペテン師だということにな。

ジョージ・ウインター 「くすくす笑いながら」あなたは物事を随分はつきり言うんですね。

エッチングム それに、ベネットは刑務所に入っていたんだ。それが今はすべて全く当たり前のことのように思える。だから、わしは君と一緒に話したり笑ったりできる。

そして、毎日君と並んで食事するんだ。

ジョージ・ウインター リスクを負わなければ、財産を作ることはできませんよ。

エッチングム 常にあのあるべきところがない債券のことがあつて。あの債券のことが絶えず頭から離れないんだ。

ジョージ・ウインター 三週間で調べられる人間はいませんよ。その時までには、我々は配当を済ませて、債券は問題なく真つ暗な金庫室に戻っているんです。

エッチングム だが、配当することなんかできるのかね？

ジョージ・ウインター もちろん、できますよ。この記事は我々に何の害も及ぼさないでしょう。僕はきつと議席を勝ち取ります。そうなればこのミドルプールの連中も信用してくれます。

エッチングム ジョージ、わしはフォードが心配なんだ。わしはあいつが信用できん。あいつが債券を見つけ出したとしたら？

ジョージ・ウインター 恐ろしく高価なものになるでしょうね。

エッチングム あいつを信じちゃいかん。

ジョージ・ウインター 僕は買収できない人間に出会ったことはありません。そいつが愚か者ならおだてて、賢い奴なら現ナマで。何らかの買収をするだけです。いつだって買収があるんです。

エッチングム フォードには用心するんだ、ジョージ。

ジョージ・ウインター 「にっこりして」僕は恐れてません。

エッチングム 時々怖くなるんだ、君がそんなふう大胆だから。こんなことがうまく行く

なんて不可能だ。

ジョージ・ウインター 僕は自分の成功を信じています。かつて何度か窮地に陥りましたが、その度にすり抜けてきました。僕は以前よりも強いんです。商売がたきの誰よりも十倍以上頭がいいんです。ボールが足元にあつて、ただ転がしさえすればいいんだ。僕にとつて難しいことは何だと思えますか？ 危機的な状況に陥っていて、通り過ぎる警官がどれもポケットに逮捕状を持っているかもしれないなかったこの何週間もの間ほど、僕が機敏でうきうきして、いい気分だったことはありません。十倍以上難しいことがあつても、全部克服したでしょうね。十年で、僕はロンドン一の金持ちになりますよ。十五年もすれば、貴族になります。ああ、世界がオレンジで、それにかぶりついたみたいに感じていて、僕はそれを吸い尽くすんです。

エッチングム 君が望むものをすべて君に与えるために、とれだけの人間が一生を棒に振つて犠牲になるのだろうか。君は屍と絶望を乗り越えて行くんだ。

ジョージ・ウインター ばかな！ 僕が強欲な連中に金儲けという幻をちらつかせると、奴らがついて来るんだ。奴らは働かずに金を稼ぎたいんです。だけど、僕は奴らより頭がいいんですよ。スウェイルクリフは五百ポンドを賭けるんです。彼の五百ポンドは僕のポケットに入つて来ます。それは彼自身の責任です。「われ勝ちに逃げろ、悪魔は一番遅れた者を捕まえる」ということです。「はっとして」そうだ、思いついた……。レイシャム家は自分の株を弱めずには僕の株を攻撃できない。我々は同じ船に乗っていて、どちらかが揺らすと、両方とも転げ落ちるんだ。

エッチングム どういうことかね？

ジョージ・ウインター いいですか、我々はレイシャム家を攻撃するんです。僕はすぐマクラレンのところに電話します。郵便局に行つてベネットに電報を打つてください。彼はきっと事務所電話中ですから。「レイシャムの株を売れ」ってね。彼は分かれます。そうだ、それだよ。もっと早く気がついてもよかつたのに。この勝負をしかけたことを、レイシャム家に後悔させてやるんだ。

エッチングム だが、もし……？

ジョージ・ウインター 困りますね、お義父さん、何も考えずに、言う通りにしてください。我々には失うものは何もなくて得るものばかりだつてことが分からないんですか？ 僕には幸運が巡ってきたのが分かるんです。そして、僕はそれに従います。守りの神です。

エッチングムはため息をついて肩をすくめ、電報を打ちに出て行く。ジョージ・ウインターは興奮して行ったり来たりし始める。

幕

第二場

「パレス・ホテル」の居室で始まるが、今は夜の十一時である。電気スタンドだけがついており、その明かりがキャサリンとフランシス夫人に当たっている。キャサリンは何かの刺繍に取りかかっている。

フランシス夫人 見えるのかい、ねえ？ もっと明かりがほしいんじゃないの？

キャサリン 「優しくほほえんで」いいえ。明かりは目を傷めますから。

フランシス夫人 顔色がとても悪いわよ、ケイト。

キャサリン ここではあまりよく眠れていないの。列車が近いし、しかも一晩中走ってるみたいだわ。

フランシス夫人 ジョージはよく我慢できるわね。あの人の部屋は線路の上も同然なのに。キャサリン おかげさまでもう終わるわ。あと三十分で結果が分かるはず。そして明日には

出て行けるわ。

フランシス夫人 どうするつもりなの？

キャサリン わたしに何ができるって言うの？ 何もできない！

フランシス夫人 お前はとても不幸なんじゃないかしら、ケイト。

キャサリン 「ほほえみながら」そんな風に思わないで。お母様。

フランシス夫人 あなたはわたしたちのためにすべてをあきらめたんですもの。

キャサリン そう思えたらいいんだけど。わたしが離婚をあきらめたのは——それは怖かったから。ロバートが後で後悔するような危険を冒すことはできなかった。常に厄

介なことになりそうだった……。女にとって愛は人生のすべてだけど、男にとっては人生の一部でしかないってことを忘れちゃいけないのよ、絶対に。

フランシス夫人 あの人に何て言ったの？

キャサリン 手紙を出してこう伝えたの。このまま続けるのは無理だと分かりました。わたしを説得しようと思わないで。わたしは幸せではなかったって。

フランシス夫人 かわいそうな子。

キャサリン 彼はとても優しい手紙をくれた。できる限りわたしの気持ちを楽にしてくれた。

そして、もうすべて終わったの。わたしは幸せになる最後のチャンスを逃したんだわ。残りの人生は夫に縛られるんですもの。

フランシス夫人 だけど、まだロバートを愛してるんですよ？

キャサリン 「ほほえんで」ええ。わたしは自分のやったことが嬉しいの。わたしの唯一の救いは、彼がやろうとしているすべての偉大なことを誇れることだわ。わたしがやったことになるでしょうから。わたしが彼にチャンスを与えたんですもの。

アンが入って来る。ツーピースのスーツを着て帽子を被っている。

アン まあ！ 変な人たち。開票が進んでいるというのに、一体どうしてそこに座って

裁縫なんてしてられるの？ こんなに興奮したこと、わたし今までにないわ。

キャサリン どうして帰ってきたのよ。

アン それは、もうすぐ終わるのよ。結果が分かたらかなりの群衆が殺到するだろう

から、邪魔をしない方がいいってテデイーに言われたの。

キヤサリン 「ほほえみながら」聞き分けのいい子ね。

アン いちいち指図されるのが却って嬉しいの。それに、誰もわたしを必要としていないと思わない訳にいかなかった。テデイーは結果が分かり次第来てくれると約束してくれたわ。ねえ、明かりをつけましようか？

アンが電灯をつけると、光で部屋が急にまぶしくなる。

フランシス夫人 目が見えなくなるわ。

アン わたし、選挙が大好き。今までの人生であんな時間を過ごしたことはなかったわ。この何週間かずと楽しかった。テデイーが議員になったらいいな。

フランシス夫人 「眉を吊り上げて」年四百ポンドで？

アン あら、ジョージはもつとお給料をはずむわよ。彼はテデイーがすごく使える奴だつて言ってたわ。ジョージはいい人よね？

キヤサリン あなたが幸せで嬉しいわ、アン。

アン 「素早くちらつとキヤサリンを見てから出し抜けに」わたしたちのこと怒ってないの、ケイト？

キヤサリン おやまあ、どうしてわたしに怒らなくっちゃいけないの？

アン あのね、見る目がない振りをするのつてすごく難しいのよ。ジョージと仲直りしたらどうなの、ケイトイー？

キヤサリン あなたがどうして仲直りをする必要があると思うのか分からないわ。

アン それはね、わたしが思ったんじゃないわ、テデイーが話してくれたの。

キヤサリン 彼は自分のことを考えてた方が賢明だったわね。

アン それはそうだけ……。

キヤサリン もしあなたが、ジョージとわたしの間どんな事情があるか知った上で、彼の好意を受けても構わないとしたら、わたしに何て言わせたいの？ 聞くなとは言わないわ。聞くなと言ったつて、あなたがはねつけるだけなのは分かっているから。わたしは人の誠意なんか信じてないから、この世ではわたしたち一人一人が自分の利益を大事にすることぐらい分かっているわ。

フランシス夫人 ねえ、そんなにきついこと言っちゃ駄目よ。

アン 人は見たままで受け入れるべきだわ。わたしに対して、ジョージはいつも素敵だった。もしお姉様が彼を大目に見てさえあげたら……。

キヤサリン 「きつい口調で遮って」ああ、もう、やめて。我慢できる気分じゃないの。干渉しないで、わたしに自分の人生を送らせてちょうだい。ジョージがあなたたちに結婚するための収入を与えるということだけで、わたしをジョージに縛りつけるのに十分なのは確かだわ。それ以上のことをわたしに望んじゃいけないのよ。

アン ああ、お姉様、ごめんなさい。傷つけるようなことを言うつもりはなかったの。

キヤサリン 「冷静になって」そんなことないわ。許して。騒ぎ立てるつもりはなかったけど、ちよつと気が動転してしまつて。わたしは弱い、我儘な女よ。だから、あな

たはわたしのことを天使のように思ってるようだけど、その半分できえ天使みたいになるのはすごく難しいことなの。あなたがデディーと結婚するのはとても嬉しいわ。あなたたちは愛し合ってるんだから、お金があまりないとしても、それが何だっというの？ きつと、あなたたちはものすごく幸せになれると思うわ。

アン お姉様はいい人ね。

フランシス・エッチングラムが入って来る。ディナージャケットを着て黒ネクタイをしている。アンは衝動的に跳び上がる。

アン 終わったの？

エッチングラム いや、心配で居たたまれなかったんじや。

フランシス夫人 でも、ジョージが当選するんでしょ？

エッチングラム 誰にも分からんよ。

アン でも、どうなりそうだったの？

エッチングラム ウインター、モリソン、ウインター、モリソン。一方に一票入ると、もう一

方に一票。永遠に続きそうだった。

フランシス夫人 前は七十五票差で勝ったわ。

エッチングラム ここ最近、いろいろと噂されて、疑われて、非難されたことの影響は誰にも

分からんのだ。正にそれで違いが出たのかもしれない。もう、気が狂いそうだ。

キャサリン 座ってお休みになって。すごく疲れているみたい。

エッチングラム ジョージだって心配なんだ。わしには彼の顔色がとてもよく分かる。彼は、

自分は確信しているかのように思わせようとしているんだ。

アン どんな人だって心配せずにはいられないわ。

フランシス夫人 「突然ぎくっとして」何か叫び声が聞こえたと思っただけけど。

アン ああ、出て来なければよかった。

フランシス夫人 窓を開けましょうよ。ひよっとすると、何か聞こえるから。

フランシス夫人とアンは窓のところへ行って開ける。

フランシス夫人 聞こえない。間違いだったわ。

アン 聞いて。確かに歓声が聞こえるわ。

アンはバルコニーに出て行く。アンとフランシス夫人の姿は半分見えなくなる。従って、次のキャサリンとフランシス卿の場面は、彼らに聞こえないことを想定している。

エッチングラム 「キャサリンに向かって低い声で」なあ、お前、わしのことを許してくれらるな？

キャサリン まあ、お父様、やめて。わたしが決心するまで、何も言わないでくれたのはと

ても立派でした。今や本当のことが全てが分かったから……。

エッチンガム わしたちに残された唯一の希望はこのまま続けることなんだ。彼が当選して、わしたちが万事協力してやっていけば、この混乱から抜け出せるかもしれない。彼はそれを確信している。唯一わしを支えていたのは、お前たちみんなへの思いだった。わしがあの場ですぐ警察に行くか——自殺していたら、お前たちみんなが破滅していただろう。

キヤサリン そして、ジョージを信用して持っているものをすべて預けた不幸な人たちもみんなね。

エッチンガム わしが正しかったと思ってくれるよな、ケイト？ わしが憶病なだけだったってことじゃないよな？

キヤサリン 正しかったのだといいけど。

エッチンガム しかし、もしすべてが水の泡になったら？ もし彼が会社を作れなくて本当のことが明るみになったら、その時はわしがお前たちを無駄に犠牲にしたことになるだろう。

キヤサリン いえ、そんなふうには思わないで。

エッチンガム わしは、彼が選挙で勝てば、決定権を持つだけの有力者になれると信じとる。

キヤサリン でも、もし鉱山が価値のないものだったら？

エッチンガム 中央アメリカの形勢が一変したら、わしたちは株を買い入れるつもりだ。すでに見通しは明るくなっている。彼は、一文だって失う者はいないと約束したんだ。そうになったら、わしはうまくいく。ああ、どんなに感謝することか！

キヤサリン ええ、分かっている、分かっている。

エッチンガム 誰かに言いたかったんだが、お母さんには言えなくてな。

キヤサリン 話してくれてよかった。もう二人で分かっているから、耐えるのが楽になったわ。

アン やっとだわ！ お父様、お父様！

アンが興奮して部屋の中に戻って来ると同時に、遠くでかすかな叫び声が聞こえる。エッチンガムは跳び上がる。

エッチンガム 助かった。ひどい緊張だった。

フランシス夫人 今度は間違いないわ。

エッチンガム 彼が当選だな？ 彼が当選だな？

アン もちろん、当選よ。今まで、これほど確信できたことはないわ。

エッチンガム その通りなら、わしたちは無事だ。きつと、転機の始まりなんだ。

フランシス夫人 どうしてデビーは急がないのかしら？

アン 叫び声を聞いて。素晴らしくない？

さらに叫び声が聞こえる。今度は少し大きい。

エッチンガム 数字を読み上げているんだろう。

テディー・オドンネルが、帽子を頭の後ろに載せ、髪の毛が乱れた状態で駆け込んでくる。

オドンネル 彼が当選です。

アン 何て素晴らしいの！

フランシス・エッチングムは、圧倒されて話すことができず、気持ちを落ち着かせようとして椅子に座り込む。キャサリンは同情を示そうとフランシス・エッチングムの肩に手を置く。

フランシス夫人 得票差は何票なの？

オドンネル 二十七票です。

アン まあ、危機一髪ね！

オドンネル 最後は負けるかと思ったよ。モリソン、モリソン、モリソン、もう少しで叫び声を上げるところだった。

エッチングム だとしても、とにかく彼は当選したんだ。

アン よかったわ。

アンは、感情に駆られてオドンネルの首に両腕を回し、キスする。

オドンネル 本当に、数字が読み上げられた時は、待ち望んでいた瞬間でした。誰もあんな

叫び声は聞いたことがありません。

キャサリン 彼は今どこにいるの？

オドンネル わたしが出て来た時、彼は群衆に向かって演説をしているところでした。でも一言も聞こえませんでした。誰もが声を限りに叫んでいたからです。実際、わたしも大声を出しました。

アン 「熱狂的に」嬉しくないの、ケイト？

キャサリン 「微笑んで」いいえ、とても嬉しいわ。

アン どうしてそんなに冷静に受け止められるのかしら！

フランシス夫人 彼はここに来るのかしら？

オドンネル はい。彼の伝言を伝えるのを忘れていました。ケイトによろしくということと、あつと言う間にここに来ると言っていました。

アン 急げばいいのに。彼は最愛の人じゃないの？

オドンネル 彼は僕が知り合った中で最も偉大な人だ。完璧に素晴らしい人だ。彼のことに ついて何かあるのか知らないけど、信じない訳にはいかない。今朝、新聞のあのとんでもない嘘のことではとても素晴らしいかった。ほかのみんなはウサギと同じくらいおびえていたけど、彼は全く動じなかったよ。

アン 「興奮して」車だわ。

オドンネル そうに違いない、何でも君の好きなものを賭けてもいい。

アン すぐ来てくれてよかった！「ドアに駆け寄って開ける。」ジョージ、ジョージ！

ジョージ・ウインターがばたばたと入って来て、アンを両腕に抱き締める。

アン 素晴らしいじゃない！

ジョージ・ウインター 何と、輝かしい勝利だ！

続いてボイス大佐、ジェームズ・フォード、スウェイルクリフ氏とほかに二人の男が入って来る。

エッチングム 助かった！

ジョージ・ウインター 気が気じゃありませんでしたか？ わたしは当選するって分かって

ました。一瞬たりとも疑いませんでしたよ。

ジェームズ・フォード 「そっけなく」あなたが自分を信じていないと言える人はいません。

ジョージ・ウインター ふん、自分を信じないで、どうして他人に自分を信じてもらえるんですか？ 飲みましょう、みなさん！

オドンネル 呼び鈴を鳴らしましょうか？

ジョージ・ウインター 上がって来る途中でボーイに言っておいた。ほら、来た。「ボーイが二人、グラスとシャンパンのボトルを持って入って来る。」今夜は絶対禁酒主義はなしで、スウェイルクリフさん。本当にもう、喉が渴いた。注いだ。注いだ。

スウェイルクリフ わたしはアルコールは飲みません、ウインターさん。

ジョージ・ウインター 「どんな悲しい心でもいつかは喜ぶものである」ってね。グラスを持ちましたか、みなさん？ さあ、フランシス夫人。引っ込んでないで、アン。

アン はい、お願い。

ジョージ・ウインター よろしい。ほら、テイデーも。みんないいですか？ みなさん、家内を紹介します。この輝かしい勝利は彼女のお陰です。

全員 ウインター夫人、ウインター夫人。キャサリン。

キャサリン 「恥ずかしそうにはにかんで」ありがとうございます。

外で叫び声上がる。「ウインター、ウインター、彼はとてもいい奴だから。」

ジョージ・ウインター ほら、みんながホテルまでやって来たんだ。

アン あの群集を見て。

オドンネル 窓を開けましょうか？

ジョージ・ウインター 「前に進みながら」そうだな。

彼が姿を見せると、叫び声が急にもっと騒がしくなる。歓呼に次ぐ歓呼が

聞こえる。ジョージ・ウインターは手を挙げて静まらせる。

ジョージ・ウインター 諸君、我々は大きな戦いに勝った。我々は、嘘をつき、人を騙し、スキャンダルを流す作戦をもとめずに勝った。真実は常に勝る。正直が一番の作戦だ。輝かしい勝利だ、諸君、そして、イギリス人の正直さ、イギリス人の公明正大さ、イギリス人の高潔さゆえの勝利だ。諸君、諸君の健康を祝して乾杯だ。

ジョージ・ウインターは群衆の前でグラスのシャンパンを飲む。演説の間ずっと続いていた歓呼の音が、今や段々と大きくなる。「ウインター夫人」という叫び声上がる。

ジョージ・ウインター ケイト、君を呼んでるぞ。

キャサリン 嫌よ、お願い。

ジョージ・ウインター 来るんだ。間違った謙虚さはいららないんだ。彼らに会釈してくれよ。それくらいいいだろ。

ジョージ・ウインターはキャサリンの手を取って、窓のところまで引つ張って行く。群衆は再び大声で歓呼の声を上げる。ジョージ・ウインターは部屋の中に戻って来る。

ジョージ・ウインター ああ、何という瞬間だ！

ボイス あなたは疲れ切っているに違いありません。

ジョージ・ウインター わたしが？ 元気一杯です。何があってもへたばりませんよ。

オドンネル 「懐中時計を取り出しながら」おやおや、もうこんなに遅いとは思わなかった。

ボイス わたしはもう帰ります。

ジョージ・ウインター そんな、馬鹿な！ なに、夜はたった今始まったばかりですよ。

ボイス わたしはもう去りました。

スウェイルクリフ わたしも帰らなければなりません。妻が何もかも知りたがっているでしょうから。

ジョージ・ウインター それなら、無理には言いません。みなさんも、わたし同様素敵な夜をお過ごしください。

スウェイルクリフ あなたは大丈夫だと思いませんか——あの件は？

ジョージ・ウインター 心配しないでください。順調そのものです。わたしが関係すること
がうまくいかなんてことはありっこないですから。

スウェイルクリフ では、おやすみなさい。

ジョージ・ウインター おやすみなさい。

ボイス大佐、スウェイルクリフ、彼らと一緒に入って来た二人の男は出て

行く。

ジョージ・ウインター あなたはまだ帰りませんよね、フォード？

ジェイムズ・フォード ええ。差し支えなければ、二、三分時間をいただける時に、お話ししたいのですが。

ジョージ・ウインター お好きなだけ何分でも。いつ始めてもいいですよ。

フランシス夫人 お仕事の話なさるんなら、わたしたちはいない方がいいわね。

ジェイムズ・フォード わたしは急ぎませんよ、奥さん。

フランシス夫人 もう大分遅いですから。

オドンネル もう仕事の話をするには疲れているんじゃないですか？

ジョージ・ウインター 疲れてないかって？ 疲れてるっていうのがどういうことか、わたしには分からんね。わたしの伝記を書く時は、ねえ君、こう書くといい。「最も激しく戦った選挙戦のあと、群集の歓声はまだ耳に残っている時、夜中に彼は元気はつらつとして座り、夜明けまでミドルプール一番の賢い男と仕事の話をした」ってね。

ジェイムズ・フォード 「そっけなく」「十分間」と入れた方が、より正確でしょう。

ジョージ・ウインター でも、インパクトがかなり弱くなりますね。

アン あなたはシャンパンの飲み過ぎだわ、ジョージ。

ジョージ・ウインター 「笑いながら」馬鹿な。一ガロン（約四、五、四六リットル）だって飲めたし、飲んだあとでも全く素面でいられたさ。

アン では、おやすみなさい。

ジョージ・ウインター 「アンにキスしながら」おやすみ、お嬢ちゃん。おめでたの日はもう指定したのかい？

フランシス夫人 おやすみなさい。

ジョージ・ウインター 「オドンネルに向かって」そして、こう付け加えるといい。「義母を両腕で包んだ」ってね。

フランシス夫人 「ジョージ・ウインターが自分を抱き締めようとしているのを避けながら、にっこりして」おめでとう。大変な勝利だったわね。

ジョージ・ウインター いえ、始まりにすぎません。世界がわたしの足下にあります。十年もすれば、わたしはアレキサンダー大王（マケドニアの王、紀元前三三六〜三二三）、ギリシャ・エジプト・ペルシャ帝国やアジアの広範な地域を征服した）みたいに、もはや征服すべき国がないと言って泣くでしょう。

オドンネル もうわたしに用はありませんよね？

フランシス夫人とアンは出て行く。

ジョージ・ウインター ああ、寝たまえ。君は若いし、十分な睡眠が必要だ。君が列車の音で悩まされないようにしてやらなければ。部屋はどこかね？

オドンネル あなたの部屋の真上です。でも、わたしは熟睡できます。

ジョージ・ウインター それはいい兆候だ。君はそのうちにわたしと同じくらい偉大な男になるだろうよ。

オドンネル 「笑って」おやすみなさい。

ジョージ・ウインター 「エッチングムに向かつて」あなたも寝た方がいいですよ、お義父さん。疲れ切ってるみたいだ。

エッチングム 「だるそうに」わたし全員がはらはらする一日だったな。

ジョージ・ウインター 人生を生きる価値のあるものにする日々の中の一日でした。
エッチングム おやすみ。

二人が出て行くと、キャサリンが進み出て来る。

キャサリン まだあなたにおやすみは言わないわ。もしフォードさんが長いことあなたを引き止めなければ、後でお話ししたいの。

ジェイムズ・フォード せいぜい十分でしょう、ウインター夫人。

ジョージ・ウインター 「不自然なくらい慇懃に」仰せのままに、奥様、いつなりとも。

ジェイムズ・フォードに軽くお辞儀をして、キャサリンは出て行く。

ジョージ・ウインター わたしは、自分の運を信じるのには正当な理由があると言いました。すべてうまくいっています。ルイシャム家は、これ以上わたしに抵抗できません。わたしを受け入れるしかないでしょう。我々が持ち分を一緒にすれば、中央アメリカを完全に手中に収めるられるんです。あなたも仲間に入るんですよ、ジェイムズ。あなたは思ってる以上の金持ちになるでしょう。そして、わたしがルイシャム家と親しくなって、チャンス到来を待つんです。マニー・ルイシャムはもう長いことありませんし、息子たちは愚か者です。彼が亡くなったあとは、わたしがすべての事業を手中に収めます。わたしには、あそこの市場の誰よりも十倍の頭脳があります。わたしに抵抗できる人間なんて一人もいませんよ。

ジェイムズ・フォード 「落ち着いて」あなたは『ファイナンシャル・スタンダード』のあの記事のことを忘れていませんか？

ジョージ・ウインター 「陽気に」ああ、それをわたしと話したかったですか？ あんなのは、わたしの夜の睡眠の妨げにもなりませんよ。ところで、それで思い出ししました。わたしが選挙で勝ったのは、あなたの助けがあったからじゃなかったんだ。あなたに家畜市場に行つて演説するようにお願いしましたけど、わたしが行ったらあなたのいた形跡がありませんでした。随分不様な話ですね。

ジェイムズ・フォード それは、たまたまそれで問題なかったからです。

ジョージ・ウインター 結局のところ、どこへ行ったんですか？

ジェイムズ・フォード 「ジョージ・ウインターを見ながら」ロンドンに行きました！

ジョージ・ウインター 「自分が疑っているのをできるだけ隠そうとしながら、無関心を装って」そうですか？

ジェイムズ・フォード 「控え目なくらいに落ち着き払って」わたしはあの記事の一節に衝撃を受けました。あなたがどこから金を調達したかについての一節です。

ジョージ・ウインター 「にっこりして」あなたがちよつと気にしてるみたいだって、分かりましたよ。

ジェイムズ・フォード あの時はかなり金の話りでした。

ジョージ・ウインター わたしのような立場の人間は、いつだって金を手に入れることができます。

ジェイムズ・フォード 大金でした。

ジョージ・ウインター 手ごろな金額です。

非常に短い間がある。二人の男は、共に抜け目なく、鋭く、厳然として、決闘でもするかのように向かい合う。

ジェイムズ・フォード 衝撃だったのは、ミドルプール投資会社が銀行に大量の債券を預けているということです。

ジェイムズ・フォードは、このセリフの効果を確かめるかのようにジョージ・ウインターを見つめる。

ジョージ・ウインター 「にっこりして」ええ、まだありますよ。

ジェイムズ・フォード そう誓えますか？

ジョージ・ウインター ええ。

ジェイムズ・フォード わたしは考えれば考えるほど気になりました。銀行に行きました。

ジョージ・ウインターは素早くジェイムズ・フォードを見るが、それ以外には、自分の盗みが見つかったことに気づいた様子は見せない。

ジェイムズ・フォード あなたとエツチンガムとベネットがサインした債券の引渡し申請書を見せてもらいました。

ジョージ・ウインター 葉巻でもいかがですか？

ジェイムズ・フォード いえ……。あなたはあの債券をどうしたんですか？

ジョージ・ウインター 会計検査官が検査する時にあるべき所があれば、疑問を持つ人間はいませんよ。

ジェイムズ・フォード 「より厳しく」わたしの事務所の雑用係に小口現金から一ポンド取る権利がないのと同じように、あなたにもあの債券に触る権利はありませんでした。

ジョージ・ウインター 一体、何を言ってるんですか？

ジェイムズ・フォード わたしはミドルプール投資会社の役員です。すぐに債券を見せるよう要求します。

ジョージ・ウインター 二週間で見られますよ。

ジェイムズ・フォード いえいえ、あなた、それでは駄目です。

ジョージ・ウインター 「たまりかねて」馬鹿なこと言わないでくださいよ、ジェイムズ。

商売は商売だつて、わたしと同じくらいよくご存じなのに。

ジェイムズ・フォード ええ、でも、商売は盗むことではありません。

ジョージ・ウインター 「明らかにかつとなつて」よくもまあ、わたしに向かつてそんなことが言えるもんだ！

ジェイムズ・フォード わたしを恫喝しようとしても無駄です、ジョージ。わたしはあなたが株主総会でそうするのを見たことがあります。それは時として非常に有効ですが、今はそうする場合にはありません。

間がある。ジョージ・ウインターは今の状況を考えて、この状況に立ち向かうかおうと意を決する。

ジョージ・ウインター よろしい、それなら……。わたしは、あの金鉱がうまい儲け口だと知っていた。その支払いをするために債券を担保にしたんだ。利潤から金が入ってきたら、すぐに債券を取り戻すつもりなんです。もう、お分かりでしょ。

ジェイムズ・フォード それは窃盗そのものです。

ジョージ・ウインター 「横柄に」あなただつてわたしと一緒に加わりたいんですよ。「彼は、本能的に嫌悪するジェイムズ・フォードの気持ちの動きに気づかない。」あなたにただで株を上げますよ。一万ポンドということです。それを手放さないでおけば、一年のうちに価値が五万ポンドになりますよ。

ジェイムズ・フォード ありがとう。でも、わたしは数千ポンドのために生涯のまっとうな仕事を賭けるつもりはありません。

ジョージ・ウインター それなら、何がお望みなんですか？

ジェイムズ・フォード 何も。

ジョージ・ウインター 「わずかにほほえみを浮かべて」あなたは二度ミドルプールの市長をやつて、党のためにたくさんの仕事をしました。いい加減、政府があなたの仕事に感謝の気持ちを表明してもいい頃だと思わざるを得ません。

ジェイムズ・フォード あなたは自分の部下を誤解しています、ジョージ・ウインター。わたしは三十年間あくせく働いてきました。どんなチャンスも逃したことはありません。わたしがせんが、人が恥なければいけないようなことはしたことはありません。わたしは息子に残すためにまっとうな仕事を築き上げてきました。まっとうな名前もそうです。悪事を始めるにはもう年を取り過ぎています。

ジョージ・ウインター 「たまりかねて」あなたは仕事の話がしたいんだと思つてましたが。ジェイムズ・フォード 正しいもの正しい、誤りは誤り。それを否定することはできません。

わたしは何らかの自分の行動が公明正大でないと思つたら、一瞬たりとも気が休まらないでしょう。それはわたしにとって称賛に値することではありません。わたしはそういう運命なんです。

ジョージ・ウインター 「子供に話しかけるかのよう」ねえ、ジェイムズ、わたしたちはここ二十年來の仲良しだったよね。

ジェイムズ・フォード 「小さな声で」今日の午後、あなたがやったことを見つけた時は――そう、涙が出そうでした。

ジェイムズ・フォードの口調には本当に苦悩している様子があり、ジョージ・ウインターはびっくりする。ジョージ・ウインターは、事態が深刻だということに初めて気がつく。彼は怖くなり始める。

ジョージ・ウインター でも、あなたが言ってるのは、本気じゃ……。

ジェイムズ・フォード 「必死になって」どうしたら分かってもらえるのでしょうか？ 今わたしがあなたのやったことを知って恐怖でいっぱい嫌でたまらないことが、あなたに分かるとは思えません。あなたがこれをやったとしても、それ以外のやらなかったことは誰も知りません。わたしはあなたにつらく当たりたくはありません。でも、義務は果たさなければなりません。わたしはこの会社の役員です。友達全員を会社に入れました。妹も入れました。そして、この金鉱です。あの新聞が言っていることは本当なんですか？ わたしの知る限り、これは詐欺でもあります。

ジョージ・ウインター 「急に心配になって」わたしがもうすぐ最高の地位につくからといって、突き落とすつもりじゃないんですか？ 世界がわたしの足元にあります。一か月もらえさえすれば、すべてをちやんとできるんです。

ジェイムズ・フォード 五分前は二週間でした。わたしは信じません。この状況はよくありません。人が正直と不正直を隔てる一線を越えてしまうと、絶対に戻れません。ジョージ・ウインター 今わたしを裏切ったら、みんなが破滅します。続けることでしか、財産を守る見込みはないんです。金はなくなってしまう。わたしを警察に突き出して、金は取り戻せませんよ。

ジェイムズ・フォード わたしは運に任せてやってみるしかありません。何にしても、わたしと言わなければ、共犯者になってしまいます。今日わたしが銀行に行ったことは証明できます。

ジョージ・ウインター それなら、あなたの言っていることがわたしにも分かります。時間さえくれれば、わたしがすべてを正すことができるということを、あなたに分かりやすい形で示せば……。

ジェイムズ・フォード 絶対に無理です。わたしには考えてやらなければならない妻がいて、息子たちもいます。これは窃盗で、あなたが取り上げたのは親のない人や未亡人の金ですから、わたしの取るべき道は一つしかありません。

ジョージ・ウインター どうしようっていうんですか？

ジェイムズ・フォード 「とぎれがちに」神様、わたしはどうすればいいのでしょうか？ わたしは息子たちを信用するのと同じようにあなたを信用していたのに。

ジョージ・ウインター さっさと言ってくださいー！

ジェイムズ・フォード わたしは——わたしは警察の本部長に相談するしかありません。

ジョージ・ウィンター そんなことしないでしょ？ 警察に行くなんて本気じゃないですよ
ね？ そんなの気違い沙汰だ。まったくあり得ない。馬鹿げてる。

ジェイムズ・フォード わたしは二度と自尊心を持つことができないでしょう。もしわたし
が……。これはわたしの良心やわたし自身の問題です……。ああ、全く、どうし
てあなたはわたしをこんな立場に置いたんですか？

ジョージ・ウィンター いいですか、ねえ、わたしは曲がったことをやりました。認めます。
わたしがやったことは、前にほかの人間がやったことであって、それがうまくい
ったんです。あの時は、暴落は二、三日しか続かないだろうから、一週間のうち
に債券を戻せると思っただけです。ちよっと間違っただけです。あんまりつらく当
たられると……。[声をつまらせて] あなたが自分の番になったら情けをかけて
もらうのを望むように、わたしにも情けをかけてください。この一回の失敗でわ
たしを破滅させないでください。わたしがあなたの前で恥をかいているというこ
とに、あなたにとって何かの意味を持たせてください……。犯罪を犯したんじゃない
ありません。ただ考えが足りなかったただけなんです。もう一度チャンスをください
い。

ジェイムズ・フォードは、顔を両手ではさんで、じつくり考える。彼はジ
ョージ・ウィンターの訴えに深く心を動かされている。ジョージは、彼を
鋭く見つめながら、彼がなびきそうだと思っている。

ジョージ・ウィンター わたしたちは、いい時も悪い時も一緒にやってきました。あなたと
わたしは仲良しでした。今まであなたがわたしを非難するような理由はありません
でした。

ジェイムズ・フォード 「とぎれがちに」あの気の毒な人たちの金をまた危険にさらすこと
はできません。

ジョージ・ウィンター わたしがミドルプール・グループの役員を辞めれば満足ですか？
わたしが体面を保つのに六か月くれれば、辞任します。

ジェイムズ・フォードは、ジョージ・ウィンターが信用できるかどうか考
えながら、彼を見上げる。ジョージは胸をどきどきさせながら答えを待つ。
恐怖で気分が悪くなりそうになっている。

ジェイムズ・フォード わたしがどうするか言いましょ。明日の四時までに債券が元の場
所に戻れば、わたしは何も言いません。

ジョージ・ウィンター 「びっくりして」明日だって？ できっこない。無理だ。

ジェイムズ・フォード わたしがあなたのためにできるのはそれだけです。

ジョージ・ウィンター 「何と言ったらいいか、ほとんど分からずに」でも、そんなことで
きる人間なんかいいくない。無理なのは、あなただって分かっているはずだ。一週

聞かれたって、できっこない。無理、無理、無理。今日受けた攻撃で、我々は――我々はぐらついています。我々にできるのは、流れが変わるまで持ちこたえることです。そんなんじや、チャンスをくれたことにならない。全然ね。明日だなんて！ とんでもない！

ジェイムズ・フォード　今さっきのが、わたしの最後の言葉です。

ジョージ・ウインター　すぐ警察を呼ぶのと同じだ。ああ、何てこった！ とんでもない。

ジェイムズ・フォード　銀行が閉まる時間までに金があそこになければ、わたしは合状を申請します。

ジョージ・ウインター　それがどういうことか分かりますか？ 裁判になるということ、そのあとは――そのあとは、刑務所行きということですよ。

ジェイムズ・フォード　わたしは提案した以上のことはできません。

この最後の言葉、ジェイムズ・フォードの口調に表れている非常に気の毒がつている気持ちと決意のほどが、ジョージ・ウインターにとっては顔面に一撃をくらったように効いている。ジョージ・ウインターは、突然びくつとすると、謙虚さをかなぐり捨てて抑えきれずにかつとなる。ジェイムズ・フォードに向かって目一杯軽蔑を込めてのしりしながら怒りをつのらせ、最後の言葉は決定的な怒りの叫び声で終わる。

ジョージ・ウインター　ひどい、そんなの恥ずべきことだ。ひどい偽善だ。貴様が気にしているのは、俺が金を取ったかどうかじゃない。自分の身が心配なんだ。そして、貴様は俺を妬んでる。嫉妬してるんだ。貴様がずっと俺のことを嫉妬してたのは知ってたよ。俺が見破れなかったとも思うのか？　俺が来るまで、貴様はミドルプールじゃ中身の無い見かけだけの人間だったんだ。男らしく俺と戦わず。俺に失敗させるチャンスを持ちながら、味方してただけなんだ。俺がいなくなったら、自分の場所を持つと思うてる。なぜ、俺と同じようにメンバーであるべきじゃないんだ？　それは。つまり。貴様が下らんキリスト教を信じて、正直という言葉の意味も分からずに繰り返しているからだ。くそ！　くそっ！　くそっそれが！

ジェイムズ・フォード　「静かに」言い過ぎですよ。決してあなたには分からないでしょう。生まれつき不正直な人間がいるように、生まれつき正直だから、それよりほかに仕方がないので、たとえそれで損をしても正直でいる場合があることをあなたは理解していません。

ジョージ・ウインター　そんなの子供じみてる。

ジェイムズ・フォード　あなたは、十人のうち九人は悪党だと思って世の中を渡ってきました。あなたは、最後には十人目と出会わなければならないことを忘れていきます。

この言葉を耳にすると、ジョージ・ウインターははっとして、フォードをまじまじとおびえた目で見る。手を額に当てて、思い出そうとする。

ジョージ・ウインター 「ほとんど自分に向かって」前に言ったのは誰だったか？

間がある。

ジェイムズ・フォード さようなら、ジョージ。わたしの約束は生きています。

ジョージ・ウインター 「怒りが収まらない思いで」そんな約束は俺にとっちゃ何にもならん。俺はわなにはまったネズミみたいなもんだ。俺がもぐのを見て好きなら楽しむんだな。

ジェイムズ・フォードはちらつとジョージ・ウインターを見てから、そつと出て行く。ジョージ・ウインターはひどい痙攣のような震えに襲われる。彼はおこりにかかった人間のように震える。頭を素早く回転させて、彼はもはやごまかしても助からないと悟る。彼は自分と同じように強い一つの性格という出口のない壁に直面しているのだ。すぐに、キャサリンが部屋に入ってくる。

ジョージ・ウインター 一体何の用かな？

キャサリン フォードさんの帰るのが聞こえたわ。今、話してもいいかしら？

ジョージ・ウインターは努めて落ち着いて見えるようにする。

ジョージ・ウインター 何かな？

キャサリン 選挙も終わったことだから、もうわたしは必要ないわね。わたしは約束した役割をちゃんと実行したわ。

ジョージ・ウインター 「気が遠くなったかのように手を頭に置いて」何のことを言ってるのか分からんが。

キャサリン わたしに對するあなたの数々の無礼をわたしは大目に見てきたし、今は無力で何もできない。だから、あなたはわたしは何らかの形であなたの邪魔をすることをおそれる必要はないわ。「ジョージは振り返ってキャサリンを見る。ジョージはやつとキャサリンが言おうとしていることを理解する。」でも、耐えがたい屈辱にわたしがこれ以上身をさらさなければいけない理由はないわ。もうあなたに強要されたことは全部やったから、わたしがあなたの許を去るのには今がちょうどいい時だっことを言いに来たの。明日の朝早く、友達のバーバラ・ハーバートと一緒にヨーロッパ大陸に向けて出発して、戻らないわ。どんな説明でも、あなたが必要だと思う説明を考えればいいし、わたしがそれを否定することはないと確信してくれていいわ。あなたが起きる頃には、わたしは行ってしまっています。あなたがくれたつまらないものは全部わたしの部屋に置いて行くわ。あなたにもらったものは何一つ持って行きたくないの。

ジョージ・ウインター 「歯をくいしばって」服も置いて行くのか？

キャサリン 「肩をすぼめて」もう何も言うことはないわ。あなたはわたしの邪魔をしないと信じています。わたしの方はあなたに面倒をかけるようなことはしないと約束するわ。

キャサリンは、ジョージ・ウインターがまだ何か言うことがあるのか確かめるためにしばらく待たが、彼が黙ったままなので、ドアの方に向かって行く。彼女が今にもドアから出ようとする時に、彼はどっと大声で笑い出す。彼の笑い声は段々と大きくなる。激しく、甲高く、ヒステリックになる。怒鳴るように笑う。キャサリンは、すでに半ば怯えており、訳も分からないまま、部屋の中へ一、二歩戻る。

キャサリン どうしたの？ ジョージ、ジョージ！

ジョージ・ウインターはまだ笑っている。それから突然すすり泣きを始める。完全に身を崩して、こらえきれずに涙を流して泣き始める。

キャサリン 「ジョージ・ウインターのところに戻りながら」ジョージ、何なの？

ジョージ・ウインター 頼むから、一杯飲ませてくれ。

キャサリンは、急いでテーブルの上にある半分空のシャンパンのボトルを取りに行き、ワインを一杯注ぐ。ジョージ・ウインターは一気に飲む。

ジョージ・ウインター 「正気に返りながら」こくがあるね、こいつは。こくがある。

またジョージ・ウインターは、どっと笑い出す。

キャサリン 何なの、ジョージ？ わたしが行ってしまうからじゃないでしょ？

ジョージ・ウインター 君が行ってしまうからって、僕には全然関係ないね。僕はしてやられたんだってことさ。あのペテン師で悪党のレイシヤム家にととう一杯くわされたんだ。あの記事が功を奏して、僕は悪者だ。君はもう自分の道を行けよ、ケイト。結局、君の勝ちだ。

キャサリン 訳が分からないわ。

ジョージ・ウインター ジェイムズ・フォードは債券がなくなったのを知っている。そして、ロンドン警視庁に行くつもりだ。

キャサリン ええっ！ それじゃ、お父様も？

ジョージ・ウインター いや、今僕は君のお父さんのことなんか構ってられない。お義父さんも、自分の身は自分で守らなきゃ。僕だって、自分のことを考えるためにやるべきことがたくさんあるんだ。

キャサリン わたしはどうしたらいいの？

ジョージ・ウインター ジェイムズ・フォードは債券を返すのに明日まで時間をくれたけど、できっこない。無理だ。できっこないのは、彼も分かっている。いまいまいしい偽善者め！ フェアにやって負けたんなら、文句は言わないが、こんなのは実に大人気ない。しかも、ちよūd僕が主導権を握った時に。あいつは不正を見て見ぬ振りをすることができないんだ。子供だよ。僕はずっとあいつを信用できなかった。殊勝なふりして道徳家ぶりやがって！ あいつは僕に嫉妬しているんだ。僕の地位を奪うために、僕を高い地位から蹴り落としたいのさ。僕はあいつのことをよく知っている。何から何まで分かっているんだ。あいつは言った通りにやるだろう。「怒って嘲笑いながら」それがあいつの義務だからな。

キャサリン ものを売ることではないの？ わたしの宝石があるわ。

ジョージ・ウインター 大海の一滴にしかならない。相場が下がっている時に、どうやって八万ポンド稼ぐんだ。

キャサリン 「恐れおののいて」あなたが逮捕されるっていうの？

ジョージ・ウインター 「追い詰められた野獣のように、だらしなく吠えるように」駄目だ。僕がそれに耐えられる思うのか、それに裁判や——そのほかあらゆることに？

キャサリン 「手を固く握り締めながら」免れる可能性はないの？

ジョージ・ウインター ベネットは自分の身を守るために僕を裏切るだろう。あいつのことはよく分かっている。信用できる奴なんか一人もないんだ。すぐに始末してしまふしかないな。そのチャンスがある間に逃げなければ。

キャサリン 逃げられる望みがあると思う？

ジョージ・ウインター 僕なりに。あるよ。

キャサリン 「理解して」ああ、ジョージ、そんなことしないでしょ。

ジョージ・ウインター ほかにどうしろと言うんだ？ アメリカへても高飛びして、六か月以内に二人組の刑事に連れ戻されるとしても？ とんでもないよ。

キャサリン ここにいて面と向かった方がいいんじゃない？ 悪いことをしたら、罰を受ける入れるべきじゃない？ あなたはまだ若いんだし。

ジョージ・ウインター 情状酌量はないだろう。となると、十年だ。そして、僕が出て来る時は、ここそ隠れて、半端な仕事を、それもベネットみたいに、自分の身を危険にさらそうとしない他人の汚い仕事をするということだ。そんな生活が僕にとってどれだけの価値があるっていうんだ？ 僕は権力や、評判や、魅力が欲しい。通りで人から指さされたかった。望みが高すぎて、一番高いものでなきゃ満足できなかつた。

キャサリン まあ、ぞっとするわ。

ジョージ・ウインター なあ、ケイト——本心からのお願いだ——僕を愛していたのなら、僕にけりをつけさせたいと思ってくれないだろうか？

キャサリン 「ジョージ・ウインターを長いこと見つめてから」ああ、わたしに頼まないで。

ジョージ・ウインター 僕のためにやってほしいことがあるんだ。君に頼むのはこれが最後だ。

キャサリン できるだけのこととするわ。

ジョージ・ウインター 半時間必要なんだ。どんな口実を言われても、誰も来させないでくれ。

キャサリン 「恐怖の叫び声を上げて」今すぐやるつもりじゃないわよね？

ジョージ・ウインター 僕はジェイムズ・フォードを信用していない。もうロンドン警視庁に行ったかもしれないんだ。ひよつとすると、もう刑事がここに来る途中かもしれない。

キャサリン 彼は頼りになるって、あなたが言ったのよ。

ジョージ・ウインター ああ、僕は怖い。だけど、怖がってみたところでどうなるんだ？ も

うへとへとだ。多分、明日になったら、もう勇気が出ないだろう。

キャサリン ああ、恐ろしい。

ジョージ・ウインター 「笑って」そんな、君は自由になるんだ。

ジョージ・ウインターはテーブルのところまで行って、自分でブランデーを一杯注ぐ。

ジョージ・ウインター 僕は自分で酒を作るんだ。悪い癖だね？ 君が喪服を着たらうっとりするだろうね。いつも似合ってたもの。

キャサリンは言葉にならずにすすり泣く。ジョージ・ウインターは肩をすくめながら、ドアに向かって行く。

ジョージ・ウインター 誰にも僕を邪魔させないって、約束してくれるね？

キャサリン 分かったわ。

ジョージ・ウインター 半時間したら、君も寝ていいよ……。僕みたいにくっすり眠れるといいね。

ジョージ・ウインターは出て行き、ドアに鍵をかける。キャサリンは両手で顔を隠し、恐ろしさでうめく。すぐにオドンネルが入って来る。キャサリンは足音を聞いてびくくつとする。

キャサリン あなたはもう寝たんだと思ってたわ。

オドンネル すっかり目が覚めてしまつて。本があるか見に来たんです。

キャサリン 「テーブルを指して」あそこにあるわ。

オドンネル ひどく疲れているみたいですね。どうして寝ないんですか？

その時、下の広場で叫び声が聞こえる。ウインターの名前を呼ぶ歓声である。

キャサリン 「怯えて」あれは何？

オドンネル 「窓の方に行きながら」ああ、もう閉店時間です。ハブから追い出された熱狂的な政治家たちです。

「ウインター、ウインター」と名前を呼ぶ叫び声をする。

キャサリン ああ、追い払ってちょうだい。耐えられないわ。

オドンネル 「窓を開けて外に向かって大声で叫びながら」ウインターさんはもう寝ました、みなさん、ぜひとも彼を見習ってください。

オドンネルは浮かれ騒ぎの笑い声と歓声を浴びながら窓を閉める。群衆は歌いながら去って行く。キャサリンは両手を握り締めて叫ぶまいとする。

オドンネル 「笑って」彼らは素晴らしいですよね？

キャサリン さあ、もう本当におやすみになって。

オドンネル 「テーブルから本を一冊手に取りながら」分かりました。多分、明日も忙しい一日になるでしょう……。本当に、今日は今までで一番幸せな日だと思います。人生は楽しいですよね？

キャサリン 「奇妙な目つきでオドンネルを見て」そうね。

オドンネル おやすみなさい。

キャサリン 「突然びっくりして」ああっ！

オドンネル どうしました？

キャサリン 何か聞こえた気がするの。

オドンネル 聞こえませんでしたよ。不思議なことに、ホテルは死んだように静かです。今晩、あなたが列車の音に邪魔されないといいのですが。

キャサリン おやすみなさい。

オドンネルは出て行く。キャサリンは振り返って、ジョージ・ウインターの部屋のドアを見る。ドアに向かって一歩踏み出す。

キャサリン ジョージ！

キャサリンは耳を澄ますが、返事はない。恐怖の身振りで顔をそむける。フレッド・ベネットが部屋に飛び込んで来る。

ベネット 申し訳ありません。誰かがいるとは思わなかったもので。社長はどこですか？

キャサリン 知らないわ。

ベネット すぐに会いたいのですが。

キャサリン 今夜は誰とも会わないわ。

ベネット わたしには会うでしょう。

キャサリン 誰にも煩わされないようにしてくれと言い置いて行ったの。

ベネット 生きるか死ぬかの問題なんです。

キャサリン 「不安で震えて」本当に、彼には会えないのよ。

ベネット 部屋にはいないんですか？

キャサリン そうよ。

ベネット 「ドアの方に行きながら」確かですか？

キャサリン 「ベネットの邪魔をしながら」彼は疲れきってるの。休ませてあげてもらえな

いかしら。

ベネット ああ、でも、あなたは何かあったか知らないから。金鉱は大丈夫なんです。お願

いだから、彼のところに行かせてください。

キャサリン 「即座に」どういうこと？

ベネット 「急ぐあまり言葉を互いにつまずかせながら」社長はマクドナルドを信じて、新しく掘られた立坑を彼に見せていませんでした。そこには金がいっぱい詰まっています。レイシヤム家にごまかされていただけなんです。わたしは社長に言われた通りのことをやりました。わたしが株の売り注文で市場をいっぱいにさせると、市場が閉まる時間になってマニー・レイシヤムがわたしを呼び出しました。変だと思いました。わたしの方が賢いですから。彼は社長を信じると言いました。彼は明日、大量の株を額面で買うでしょう。即金で払うつもりです。そうなれば、我々は無事です、無事です、無事なんですよ。

キャサリン あなたが言いたいの……。

ベネット 「遮って」そのために、社長は十年間闘ってきたんです。やつと辿り着きました。

ひと月で株は望むだけの価値になるでしょう。それは富、安泰、すべてを意味します。

キャサリン それで、ジョージは……。

ベネット 最高の地位にいます。いるべきところにいるのです。十年以内に、上院議員になるでしょう。彼にはあなたの口から言いたくありませんか？

キャサリンは一瞬ためらう。自由になるチャンスがもう一度自分からすり抜けていくのを悟る。一瞬、自分と戦う。たちまち、一生が、過去と未来が彼女の前に現れる。

キャサリン 彼がどこにいるか知らないのよ。

ベネット 本当ですか？

キャサリン 喫煙室に下りて行ったけど。

ベネット 彼を見つければ。

ベネットはドアに向かって走るが、出て行くまでに、キャサリンの気持ちは急に変わる。彼女は叫ぶ。

キャサリン 違うの、待って！ 彼は寝室にいるの。ああ、早く！ 急いで！

ベネットは驚いて立ち止まり、キャサリンを見る。キャサリンはドアのところに走って行き、両手でドアを叩く。

キャサリン ジョージ、ジョージ、ジョージ！ ドアを開けて！ ジョージ、ジョージ！
ベネット どうしたんですか？ どういうことですか？

キャサリン ジョージ！ もう大丈夫よ。お願いだから、ドアを開けて。「ベネットに向かつて」ああ、ドアを開けてくださらない？

ベネット 全く、彼は何をしているんですか？

キャサリン ジョージ、ジョージ

ベネットはドアに肩を当てて押し開けようとする。ドアは開かない。

ベネット 社長、わたしです。

キャサリン 鍵がかかっているわ。窓ガラスを割ってちょうだい。

キャサリンは手につけているブロンズの装身具をベネットに渡し、ベネットはそれで鍵の上の窓ガラスを割る。ガラスはこっぴみじんになる。ベネットは手を入れて鍵を回す。そして、ドアを開けて飛び込む。

ベネット 彼はいません。

キャサリン いるはずよ。いるはずだわ。

ベネット 窓が大きく開いています。出て行ったのに違いありません。

キャサリン 行けるところなんかないわ。ニヤードほどの庭と線路しかないんだから。大声で呼んでみて。

ベネット 庭にいるかもしれません。

ベネットはジョージ・ウインタールの部屋のドアを通って外へ走る。ベネットが出て行くと、エッチングが。ジャマにガウンを着て上手から入って来る。

エッチング 全く、一体何なんだ、この騒ぎは？ 一晩中、窓の下を列車がガタゴト走るのはもうたくさんだ。本当に。

キャサリン ジョージはどこなの？ お父様、お父様！

エッチング 一体どうしてわしが知っていると云うんだ？

ベネットが戻って来る。

ベネット 庭のどこにもいません。

キャサリン ああ、恐ろしい！

エッチングム 一体どうしたんだ、ケイト？

キャサリン ああ、何てこと、何てこと。

ベネット 社長が見つかりません。

エッチングム 多分、散歩にでも出かけたんだろう。

キャサリン 線路に沿って？

テディー・オドネルが走って入って来る。ジャケットとベストを脱いでいる。

オドネル いやはや、実に恐ろしい事故を目撃しました。男が線路の上で轢かれたんです。

キャサリンは恐怖のあまり鋭い悲鳴を上げると、ひざまずきながら顔を覆う。

終わり

ここに訳出した戯曲『十人目の男』(*The Tenth Man*、一九一三年初版)は、イギリスの作家サマセット・モーム(*Somerset Maugham*、一八七四〜一九六五)の手によるもので、本邦初訳であります。

モームと言っても、今の日本では小説の『人間の絆』(*Of Human Bondage*、一九一五)と『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*、一九一九)くらいしか知られていませんが、もともとイギリスでは劇作家としてブレイクした作家でありました。また、没年九十一歳という長命だったこともあり、戯曲三十二編のほか、長編小説二十編、短編小説約百二十編、エッセイ・旅行記十二編など、非常に多作でありました。恐らく、ビートルズ以前に最も稼いだイギリスの文化人の一人でしょう。医師免許を持ち、秘密諜報員としての経歴もあります。ゲイでありながら結婚歴もあり、一人娘をもっています。

日本では、昭和三十年代に新潮社から翻訳全集が出版され、モーム自身も来日して一大ブームを巻き起こしました。その後、モームの英文は英語教材としてもはやされ、大学入試問題、英文講読のテキスト、入社試験問題などに多用されました。その当時に青春時代を送った「団塊の世代(第一次ベビーブーム世代)」から上の世代は多かれ少なかれモームと接点があるはずです。

モームは、一九〇〇年代初頭にイギリスで劇作家として一躍劇壇の寵児となり、一九〇八年には、ロンドンのウエスト・エンドの劇場街で『フレデリック夫人』(*Lady Frederick*)、『ジャック・ストロー』(*Jack Straw*)、『ドット夫人』(*Mrs. Dot*)、『探検家』(*The Explorer*)のモーム作の四つの戯曲が同時に上演されるほどでした。『十人目の男』はその翌年に執筆され、さらにその翌年、一九一〇年二月二十四日にグロープ座で初演されて、上演回数は六十五回を数えました。主な配役は、ジョージ・ウインター役が Arthur Boucher、ジェームズ・フォード役が A. E. George、ジョージの妻キャサリン役が Francis Dillon でした。その後、一九三六年には、John Lodge 主演で映画化されています。

モームがこの『十人目の男』の着想をどこから得たかは不明ですが、得意としていた喜劇ではなく、悲喜劇であるという点は興味深いところです。また、善人の中に潜む悪、悪人の中に潜む善を見出すことに喜びを感じていたモームが、悪人である主人公ジョージ・ウインターを最後まで悪人として描き(最後にわずかながら妻キャサリンに思いやりを示す場面はありますが)、勧善懲悪的な結末にした点は異色であると言えます。

なお、この翻訳に当たっては、三木則尚氏と角張由美子にご協力いただきました。また、金融関係の事柄については沖津正恒氏に、医療関係の事柄については高橋弘昭氏に教えを乞い、この翻訳を完成することができました。この場をお借りして心からお礼申し上げます。